負擔するを以て後者の生産費多額なるは明かなり當社の如き運轉資本の大部分を借入金に賴るものは粗糖と白糖とを問はず一般に他社に比し生産費を增大せり故に本項に於ては又た白糖を製造する場合粗糖生産費に超加する費用のみを記載する方反つて參考の資となるべし。

炭酸及亞硫酸飽充併用の場合

白糖一俵に付き

石灰石及コークス	八錢
補助燃料增加	拾貳錢
硫黃	壹錢
勞銀增加	五錢
工場用品	貳錢
計金	貳拾八錢

前年度同上費用

一俵につき	五拾貳錢四厘

右二、三、四固定資本及生産費に於て精製糖との比較（精糖とは骨炭を使用する場合を云ふ）

耕地白糖設備固定資本千噸能力貳拾五萬圓

甘蔗收穫の關係上臺灣に於ける工場は白糖を製造せざるも一定能力の工場を有せざる可からざるを以て此處には白糖製造

に對する餘分の固定資本のみを記載するを至當とす。

精製糖工場固定資本

原料甘蔗一千噸に相當する精製能力即ち原糖百噸工場　約百五拾萬圓

粗糖工場に要する壓搾機を缺くも擴大なる骨炭濾器及骨炭再燒爐に多量の骨炭を要するを以て大約粗糖一千噸工場と同額の固定資本を要す。

生産費

生産費を計上するには先づ以て原糖代金を假定し算出するを要す。

本期同糖と粗糖會社間に於て擧りたる九十六度原糖は百斤に付き拾圓貳拾五錢なりと聞く。

昨年度原糖實買價格は同く九圓貳拾錢なりき。

今假に之れを拾圓と假定す。

耕地白糖の場合の生産費

原料代	拾圓
製造費	貳拾八錢

之れより白糖九十七斤を生産するを以て白糖百斤に付

生産費	拾圓六拾錢
消費稅	九圓

合計　拾九圓六拾錢

精製糖の生產費

原料糖代　拾　圓

製造並に營業費　壹圓參拾錢

製造費は大里工場曾て鈴木商店經營の時は約七拾五錢神戸工場を湯淺商店にて經營したる時は八拾五錢內外なるも何れも營業費の大部分は本店にて負擔したる傾あり若し臺灣粗糖會社が別に精製糖工場を設置するものとすれば前記兩店に於て負擔したる一部の營業費は無論生產品の負擔となるを以て之れに五拾錢を增し壹圓參拾錢と假定せり、聞く所によれば同糖兩三年前の生產費は略之れに近きものあり而して神戸製糖會社時代に於ける經濟的製造法によれば以上の費用を以て

第五種糖　九十三斤

第四種糖　四斤五分

蜜　三　斤

なり故に前記製造費を判然區別して五種百斤に幾何四種百斤に幾何と計上する事不可能なり然れども五種及四種糖の合計したるもの百斤の生產費約拾壹圓五拾九錢となる。

計算の複雜を避ん爲め蜜は耕地白糖及精糖兩者共に省略す。消費稅は課稅方法根本より相違あり卽ち前者は製品稅たるも後者は所謂協定稅にして一種の原料稅なり然れば前記精製糖の生產品が法律の明文に示すが如く正當に課稅を受くるものとせば八圓九拾五錢を負擔し卽ち生產費合計貳拾圓五拾四錢なるを以つて之れを前計算に基き五種及四種平均百斤に改算する時

は八圓四拾參錢にして生產費合計は

貳拾圓貳錢

となる。

而して以上二者の各自販賣價格過去三ヶ年間の平均

耕地白糖　貳拾圓八錢

精製糖　貳拾壹圓拾錢

之れより各自の生產費を減じ純益を算出せば

耕地白糖（白糖としての利益原糖の利益を含ます）一俵につき四拾八錢

精製糖　一俵につき壹圓八錢

となるべし。本年の如き世界糖價昂上し精製糖原料買入價格は反對に引き下げられたるを以て原糖として供給せんより寧ろ耕地白糖として市場に提供するの利益なるは何人も疑を容れざる所なり今試みに本期耕地白糖の賣價を平均すれば優に貳拾壹圓以上となるべし以て耕地白糖が今日迄如何に壓迫を被り他の粗糖會社の犧牲となり居りしかを知るに足らん

白糖と精製糖との分析比較

未だ正確に兩者を比較分析したる事なく成書又た兩者の分析表を示さず然れども概略を示せば

精糖　双目糖分　九九、八%內外

同　上　車　糖　九八、%內外

耕地白糖　双目	九九、七%内外
同　上　車糖	九七、%内外

白糖と粗糖との製造上に於ける純益比較

販賣價格は過去數年間の平均を基礎とし論するを要するを以て左の如し。

▲白糖の製造費及過去三ヶ年の販賣價格

耕地白糖一俵の生産費	七圓八錢
同　上過去三ヶ年平均販賣價格	拾壹圓八錢
消費税九圓を加へて合計	貳拾壹圓八錢
此の差引利益一俵につき	四　圓

▲粗糖の製造費及過去三ヶ年の販賣價格

粗糖一俵の生産費	六圓五拾錢
同　上過去三ヶ年間の販賣價格但し直接消費糖正味百斤價格	拾圓八拾參錢
消費税五圓を加へて拾五圓八拾參錢となる	
此の利益差引四圓參拾參錢	

即ち直接消費糖に比較すれば白糖を製造するは一俵に付き參拾參錢の不利となるも原と白糖製造の目的は生産過剰糖蟲分として原料糖を精糖會社に供給する代りに自社に於て白糖となすにあれば、白糖の利益を見出さんと欲せば宜しく過去三ヶ年間の原糖平均價格を以て販賣價格と見做さゞる可からず即ち過去三ヶ年間平均原糖價格九圓（但し四十三年度總督府補助金壹圓六拾錢を含む）なるを以つて之れを白糖に對する粗糖の價格と見る時は粗糖の利益は一俵貳圓五拾錢となり白糖は四圓を利する事となる。加ふるに自社に於て其の割當て原料糖全部を白糖となすを得ば四十四年度の如く生産劇減したる場合原糖不渡に對する損害賠償金の如きは相互相殺するを以て現今の支出を要せざる一大利益あり然れども本社の如きは一方に耕地白糖の制限を加へられ一方に於ては此の不利なる賠償金を支出せしめらるゝ之れ畢竟當局に於て耕地白糖を精糖と見做さず消費税迄に不公平を忍ばしむるを以て延て精糖側に於ても其の同一の取扱をなさゞるに因る然れども年々之れが製造の中止又は生産制限を云々するは暗に精糖に對する强敵たるを恐るゝものたるや逆堵し易き事實なり。

精製糖と競爭上利害の要點即ち白糖の有利なる點及び不利なる點を擧げ如何なる點に於て競爭の餘地を存するやを分明ならしむべき取調

耕地白糖の有利なる點

（イ）固定資本一千噸工場に對し貳拾五萬圓なるも若し精製糖工場を別に置くものとすれば百五拾萬圓内外を要す之れ金利の點に於て有利なる一つなり

（ロ）品質精糖に比し稍々劣るも生産費少額なるを以て廉價に供給し得、本邦人生活の程度より考ふるも高價なる精糖より寧ろ廉價にして使用に堪へ得るものを要求す。獨逸米國等に於て耕地白糖の年々發達するは此の消息を語るものに外ならず、要は產額の問題にして相當の產額を出すに至らば或程度迄精糖の販路を奪ひ且つ國民生活の昂上に伴ひ現今の

粗糖消費の幾分は之れに代はるものと思考せらる卽ち精糖は單に加工上の利益なるも耕地白糖は原糖の利益と外に少額なりと雖も白糖に對する利益あり故に世界糖價に伴ひ價格引下の餘地多し。是れ精糖と競爭し得る利益の二つなり

其の外過剩糖を海外に輸出する場合に於て協定稅率に均霑し能はざる耕地白糖は精糖に比し利益なきも粗糖を輸出するには遙かに優れり。

而して耕地白糖の不利なる點

（イ）協定稅率の恩典に浴し能はざる事

前記載の如く稅金に於て內地消費已に百斤に付き五拾七錢の差あり海外輸出の場合には更らに九拾貳錢の差あり。

本期我社の海外に輸出したる白糖は四千三十俵にして其の平均價格は拾圓參拾錢に相當す之れを內地消費平均貳拾圓八錢に比較すれば如何卽ち內地消費は正味拾壹圓八錢なるを以て此の差七拾八錢は損失となるも前記協定を受くるものとせば反つて內地に賣らんよりは寧ろ輸出するの利益となるべし。若し又た永久之れに均霑し能はずとせば寧ろ協定の恩典廢止を希望す此の保護の在る限り海外に於ては遺憾ながら精糖と競爭するの餘地なし、是れ耕地白糖の尤も不利なる點の一つなり。

（ロ）精製糖は一年中の營業なるを以つて每回販賣の都度新鮮なる品を引き渡すの便あるに反し耕地白糖は粗糖製造期間に製造を了せざる可らざるを以て多少時日を經過したる製品を引渡すを免れず爲めに平均價格を降下するの不利あり。

今四十三年以後の同社の白糖生產高を記さば左の如し。

明治四十三年度　白　双　目　六百五十九俵

右は精糖工場に於て試製

明治四十四年度　白糖工場建設中

大正元年度　白　双　目　一萬九千三十七俵

白　車　糖　二萬五千八百八十五俵

本期白糖工場能力は七百噸にして優に十萬俵以上を製造し得るも粗糖聯合會員として原料糖供給をなせしを以て精糖側より本期耕地白糖の製造を五萬俵以下と制限せらる。

大正二年度　製造せず

前後未曾有の暴風雨の被害にて原料甘蔗減收の爲め生產不足となりしを以つて單に粗糖の製造をなせり。

大正三年度　白　双　目　八萬九百六十一俵

白　車　糖　一萬九千九百四十一俵

本期に於て旗尾工場白糖設備完成したるを以て同社白糖生產能力は合計千九百噸となつた然るに本期は未だ前年の被害回復せず原料甘蔗の收穫尙ほ不充分なりしと一方に於ては前々期と同樣精糖原料供給の關係より本期の白糖生產額を十萬俵と制限せられた、同社は此の期に

於て耕地白糖は已に試製の時代を經過したれば一つの精製糖工場と見做し同社割當て原料糖は全部白糖となすの權利交付方を精糖側及び聯合會に求めたるも許さず幸か不幸か恰も原料甘蔗の收穫減じたるを以て岸内白糖工場を休止し試運轉の序を以て旗尾工場に於て前記の製造をなした。

大正四年度　白双目白車合計十八萬俵

聯合會對精糖側の原料糖供給交渉條件には同社本期白糖の製造中止一條件となり不得已んば生産の制限をなさんとしたが價格不調の爲め交渉破裂となり聯合會は自由處分に決せしを以て耕地白糖の生産亦た從つて自由となつたけれども時期已に遲し原料の大半を消費したる後自由處分に決したものだから現在能力三十三萬俵なるも前記數量以上には生産の餘地なきに至つたのである。

（へ）同社白糖の販路

同社製品は内地に於て左の割を以つて仕向けらる。

大阪、東京　各四〇％

名古屋　一〇％

下ノ關　一〇％

又た海外輸出先左の如し、（但し前期を指す）

香港　二千六百八十俵

上海　千三百五十俵

其の外前期には倫敦、印度及米國より千噸乃至四千噸の注文ありしも生産不足の爲め謝絶したが今期は海外各地方に輸出しつゝある。

（ト）經營方針の特徴、資産及營業成績

同社の方針としては努めて冗費を省き常に必要事項に關する調査研究を怠らざると共に苟も生産費の低減品質の改良等の設備に對してはこれを斷行するに躊躇せず、その他原料改良の施設等についても總て積極的方針を採つて居る。

之れは旗尾工場の經營、原料改良の努力、新式機械の据付、製造法の如きも常に絶間なく進歩して居るのでも明る。總ての點が他より一歩々々先じて居る。彼の早くもノーリット法を採用せんとするが如き或は最近特許出願中の新製造法の如き何れも見るべきものである。兎に角同社の遣り方は積極的である。金も相當にかゝるだらうが其の効は亦た著しきものであつて結局

我が糖界に貢獻する處鮮からざるものがあると信ぜられる。

而して同社の資産狀態を見るに(前期)

土地	(工場敷地其他七十一口四千五十甲餘)	百九萬九千餘圓
建物	(工場建物其他百九十七口)	百貳拾六萬八千餘圓
機械	(壓搾機械其他九十五口)	四百貳拾貳萬圓
鐵道	(線路百五十一哩餘各車輛千八十四輛)	百五十四萬九千餘圓
製品	(砂糖及糖蜜)	拾參萬貳千餘圓
委托品其他		參百參拾五萬參千餘圓

其の外農場、農具、貸付金、貯藏品預金等貳拾五萬圓を算す。同社は外國資本の借入もあるが右の資産狀態に見れば何れも健實なる固定資金として使はれて居る事を證して居る。

亦た積立金は法定積立參拾四萬貳千圓、別途積立七拾貳萬圓に達し、建物機械鐵道等の固定資本に對しては創立以來現に百萬圓を償却し外に五萬圓の積立を有つて居る。營業成績は毎期良好で利益を潤澤に擧げて居る。配當は昨年度普通一割特別四分合計一割四分であつた。

(チ) 經營の人々

同社の幹部は

取締役社長	荒井泰治	常務取締役	槇哲	
常務取締役	藤崎三郎助	同	橋本眞夫	
同	高橋是賢	同	岡田祐二	
同	佐々木幹三郎	同	數田輝太郎	
監査役	安部幸兵衛	監査役	岩崎愈十郎	
同	劉紳燻	同	原修二郎	
同	青地玄三郎			

(リ) 同社の大株主

前期決算期に於ける千株以上の大株主左の如し

一〇、一二〇	安藤逢二	七、〇一〇	吳錦堂
五、七〇〇	安部幸兵衛	四、〇八五	荒井泰治
三、四〇〇	槇武	三、三七五	藤崎三郎助
二、六〇〇	槇哲	二、〇〇〇	小菅劍之助
一、七〇〇	福井俊	一、五九一	小濱國三
一、四六五	安藤逢彌	一、四五〇	川喜田久太夫
一、四〇〇	原富太郎	一、三五〇	安部幸之助

一、二〇〇	川崎榮助	一、二〇〇	田中善助
一、一五〇	齋藤福之助	一、一〇〇	仁壽生命保險會社
一、〇五〇	伊藤義五郎	一、〇〇〇	伊藤恕一
一、〇〇〇	濱口吉兵衛門	一、〇〇〇	川崎貯蓄銀行

大日本製糖會社

一、同社經營の概觀

精製糖製造の大會社として東京、大阪、門司に精製糖工場を置き、臺灣他里霧に精製糖原料用の粗糖工場を置き千貳百萬圓の資本を擁し極めて大手廣に經營の歩を進めて居る。

本社は東京工場と同一地卽ち東京府南葛飾郡砂村元治兵衛新田にあり、東京出張所は商業取引の中心蠣殼町にあつて、名は出張所と云ふも事實は同社經營の根據で、各地に擴つて居る工場の業務を總攬し、兼て市內、關東、北海の全部並に東海、北陸の販賣を支配して居る。東京工場は昔、太田道灌江戶城を修するの時、開鑿したと云ふ小名木川の沿岸に在り隅田川に通じて舟楫の便宜しく、原料や製品の集散自由である。大阪工場は淀川に臨み、近畿、中國、北陸、

四國の販路を控へて、海陸の運送亦た共に便利である。大里工場は北九州の要衝に當つて關門海峽に臨んで居る、朝鮮、滿洲、支那に對し輸出上便利の地位にあり、又た石炭の產地に在る事として燃料に對し便利を得て居る。

臺灣工場は臺灣の南部嘉義廳下他里霧にあり、工場設備甚だ秀で其の器械の精巧なる事は人の知る處である、甘蔗採取區域約五萬甲に及び私設鐵道縱橫に走つて原料の運搬に便利を得て居る。

二、沿革一波一瀾

吾國が大精糖輸入國より轉じて近來は其の輸入を杜絕せしめたのみならず進んで輸出するに至つたのは目樣しい糖業の發展と言はねばならぬ。而して此の發展は殊に大日本製糖の如き精糖製造當局者の努力に因るものと認めねばならぬ。洵に其の努力は國家の經濟問題を解決したものである。而して今や滿洲、支那、香港、露西亞、印度、英佛迄販路を擴張して世界的舞臺に立つて居る。

如く國家の爲め奮鬪した大日本製糖も今でこそ基礎不動の大會社となり益々發展しつゝあるが其の好く今日を效せし歷史を探れば一波一瀾、甚だしき變轉、艱苦、不幸に遇ふて居る。以下

其の沿革の大略を述べる事としやう。

明治二十七八年戰役後、企業界高潮の時に方り、鈴木藤三郎氏經營の製糖場は、時勢の要求に應じ、糖界統一の目的を以て日本製糖株式會社を組織した、資本僅かに參拾萬圓なりしも、その抱負に於て一頭地を拔きたるは當時斯界の是認する處である、是れ明治二十九年一月にして現大日本製糖會社の前身である。同社は當時砂糖精製を主とし兼ねて氷糖の製造に從事したが、經營者の苦心努力は一方ならざるものがあつたであらうと思はれる。二十九年に發表せられた第一回の營業報告に據ると此の半期間の利益金八千參百七拾貳圓四拾錢壹厘で、一割の配當をなした。第一回の成績としては美事なる出來榮である。然し一方を顧れば外國の輸入糖は市場に大跋扈をして居り、殊に協定稅率があつた爲めに、之れと對抗する事は一通りの苦心ではなかつた。其の後三十年鈴木氏歐洲より歸へり、大に規模の擴大を計り、遂に同三十二年資本金を貳百萬圓に增加したが、以來は順調に進んで事業の發展見るべきものありしが、三十五年に至りて一つの頓挫に遭遇した。卽ち砂糖消費稅、酒精及酒精含有飲料稅法の實施の爲めに、忽ち外糖の見越輸入を誘致し、又車糖の模造流行して、糖界一時混亂の狀を呈したるに、更に財界逼迫し、商況の不振は、其の頂點に達した、之れに加ふるに、時恰も外糖の暴落を傳へたれ

ば糖界益々闇黑の境に陷り了した斯くの如き各種の惡材料は相原因して、同社の成績の不良を成しのも、亦た已むを得ざる處にして、爲めに無配當の悲境を續ること三十五年下半季より三十六年下半季の三期に及んだ。然れども堅忍せる同社は此の災厄と鬪ひつゝ毫も屈撓する處なく畫策宜しきを得、時運漸く轉換の機に入り、三十六年後期末に及びて、歐洲甜菜糖不作を告げ、糖價昂騰の結果糖界漸く色めき來つたから、同社は早くも、新販路殊に北海道及九州地方の販路開拓に勉め、其の間又三十五年末より實施されたる輸入原料拂戻稅法の特典より受けたる効果は、漸く現はれ、兩々相俟ちて、茲に忽ち異常の好成績を擧げ、既往の缺損を償却するを得た。而已ならず偶まブラッセル會議の規約、三十六年十月を以て實施せられ、一時我市場を風靡せる甜菜糖の侵入を押へ益々同社製品の需要を增大し、遂に工場の增設、事業の擴張を促すに至つた。

三十七八年戰役の結果、非常特別稅の賦課により、再び市場は攪亂せられたるも、同社事業は當時歐洲糖輸入の杜絕と、見越輸入の少なかりし爲め、却て糖價の昇騰を來たし相當の利益を擧ぐるを得た、越へて三十八年、再び非常特別稅の改正ありて、見越輸入、思惑者の投賣等より、又も糖界甚だしく混亂を來たせしも、同社の營業、其の宜しきを得、價格の低廉を利用し

て、益々北支那並に朝鮮に輸出をなし意外の好果を收めた、斯くの如く市場混亂の際に於て、同社は毫もその影響を受けず、却つて豫想外の好果を收めたが爲めその後引續きて各般の商況不振工業界殆んど落寞の感を呈したるに拘はらず、同社は發展を持續し、大阪、大里の二工場を併合し、四十年には臺灣に粗製糖工場を新設するの隆運を迎へた。

然るに、四十一年天下の耳目を聳動せしめたる、所謂日糖事件は端なくも曝露し、多數の犠牲者を出し、同社の基礎甚だしく動搖を來し、一時その存立を危からしめんとまでに立ち至つたが、幸に現社長藤山雷太氏の挺身入社と共に、他の重役と鋭意各般の改善を計り且つ極力債務の整理に勉めたる結果、さしもの創痍も漸く癒ゆることゝなり爾來社運は隆々として今日の盛況を見るに至つた。此の間四十四年七月、關税改正の實施ありて、內地糖界に至大の影響を及ぼせしも過去數回の經驗に鑑みて、多くの失態を爲すに至らず、折柄歐洲一帶に亘る旱魃減收の爲め、糖價暴騰を見、遂に百斤拾圓臺を超ゆるの活躍を呈し、內地又需用の季節に際し、糖價は奔馬の勢を以て騰貴し出荷旺盛を極めたれば、同社の如き、內地各工場とも、全力を發揮して之れに應じ、他方輸出に力を注ぎし結果は、一時八百餘噸の大製造能力を發揮するに至り臺灣工場又同期の產額三十一萬俵を數へ、豫想外の收益を得たるは同社の好運にして、斯くて

同年七月には、臺灣に第二工場の增設成り、粗糖製造の基礎亦た確立した。其の間引續き臺灣に災せる大風水は又た同社に少なからざる損害を及ぼした、然れども其の程度は僅少にして、支那輸出の旺盛なりしが爲め悠々其の損失を塡補した。多年彼の地に優秀なる地盤を有せる香港糖の偶々革命戰爭に依り一時取引の杜絕せる虛に乘じて活動を試み一躍能く半期間に八十萬俵の賣約をなせし事がある。其の後彼の地に於ける南北動亂再發の爲め、一時輸出の滯滯を來たせしも、平靜に反へると共に又た順調を保ち、以來着々販路を占め今日に至り、歐洲戰亂は一層支那市場の活動を便にした。

三、經營の首腦

同社重役は左の如し。

取締役社長	藤山雷太	常務取締役	高山長幸
常務取締役	伊澤瓦立	取締役	星野錫
取締役	中村清藏	同	濱木義顯
監査役	指田義臺	監査役	大海原尙義

四、工場及工程

先づ同社工場の敷地建築物の面積機械及び設備を述べんに

東京工場	二〇、四六四坪	大阪工場 一三、六四四坪
大里工場	三〇、三四四坪半	臺灣工場 二一四甲八一九〇
東京工場	本建物 二八七坪五九 附屬建物 九七ヶ	大阪工場 本建物 三七四坪〇〇 附屬建物 四五ヶ 三、三九四、五五
大里工場	本建物 一、二四七、六六五 附屬建物 五、四一七、七七〇	臺灣工場 本建物 一、〇二七、七〇 附屬建物 一一七ヶ 五、二五〇、七四

原動機は

	東京工場	氷糖工場	酒精工場	大阪工場	大里工場	臺灣工場
原動機の種類	蒸氣	同		蒸氣	同	同
同型式	精糖工場の原動力は一部分の原動力たり故に目的及使用の部分に關し一定せず	同	蒸溜器 二臺			四重壓搾機 36″×78″ 二臺 汽機 三重壓搾機 32″×78″ 一臺
同大さ	百馬力 15″×36″	汽機 大 小 三臺		18″×24″ 一臺 8″×14″ 一臺 9″×14″ 一臺 10″×13″ 一臺 9″×15″ 一臺	七十馬力 一臺 四十五馬力 一臺	950mm ×1500mm 一臺 32″×60″ 一臺

次に設備は

	東京工場	氷糖工場	酒精工場	大阪工場	大里工場	臺灣工場
汽鑵及煙突	チンカシヤ型 7″×25″ 八基 同上 鐵製 7″×12″ 九基 鐵製 7″×12″ 四基	ランカシヤ型 一基 鐵製 一基	同上 煉瓦製 一基	同上 8″×22″ 十基 同上 一基	同上 7″×22″ 七基 水管式 パブコック 二百五十馬力 六基 煉瓦製 7″×15″ 二基	エレフアント型 八基 加熱面 二五〇平方米突 同上 ハイ子型 二基 鐵製 五基 16″/16″×112″ 一基 14″×132″ 一基 10″×150″ 一基
補助機	排水喞筒 一臺 喞筒 十八臺	排水喞筒 六臺 喞筒 十一臺	喞筒 九臺 汽機 二臺	排氣喞筒 四臺 喞筒 十四臺	排氣喞筒 五臺 喞筒 二一臺	壓碎機 二臺
結晶鑵	十五呎徑 一個 十呎徑 三個 八呎徑 一個 六呎徑 一個	八呎徑 一個	—	至十呎 一個 至八呎半 二個	四十屯 二個 二十屯 二個 徑六呎 一個	二十五屯 四個 同 三個
分密機	二十二個 十四個	三個	—	四十二吋徑 十三個 三十六吋徑 二個	四十二吋徑 二十七個	四十吋徑十二個 四十二吋徑五個 同 十六個
効用鑵	—	—	—	三重効用鑵	三重効用鑵	四重効用鑵 二組
骨炭濾器	四十個	五個	四個	二十個	三十六個	—
加熱器	—	—	—	—	—	テミング加熱器 三組

尙ほ臺灣工場の事は別欄訪問記中に詳しく說いて置いた。

精製糖の原料は臺灣の分蜜糖若くは瓜哇、玖馬等の原料糖にして市場俗に黄双と稱する黄褐色の結晶糖にして蔗糖(砂糖の主成分)の外に種々なる鹽類及び有機物を含有し味感頗る劣惡、衛生上、稱美すべきものにあらず精製の目的は含有さるゝ不純物を去り純白精良の食用品を得るにある、之が爲に原料糖を先づ溶解し溶液となし藥品を加へて煑沸し袋濾器にて浮遊せる夾雜物を去り骨炭濾器にて骨炭の脱色力を利用し有機色素を除去したる無色透明なる精製液をば眞空結晶罐に導き砂糖を結晶析出せしめ之を遠心分蜜機にて分蜜し母液と分け乾燥して包裝す。

粗糖　甘蔗を三重若くは四重の壓碎器を有する轉壓機(又は壓搾機と稱す)にて液汁を搾取し之に石炭を加へ加熱し清淨法を行ひ蔗汁に含有せらるゝ護謨質、蛋白質其他の有機鹽類を除去し効用罐にて蔗汁を濃厚に煑詰め眞空結晶罐に導き砂糖を結晶析出せしめ分蜜する他と同じ。

氷砂糖　原料たる白双目を溶解し藥品にて夾雜物を去り骨炭にて有機色素を除き一定濃度に煑詰め結晶器に移し溫室にて徐々に結晶せしむ。

酒精　糖蜜を稀薄にし酵母を混じ醗酵樽にて酒精醗酵を完了せしめて後之を蒸溜器に移して酒精を蒸溜し不純物は蒸溜の際、溫度の差違を利用して分離精製し純良なる酒精を製す。

五、原料及生産能力

内地精糖工場使用原料は臺灣及び瓜哇産、和蘭標本十二號以上、十五號未滿のものにして價格は世界産糖額の增減及び一般經濟界の順逆如何に依り年次市價を同うせざるも平均は百斤金七圓五拾錢見當なり瓜哇糖は月次所要の數量を豫め買約し順次廻船、積取り來るを以て一時に多數の原料を貯藏する等の不便なく常に製造上の調和を保てり。次に臺灣は同社採取區域内に農民の耕作したる甘蔗を買收し專用鐵道に依り工場に運搬して壓搾す操業期間は甘蔗の成熟如何に依り年々相違すれ共十二月初旬に開始し四月末に終了するを以て普通とす、原料又年次作柄の豐凶に依り增減あり。

内地に四工場、臺灣に二工場を有し一日の生産能力精糖は七百噸にして臺灣工場一日の壓搾能力は二千二百噸である。

六、技術者と職工

(イ) 技術者の數

技師長	澤全雄(東京高工出身)	工學士技師	一名		
農學士技師	二名	高工出身技師	十五名	其他	四十四名

（ロ）職工の數

	東京工場	大阪工場	大里工場	臺灣工場	計
製糖	五九	七三	一一三	五六	三〇〇
機械（火夫を含む）	五八	三四	五三	四四	一八九
其他		二四	三一	三一	八六
計	一一七	一三一	一九六	一三一	五七五

（ハ）賃金

最高　壹圓五拾八錢　最低　參拾五錢　平均（內地五拾八錢、臺灣七拾九錢）

（ニ）待遇法

一、臺灣工場には職工倶樂部あり、毎月會社より補助金を與へ種々なる慰安設備あり。內地は時々運動會を開き職工を慰安す。（其他略す）

七、販路

營業の目的物は主として精製糖にして之れが販賣區域は內國全土の外、朝鮮、支那各地其他に輸出を爲すにあり、精製糖の外、臺灣粗糖も亦取引して居る。

內地得意先は國內砂糖業全般に涉り朝鮮は合名會社鈴木商店を總代理店とし支那は三井物產株式會社、合名會社鈴木商店、湯淺商店、株式會社大倉組幷に在神戸支那商復和裕等を通じて販賣し居る。

內地需用は增加しつゝある支那輸出は數量に於て近頃激增を來した是れ從來香港二大精糖會社製品の勢力範圍たりし楊子江一帶に於て多年激烈なる競爭の結果聲價頓に加はり楊子江一帶は勿論南北支那、並に滿洲に及び漸く香港市場にも侵入したる等販路擴張され居りしに加へて今回の歐洲戰亂があり、墺獨製品支那市場に絕へ且つ香港糖の如きも種々の事情ありて大に其の活動不活潑となりたる爲め支那へは大發展をなし最近（六ヶ月中）にても十萬俵を輸出したと云ふ程である。其他浦鹽方面、印度、遠くは佛國邊りからも商談があつたと云ふ事である。斯くして戰爭勃發以來の大日本製糖販路の擴張は實に見るべきものがある。此の戰亂は吾が製糖の對外發展に對する無二の好機會である。

八、同社の大株主

同社株主中千五百株以上のものを擧げんか左の通りである。

伊澤　良三　石田友吉　濱本義顯　仁田貞夫

星野錫　小笠原繰治郎　金澤冬三郎　中村清藏
野村德七　野村實三郎　栗生武右衛門　福川三藏
秋山孝之輔　荒木菊三郎　阪倉清四郎　澤戸口又

明治製糖株式會社

一、沿革

同社は明治三十九年十二月二十九日東京銀行集會所に於て創立總會を開き成立したるもので此の創立總會に於て當選した會社重役の顔觸左の通りであつた。

取締役會長　小川納吉　專務取締役　相馬半治
取締役　淺田正文　取締役　薄井佳久
取締役　植村澄三郎　監査役　山本直良
監査役　荒井泰治

資本金は五百萬圓で株數六萬七千十一株であつたが事業着手の順序は先づ蕭壠庄に新たに第一工場を置き最新式の機械を据付ける事とし本社も又た此處に置いた。而して專務の相馬氏は此

專務取締役　相馬半治

蕭壠工場新設港水路

役員取締役　氏會　鎬

蕭壠工場新設港水路

蕭壠工場內停泊會社專用港水路

處に据付くべき製糖機械購入の爲め四十年三月二十日歐洲に向つたが一方第一工場の工事は着手以來工事着々進み四十年七月の第一回株主總會當時には既に工場、宿舍等の中宿舍、東、修繕工場一棟は略竣成に近き、機械工場は海外から製糖機械到着の期を計つて工事を起す段取となり輕鐵も第一工場原料採取區域内の延長三十六哩の内蕭壠西港仔間の五哩四十五鎖餘は既に竣成して居た。

同年八月同社は鹽水港廳蘇荳堡業庄にあつた蘇荳製糖會社を買收した。そは同蘇荳會社が明治の第一工場と縱貫鐵道との中間に位し且つ其の原料採取區域は最も良好の甘蔗を產する地方であつたので同社は夙くから事業上並に交通上早晩之れを買收すべきものと認めて居たもので遂に時機を得たので八月二十一日買收受授を了し同社蘇荳工場として事業を續けた。又た英、米國に於て注文したる第一工場製糖機械及建築材料は四十一年一月以來續々到着し組立据付に着手し同年の製糖開始期から製糖を開始し得る事となり四十一年十二月十日同工場始業式を擧行し引き續き製糖作業を開始し同年六月二十三日製糖を終了したが同第一工場と蘇荳工場とを合せて甘蔗壓搾高一億千八十五萬餘斤に達し成績良好を示した。其處で同社は能力一千噸の第二工場を蒜頭に建設する事となり、其の準備に着手し四十三年の初冬から製糖を開始した。又た

同第二工場内に建設中であつた酒精工場も漸く竣成し四十四年三月六日から製造を開始した。同社は此如く順調に漸次事業を擴張し來つたが更らに一工場の增設を必要として第三工場（能力千噸）を總爺に建設し四十五年一月から製造を開始した。而して一方内地に於て精糖の製造を企て四十四年合併の決議をした横濱精糖會社は同四十五年一月から同社の手によりて精糖を製造する事になり大正二年期に入り又た改良增設工事をなし、大正四年二月よりは角砂糖の製造を開始した。同社は斯く順調に發達したものである。

二、同社の規模及現狀

（イ）工　場

同社の工場は第一、第二、第三及南投工場蘇荳工場の五工場の外内地に精糖製造に從事しつゝある川崎工場あり、今左に其の所在地及能力等を示さん。

第一工場	（臺南廳蕭壠庄）	七百五十噸
第二工場	（嘉義廳蒜頭）	千百噸
第三工場	（臺南廳總爺）	千噸
南投工場	（南投廳下）	七百五十噸
蘇荳工場	（臺南廳蘇荳）	六十噸
川崎工場	（神奈川縣川崎）	

（ロ）採取區域及今年植付

同社原料採取區域は臺南廳に在りては蕭壠堡以下七堡各庄に亘り嘉義廳にては大糠郷西堡以下五堡各庄に達す。同地方は其の區域工場に接近せるの便あると更らに蘇荳は臺灣中で最も古き甘蔗栽培地であるが故に農民蔗作に老熟して居る。從つて此の附近一帶は甘蔗の栽培最も盛である。

而して此の採取區域全面積は三萬五千八百甲で、同社は爾來自作蔗園を增加する方針の下に着々として其の面積を增加しつゝある。尙ほ今期の植付は非常の好成績で來期の產糖は巨額を占むるだらうと思はれる。今四月二十日現在の植付狀態及本期の收穫斤量等を示せば左の如し。

今期植付　（四月二十日現在）

工場別		植付申込甲數	植付濟甲數	蓋第ノ二回數調	本期及收穫斤量	甲當
蕭壠	新	二、八三	二、二六	二、九三		四九、100
	舊	二九六	二九三			
總爺	新	二、九六	二、二九	一、九八	三六四、九三0	六六、七0
	舊	三六六	三四三			
赤頭	新	四、四九七	四、四二八	三、八六		四0、三六0
	舊	—	—			
南投	新	二、四八八	二、三三七	二、七八九	九三、三三七、三0七	三三、0六0
	舊	一、二二三	一、二三七			
計	新	一一、六六四	一一、0六六	10、八三		
	舊	一、七三七	一、七三一			
合計		一三、101	一二、八九九			

（八）土　地

今年前年期に於ける同社土地狀況左の如し。

一、蕭壠用地は本期間五十三甲八厘三毛五糸五を買入れ現計千五百十甲三分九厘三毛七糸五となる。

一、甘蔗作附奬勵の目的を以て抵權及典權取得の土地は本期間百九十甲二分七厘一毛五糸を增加し百五十六甲八分七厘七毛三糸を解除し現計八百三十四甲六分三厘一毛六糸となる。

又從來開墾耕權取得の土地中本期間四百二十甲三分七厘五毛四糸を解除し現計一千百三甲五分七毛となる

一、赤頭農場灌漑排水工事は引續き施行しつゝあり

（二）建物及機械

一、赤頭農場耕耘用として「スチームプラウ」を購入したり。

一、本年二月より川崎工場內に角砂糖製造機械を設置したり。

（ホ）鐵　道

鐵道は營業線五十哩、專用線六十七哩、合計百十七哩で其の詳細左の如し。

工場別	線路名	營業線	專用線
總爺（第三工場）	蕭壠仔田	九哩七八・五〇	
	維新		五哩七八・九一分ノ六
	後營		三、一〇・三四分
	崁仔		〇、七二・七五分ノ六
	西港		四、七五・二五分ノ三
	水源池		一、二〇・〇〇
	楠仔林		〇、七二・〇〇

蕭壠	學甲	七、三八・〇〇	一八二
	將軍線	四、一五・二四分ノ一	
	麗仔內	五、四六・〇七	
蒜頭	朴仔稀	三、〇六・八八	
	迂汪	一、七二・〇〇	
	崙仔	一五、二八・〇〇	
	下楫仔蔡	二、三七・〇〇	
	溪北	六、二九・〇〇	
	鴨母蔡	六、四〇・〇〇	
	後潭	五、五二・〇〇	
南投	中央	三、一七・〇〇	
	月眉厝	一、二〇・〇〇	
	土城	一一、三五・〇〇	
	蕃仔蔡	五、四七・〇五分ノ四	
		六、三四・六〇	
		〇、三一・〇〇	

總計	五〇、四八・五〇	六七、〇八・二九
總計		一一七、五六・七九

(へ) 使用人

大正四年三月三十一日現在使用人左の如し

主事	一人	技手補	六人
技師	一五人	雇	二八人
書記	八四人	囑託	七人
技手	二三人	合計	一六四人

右の外工手、傭、守衛、看護婦及職工、給仕、交換手、小使等の員數九百五十五人なり

三、同社の成績

今同社が創業以來の成績を左に擧げ以つて經營者努力の跡を察せんか

▲第一期	
純益金	二〇、八〇〇、六〇五
內	
創業入費償却	一五、〇〇〇、〇〇〇

後期繰越金	五、八〇〇、六〇五	
▲第二期		
當期利益金	五七、二三二、五七八	
前期繰越金	五、八〇〇、六〇五	
合計	六三、〇三三、一八三	
右後期へ繰越		
▲第三期配當		一割
▲第四期配當		一割一分
▲第五期配當		一割二分弱
▲第六期配當		一割二分
▲大正二年前半期		一割二分
▲大正二年後半期		一割二分
▲大正三年前半期		一割二分
▲大正三年後半期		一割二分
▲大正四年上半期		一割二分

即ち同社は大暴風の襲來當時に於ても其の配當は歩調を亂さず一割二分を押し通して來たもの

で其の用意の跡見るべきである同社は實に極めて順調なる成績を辿つて來たものと云ふべきものので其の經營の堅實にして抜かりなきは既に過去に於て之れを知る事が出來る、而して今左に同社資産狀態を見るに（前期）

土地	五九五、六七一、八四五
建物	二、三二九、八〇六、五〇七
機械	三、八四六、〇二六、四〇八
鐵道	一、七〇四、六四〇、三一四
農具及家畜	三、四三六、三六〇
什器	八六、三〇一、五八一
原料糖及貯蓄品	七〇一、三八四、八四〇
繰越製品	二、九四九、一二七、三七〇
甘蔗前貸及土地貸金	八九八、五二三、八二四
甘蔗栽培假拂	五五九、二五四、九九七
甘蔗運搬前貸金	一〇二、六六三、〇〇〇
肥料立替金	六二、九八二、四五〇
賣掛金	四六五、六四三、〇二〇

銀行預金　一、〇三六、一七五、二九〇

四、同社の幹部

同社は從來小川伸吉氏を社長に相馬半治氏を專務取締役に任じたるが小川氏最近辭任し專務相馬氏社長となり、取締役有馬健物氏專務となつた。尙ほ其他重役顏觸左の如し。

取締役社長	相馬半治	專務取締役	有馬健物
取締役	薄井佳久	取締役	植村澄三郎
取締役 男爵	武井守正	取締役	高木鐵男
取締役	千葉米次郎	取締役	谷井千次郎
監査役	山本直良	監査役	川原義太郎
監査役	森村開作		

五、同社の大株主

同社千株以上の株主(前期)左の如し

一一、五三二	安部幸兵衛	一一、五〇〇	增田增藏
五、五〇〇	原富太郎	三、九八〇	若尾民造
三、三六〇	侯爵 德川義親	二、五二〇	中野長夫

二、五二〇	森村開作	二、三六八	今村繁三
二、〇四一	安部幸之助	一、八九三	玉雪農
一、六八〇	岩永鄕	一、六八〇	大倉和親
一、六八〇	山田暘朝	一、六八〇	森村市左衛門
一、六七六	齋藤喜十郎	一、五六三	相馬半治
一、五二〇	後宮信太郎	一、五〇〇	增田嘉兵衛
一、五〇〇	二宮孝順	一、五〇〇	朝吹常吉
一、四二八	原六郎	一、三四四	中村政次郎
一、三四四	山本達雄		
一、三四四	近藤友右衛門	一、三〇〇	吳汝祥
一、二八八	山口達太郎	一、二〇〇	朝田權四郎
一、一八〇	增田與一	一、〇八八	茂木惣兵衛
一、〇五〇	內貴清兵衛	一、〇四八	手塚豐之助
一、〇四〇	高木七五郎	一、〇二〇	服部晶吉
一、〇〇八	井上周	一、〇〇八	荒川新十郎
一、〇〇八	淺田吉太郎	一、〇〇四	村井保固

一、〇〇〇　中村房次郎
一、〇〇〇　中澤彦吉
一、〇〇〇　小野光景
一、〇〇〇　增田源次郎
一、〇〇〇　山田松三郎

東洋製糖株式會社

一、其の地位

同社は臺灣に於ける製糖事業の勃興期とも云ふべき明治四十年の創業にかゝり臺灣製糖鹽水港製糖大日本製糖の三社を除きては現在臺灣に於ける同業者中最も古き歴史を有するものゝ一に數へられて居る。而して其の資本金創立の時期に於て明治と姉妹會社の觀がある。

二、沿革

其の沿革を繹ぬるに明治三十九年十二月本社設立趣意書並に設計書を始めて世に發表し株式募集に着手するや時恰かも日露戰役の勃興に際し世上の人氣旺盛を極めたる事とて應募者非常に多く忽ちにして所要株數の千五百倍に達した創立發起人左の如し

德久恒範　鹽田奥造　井上敬次郎　大石熊吉

大槻幸之助　荻野芳藏　奥野市次郎　岩城隆長
西山彰　田川柳助　柴田勝文　小栗富次郎
安部林右衛門　鈴木久次郎　芳賀山三郎　臼井儀兵衛
米山利之助　補正啓　小林好愛　芝原彌太郎
實來文一　竹村良貞　谷田吉右衛門　伊東安兵衛
安田爲信　馬場道久　巖木善治　井上茂作
早川鐵治　星野勇三郎　岡田榮助　大木宗保
大海原尙藏　渡邊甚吉　渡部伊右衛門　鎌田勝太郎
景山甚右衛門　加瀨庄次郎　片野重久　川崎友之助
米倉長之助　田中定吉　田村藤兵衛　田中經一郎
竹内彌三右衛門　竹尾菊松　中山佐市　長尾三十郎
臼井房吉　牛間競一　上田省吾　栗林幸助
矢島浦次郎　山田勘吉　前島元助　松尾寛三
松原茂久　古川孝七　藤山雷太　藤倉富藏
青木正太郎　佐々田懋　佐々木要一　喜谷市郎右衛門
木津太郎平　木村利右衛門　木村庫之助　北川安右衛門

下郷傳平　藤谷嘉助　廣瀬金七　東村守助
森一馬　鈴置倉次郎　菅野傳右衛門　伊丹彌太郎
波多野岩次郎　太田伊三郎

斯くて四十年二月東京商業會議所内に創立總會を開き取締役會長に德久恒範專務取締役に淺田知定常務取締役に青木盤雄の諸氏を擧げた然るに間もなく日露戰役市況大沸騰の反動忽ち襲ひ來つて事業の開始に故障を來たす事もあらんかと氣遣はれたが德久、淺田兩氏は敢然として有らゆる故障を排して進み同年南靖庄八掌溪の北岸(卽ち今の本社のある所)に工場を建立した。是れ卽ち南靖庄工場である。能力一千噸、製造を開始したるに豫想以上の良品を得られた。次で四十三年烏樹林工場(七百五十噸)を增設し、昨大正三年五月には斗六製糖を合併するの決議をなし八月三十一日より實行した。而して更らに大正四年五月より北港製糖との合併を實行し資本金は千百萬圓となり、能力三千四百五十噸を算するに至つた。同社は最近社債貳百五拾萬圓を賣り出したが、之れ其の今後一層活動の計畫あるを示すもので精製糖工場新設の如きは之れである。戰亂の勃發して精製糖の販路開くると見るや鹽水港以外大資本を有する會社は何れも精糖製造の擴張をなした。只東洋製糖は最近迄之れを決せなかつたが遂に精糖製造に決したのである。

三、同社規模

(イ) 工場及其の設備

同社の創立と共に起されたる南靖庄工場は四十一年の建設に係り嘉義廳内嘉義西堡の南靖庄にあり、水堀頭を距る約四丁、八掌溪の北岸に位して、地域極めて廣濶、加ふるに水量の豐富なる八掌溪を控へたれば灌漑に便を得、亦た一方運搬の便も之れに伴ひ誠に絶好の地である。又た烏樹林工場は明治四十三年の建設であつて嘉義廳下茄苳南堡烏樹林にあり、意水溪の北岸に位し、新營庄驛を距ること約四哩、中央山脈に接近して居る。

南靖庄工場現在の能力は千噸、烏樹林は七百五十噸の能力を有し、其の機械は何れも英國マリス、ワドソン製で構造堅牢である。今兩工場に於ける機械設備の種類を述べると

汽罐	水管式
煙突	鋼鐵製耐震煙突
壓搾機	クラジウスキー壓搾機三重壓搾機
清淨裝置	ミデンゲ式連續裝置、沈澱及濾過裝置

喞筒	乾式眞空喞筒
蒸發罐	スタンダード式四重
結晶罐	蛇管式及カレンドリア式眞空結晶罐
回轉結晶機	開放圓筒型
分蜜機	水壓式分蜜機
乾燥裝置	ヘルセー式乾燥機
點燈裝置	汽罐直結直流發電機

又た舊斗六製糖に屬せる大崙庄工場は能力三百噸で專ら赤糖の製造をなす、使用機械は英國ヘーベー會社の製作に係り、同機は帝國製糖會社赤糖工場にて使用せる機械と同一で精良なる製品を得らるゝを以て名あり。又た舊斗六製糖第二工場たりし五百噸分蜜工場は鐵骨亞鉛葺、亞鉛張、三階作りにて階下六百二十一坪階上百九十一坪三階百十九坪で使用機械は獨逸グレーベンブロイヒ會社の製作にかゝる最新式のものである。

（ロ）蔗園と原料

本社の占むる甘蔗園區域は嘉義廳の中央に位し嘉義西堡外七堡を包擁して田一萬九千甲、畑九千四百甲を有し、地域廣く雨量適順、水害の憂なし、其の地點を擧げると

柴頭港堡、鹿仔草堡、嘉義西堡、嘉義東堡、樹埔頭庄、嘉義東堡內內甕庄、項六庄、下茄苳北堡、哆囉嗹西堡、下茄苳南堡內、三塊埔庄、牛墩堡、竹仔門庄、客庄內庄、項秀祐庄、本協庄、安溪寮庄、卯舍庄、哆囉嗹項東堡內牛肉崎庄、哆囉嗹東下堡內泉溪庄、關仔嶺の一部、六重溪庄、

等である。自作蔗園は今は南靖庄、烏樹林庄二工場に屬する分六百五十甲であるが、哆囉嗹西堡田尾庄、下茄苳南堡安溪寮庄、烏樹林庄、下秀祐庄等に亘り約七百三十四甲の土地に着々自營農場の擴張を行つて居る。

（八）鐵道

本社は創立と共に先づ最初に水堀頭鹿仔草、長短樹、店仔口並に本社構內各線を敷設し其の延長僅かに二十二哩二鎖に過ぎなかつたが、四十一、二兩年度に及び事業の擴張と共に交通事業益々頻繁となり第二期計畫として、過溝、山仔頭の二線を敷き次で施厝寮長短樹、海豐、後壁寮、烏樹林構內並に店仔口線の延長敷設を竣へ一躍延長四十五哩三十三鎖の一となり、其の後尙ほ不足を感じ、四十三、四、五の三年に亘り更らに新たに敷設に着手し柴頭港、下六、引込各線の外山仔頂線の延長をも竣へ今日にては延長約百哩、舊斗六會社所有のもの二十一哩、五月新に合併した北港の五十哩を合せば百七十哩餘となる。

四、本社の製品

本社從來の二工場卽ち南靖庄及烏樹林工場にて製造せる分蜜糖は原料糖にては TOB. 消費糖にては TOB. TOE. TOK. の四種あり、本社の獨特を誇れるもので日英博覽會にては金賞牌、東京拓殖、明治紀念各博覽會にては共に名譽賞牌を受けた。

五、本社の成績

同社は創立以來頗る好成績を示したが今之れを左に統計を以つて示さん。

	拂込資本金	製糖高	拂込資本金對利益金割合	配當率
明治四十一年	二、五〇〇千円	一二三瓩	二、六九割	一、二割
明治四十二年	二、五〇〇	一三〇	一、九七	一、二
明治四十三年	三、五〇〇	三一四	二、三九	一、二
明治四十四年	三、五〇〇	二七八	三、〇六	一、五
大正元年	三、五〇〇	七七	〇、六〇	一、二
大正二年	三、五〇〇	一二二	一、〇八	一、〇

本社は創立の四十一年には資本金五百萬圓で製糖能力千噸同年七月事業を開始してから四十二年六月迄一ヶ年間に於ける甘蔗壓搾高は一億二千九十萬八千八十二斤、製造高十二萬二千七百七俵で此の利益金六拾七萬參千參百餘圓に上り、空前の好成績を示した翌年度は幾分糖價下落し製造高十三萬六千俵に對し利益金四拾九萬參千六百九拾餘圓を算するに過ざなかつたが四十三年下半季より翌上半期の一ヶ年間には新に烏樹林工場の建設と共に其の製造高三十一萬四千百七十六俵、利益金八拾參萬九千參百九拾圓餘に達し、翌年四十四年度もまた好況にて製造高二十七萬七千五百七十五俵を產し、之れが利益百七萬參千五百參拾四圓に上り、同年は一割五分卽ち從來に於ける最高の配當をした。翌大正元年は暴風の後を承けて生產高七萬七千俵の不成績を示し爾來甚だ昔日の盛況に復せざるも今年は略ぼ以前の狀態に回へり、來年は非常の好成績を告げるだらうと觀測さる。

六、同社の主腦

同社重役諸氏左の如し

社長	下坂藤太郎	專務	松方五郎
取締役	淺田知定	取締役	横田義雄
同	波多野岩次郎	同	藤田謙一
同	岡烈	監査役	高山長幸

監査役　渡邊甚吉　同　木下新三郎
同　桂二郎　同　阿川彦七

新高製糖株式會社

一、沿革

同社は明治四十二年大倉喜八郎、高島小金治、安部幸兵衛氏によつて創立されたもので資本金は五百萬(拂込參百五拾萬圓)であつた。株數十萬株の内大倉一家と高島氏とで五萬五千餘株を占めたのであつた。工場は彰化に一、嘉義に二、合計三箇所にして彰化工場は四十三年十二月より製造を開始し嘉義第一工場は四十五年より又た第二工場は大正二年より開始した。而して彰化工場は大正二年酒精工場を新設し同年七月より製造を開始し八百八十餘石を醸造した。又た嘉義工場にては大正三年より從來試製をなし來たりたる白糖の製造が好成績を擧げ得べきを認めて其の製造を擴張する事となり同年中一萬七千餘俵を製造した。

右製糖、酒精、白糖の製造の外同社は創業以來最も鐵道敷設に意を用ひ、目下彰化工場區域内

にては延長四十六哩四十五鎖、嘉義工場は五十四哩三十四鎖に達し、漸次延長を圖り貨客集散の便に備へんとして居るが一昨年度に於て一般の運輸收入は參萬參千四百餘圓に達した。

二、同社の規模

同社は前述の如く酒精の醸造、白糖の製造、其他百哩餘の輕便鐵道を以つて手廣く營業して居るが其の本社及工場の所在地は左の如し。

本社	臺灣臺中廳線東堡中寮庄	一、二〇〇噸
嘉義第一工場	同　嘉義廳大茅林庄	八〇〇噸
嘉義第二工場	同	七五〇噸
同	同　臺中廳三角庄中寮庄	

而して嘉義彰化兩地工場所屬の工場鐵道敷地及耕地は

彰化工場敷地	一七、九四四四
同　鐵道敷地	五七、三三二一
同　耕地	一九、六五二二
小計	九四、九二八七
嘉義工場敷地	一一、一〇二〇

同　鐵道敷地	一七、三六五四
同　耕　地	二八〇、三二四二
小　計	三〇八、七九一六
通　計	四〇三、七二〇三

而して嘉義工場部内の大正三年の蔗作甲數は約二千四百六十甲で此收穫一億二百六十萬餘斤、彰化工場部内では蔗作甲數三千百餘甲、此の收穫七千三百三十一萬餘斤合計一億七千四百九十二萬斤に上つた。此處に特に記すべき事は臺灣の甘蔗は總て乾田栽培であつたのを、總督府で研究の結果水田栽培の成績好良なるを知らしめ、勸奬したが、各社は躊躇して用ひなかつた。よつて同社は率先して嘉義部内に水田栽培を試み、其の結果乾田に比較して其の成績遙かに良好なる事を確めたので爾來專ら此の方法を採る事となり、毎年好結果を得て居る。斯くて後他の會社も漸く之れに倣ふやうになつた。其他同社は集約農業にも種々骨折つて研究をして居る。

三、同社の資産及配當

先づ資産の部にては

土　地	二二六、三〇八円
建　物	六〇〇、〇〇八
機　械	一、八五七、三二九
鐵　道	一、〇八五、四三九
酒精工場	一一九、八〇七
製　造	九二四、九四一

積立金は

法定積立金	三八、〇〇〇円
別途積立金	一一二、〇〇〇

で配當は前々期は一割二分であつたが、前期は原料糖持越に會し、市價の不振甚だしかつた爲め、製品全部は若干の純益金と共に後期に繰越して、配當はしなかつた。然し今期は好成績である。

四、經營の主腦

同社經營の首腦は

取締役社長	高島小金治	常務取締役	牧山熊二郎
取締役	大倉喜八郎	取締役	淺田知定
監査役	川瀨周次	監査役	正經法定

牧山常務は常に臺灣に在りて社務を見、高島社長は東京出張所にありて全般の社務を監す。

五、同社の大株主

同社四百株以上の大株主は

二八、五〇〇	大倉喜八郎	二三、七〇〇	高島小金治
四、三二〇	安部幸兵衛	三、四八〇	安部幸之助
一、五五〇	高島直一郎	一、三五〇	香川敬三
一、三〇〇	牧山熊二郎	一、二〇〇	嘉義銀行
一、一〇〇	齋藤合資會社	一、〇八〇	川瀬周次
一、〇〇〇	山本專之助	一、〇〇〇	濱田澄子
八〇〇	大倉喜七郎	七三〇	安土直治郎
七〇〇	石川昌次	六八〇	香川志保子
六二〇	劉璸山	六一〇	王雪農
六〇〇	大倉粂馬	五六〇	小鹽元太郎
五二〇	野村泉哉	五〇〇	田中善助
四五〇	蔡惠如	四四〇	木村安次郎
四〇〇	進藤嘉一郎	四〇〇	關根さら

林本源製糖株式會社

一、沿革

林本源製糖株式會社は臺灣の富豪林家各家各房の出資による林本源合名會社の後身である此の前身なる林本源合名會社は明治四十二年六月の創立で資本金貳百萬圓、内拂込金は百拾四萬六千百九拾四圓であつた。後大正二年十二月資本金參百萬圓(拂込百五拾萬圓)を以て株式組織に改められ「林本源製糖株式會社」と呼ぶに至つた。

二、經營の首腦

同社々長以下經營の幹部は

社長	林鶴壽	副社長	林熊徵
副社長	林爾嘉	專務取締役	小花和太郎
取締役	石川昌次	取締役兼支配人	田邊米三郎
監査役	林熊祥	監査役	林宗仁
監査役	林祖壽	監査役	林嵩壽

三、工場及能力

工場は臺中廳溪洲庄に只一ヶ所で能力は七百五十噸である。

四、原料採取區域及鐵道

同社の原料採取區域は臺中廳下溪洲庄附近一帶で田園面積二萬一千九百甲歩、濁水溪沿岸を占む時に洪水の氾濫に惱まさる事なきにあらざれど幸ひに面積廣大なるを以て蔗園擴張の餘地に富んで居る。又た原料運搬の目的を以て敷設された私設鐵道は專用十五哩營業線八哩九鎖合計二十四哩五鎖で汽關車五輛を有す。

五、營業成績

同社の工場は新式の點に於ては他に比し稍〻劣れるものなきにあらざるかと感ぜらるゝも、成績に於ては内地人經營の會社に比して少しも遜色はない。

新興製糖株式會社

一、其の地位

臺灣の新式製糖會社中で一番小なるものを求めなば夫れは恐らく陳中和の經營する新興製糖會

社であらうか。而して又た其の小さい割合には一番儲かる會社は何れかと云へば恐らく亦た此の會社なりと答へる事が出來るかも知れぬ。勿論一時は經營上非常の苦境に陷つたが今は其の利得頗る見るべきものがある。之れ偏に其の經營者たる陳中和氏と石川昌次氏の功に歸すべきものであろふ。

二、沿革、經營振

同社は明治四十一年九月資本金六拾萬圓を以て陳家一統の手により創立されたもので工場は臺南小竹上里山仔頂庄にあり。能力は五百噸で同工場に到んとするには鳳山よりするのである。其の經營振は他の大會社に比して進歩的と云ふではないが、努力的で積極的で從來隨分苦境に陷つた事はあるが、其の努力的、積極的經營によつて能く今日の位地を拓くを得た。資本金は少額であるが、現に拾萬圓以上の積立を有し、毎期一割前後の配當をして居る。配當を之れ以上になす事は困難ではないが之れは多く積立金の方へ廻はして居るのである以て其の用意のあるべき處を知るべきである。

三、經營の首腦

前に云ふが如く此の會社は陳中和の手により經營されつゝあるもので其の幹部は石川氏の外は

何れも島人である。今其の顔觸を見んか。

社長　陳中和　　取締役　陳振發
取締役　石川昌次　　取締役　陳啓貞
取締役　陳光傑　　取締役　陳啓峯
監査役　陳文遠　　監査役　陳啓南
監査役　陳和信

四、採取區域及鐵道

同社の原料採取區域は臺南廳鳳山附近一帶で、淡水溪の沿岸を占めて居る。其の區域面積は七千七百甲歩である。又た原料運搬を目的として敷設された私設鐵道は、營業線十五哩で汽關車三輛を有す。

臺北製糖株式會社

一、沿革

臺北製糖は明治四十三年八月、資本金參百萬圓(拂込七拾五萬圓)を以て創立され始め本社を臺北城内撫臺街に置き工場を大加蚋堡大竹園にトし、出張所を東京市京橋區新富町五丁目に置いたのであるが、大竹園の工場は運輸上に不便多き爲め、大加蚋堡下崁庄に變更し、同時に本社も此の工場内に移すに至つた。四十四年一月原料の植付を開始し、同年三月工場落成を告げ、十一月機械の据付を終り、製糖を開始した。當時の重役は取締役に松方五郎、高橋光威、木下新三郎、高橋虎太、佐藤暢、郁村一造、澁谷嘉助の七氏、監査役に山中隣之助、吉村鐵之助、梅原龜七、林熊徽の四氏であつた。

二、同社の規模及設備

同社所有の土地は工場敷地及び接續地、糖廓敷地、軌道敷地、蔗園を合せて二十三甲餘、建物は製糖工場及附屬工場、倉庫、事務所を合はせて二千五百七十六坪、機械は米國ダイヤ會社より買入れたものである。其他白糖製造の設備あり。

交通機關に於ては鐵道は營業線延長約二十哩、專用引込線其他を合して三十餘哩、此の運輸收入は全部で五萬貳千餘圓を算す。

運送船として汽船一隻を有し、外に和船、臺灣運送船五十三隻を有し原料及製品を運搬す。

三、資産及利益

現在の拂込資本金は全資本の半額卽ち百五拾萬圓で積立金は法定積立壹萬五千貳百圓、固定資

本償却及恩給基金等貳萬六千五百圓合計四萬千七百圓である。其の財産狀態左の如し。

土地建物	貳拾九萬七千圓
鐵道、艀舶、其他	貳拾壹萬壹千圓
機械器具	八拾七萬四千圓
農場踏勘定	八拾六萬九千圓
製品、積送品、貯藏品	拾參萬八千圓
預金假拂等	參拾參萬四千圓

收入は前期製品收入雜收入等九拾五萬七千圓、之れに對し製造費其他諸經費七拾八萬貳千圓を差引き拾七萬五千圓の純益を擧げ、八朱の利益を配當した。前々期卽ち第三期は貳萬壹千餘圓の缺損で第二期は八朱、第一期は、創業當時で單に資本金の利息を納め得、貳百餘圓を後期に繰り越したのみであつた。元來甘蔗の栽培は南中部が其の適地で北部は雨も少く氣候の點も甘蔗の栽培に適せず、水田のみであつたのを、同社は進んで此の疑問の地に企業したのである。卽ち從來人の躊躇して手を下さなかつた處に工場を建てたもので、世間では其の營業成績に多大の注意を拂つて居る。其處で同社の從來の營業狀態は矢張り疑問とされて居る。聞く處によると近來精製糖の製造に其の設備を變更し、精糖の製出に全力を注ぐと云ふ事である。或は之

れによつて同社は其の面目を一轉するに至るかも知れぬ。

四、經營の首腦

同社の重役は

取締役社長	木下新三郎	取締役	松方五郎
取締役	高橋虎太	取締役	澁谷嘉助
取締役	梅原龜七	取締役	佐藤信壽
監査役	山中隣之助	監査役	吉村鐵之助
監査役	石原雄熊	監査役	林熊徵
相談役	石川昌次		

五、同社の大株主

同社六百株以上の大株主は

二、二〇〇	澁谷嘉助	二、〇〇〇	島津忠濟
一、五〇〇	林熊徵	一、五〇〇	久保正吉
一、四四〇	町澤政治郎	一、一六〇	村上太三郎
一、一四〇	村上賢二	一、一〇〇	木下新三郎

一、一〇〇	古賀三千人	一、〇〇〇	吉村鐵之助
一、〇〇〇	高橋虎太	一、〇〇〇	梅原龜七
一、〇〇〇	内田直三	一、〇〇〇	山中隣之助
一、〇〇〇	松方五郎	一、〇〇〇	松方正熊
一、〇〇〇	澁川秀	九七〇	阪崎安藏
八〇〇	川上正彦	七九〇	松方乙彦
七〇〇	池崎一信	六一〇	富田協平
六〇〇	吉田雪子		

臺東製糖株式會社

一、沿革

臺東製糖會社は大正二年二月資本金參百五拾萬圓を以て創立されたもので本社及工場を卑南に置いた。元來臺灣の東部は海上浪荒くして、交通不便である、又た陸上に於ても運輸の不便は海上同樣であると共に生蕃なぞの危險もある。斯る邊鄙の處に會社を設立するは餘程の決心と希望とがなくてはならなかつた。其處で其の創立の當時創立委員長の野田豁男通が設立の計畫

を發表するや驚いたのは製糖界に精通せぬものゝみでなく同業者も驚いた。斯くの如きは無謀の計畫である。彼の如く交通の便を缺いて居る處では製糖しても、何うして製品を搬出するかなぞと批難の聲冷笑の聲頻發された。而かも實際に事業を開始するや天候も調子好く、地味も膏腴で第一回の製造によつて得た赤糖製品は優良なるもので初め冷笑したものは殊に意外に感じた程である。勿論其の創業には多大の困難はあつたが經營者は好く其の困難を排除して遂に今日の境地を擴開したのである。

二、其の事業と製品

同社は赤糖製造の外は運輸、酒精、電氣事業をも兼營して居る。製糖は未だ分蜜糖を製造するには至らぬが其の計畫の無い譯ではない。戰爭前から實は其の計畫があり、機械を外國に注文したのであるが、戰爭の爲め其の機械が到着せぬので其の儘になつて居るのである。

而して目下製造して居る赤糖は精良なるものを出し、其の商標 TSI は今や臺灣赤糖の權威となつて居る。

三、同社の成績

設立當時は各蕃社に於ける耕作者が甘蔗耕作の智識に乏しく、栽培困難であり、從つて多くの

利益を擧げる事が出來なかつたが前季に於ては四千七百七拾貳圓六拾九錢の純益を擧げ、其の中貳千圓を創業費の償却金として前季繰越金八百有餘圓とを合はせ參千六百六拾四圓七拾參錢五厘を後季に繰り越して居る。今後分蜜糖の製造をなし其の設備を大きくし大活動をなすに至らば其の成績も見るべきものがあるだうと期待されて居る。

四、同社の主腦部

同社の重役左の如し。

取締役社長　安場末喜
常務取締役　海野景彰
取締役　男爵　坪井九八郎
取締役　矢島榮助
取締役　若尾璋八
監査役　松原重榮
監査役　上田省三
常務取締役　堀口兼三郎
取締役　男爵　野田龜喜
取締役　吉野周太郎
取締役　渡邊勝三郎
監査役　内池三十郎
監査役　渡邊六藏
監査役　若尾謹之助

臺南製糖株式會社

一、創立

臺南製糖の創立は大正二年二月で臺東製糖と同時に創立されたものである。而して未だ二回の決算を經たばかりの會社である。創立者は鈴木梅四郎、河井芳太郎、川上熊吉、安部幸兵衛の諸氏で資本金は參百萬圓(拂込百五萬圓)である。

二、其の工場及規模

工場は噍吧哖及二重溪の兩所にあり、大正二年九月兩工場の擴張に着手し昨年四月漸く其の事業を完成した。今兩工場が前期得たる處を計上せんに左の如し。

噍吧哖工場	直接消費糖	百五十一萬七千餘斤
	原料糖	百四十二萬七千餘斤
	糖蜜	四十九萬二千餘斤
二重溪工場	計	三百八十三萬六千餘斤
	赤糖	四十六萬二千餘斤

兩工場合計	四百二十九萬八千餘斤

鐵道は前期末現在延長四十一哩三十六鎖、機關車、客車、貨車等七百四十餘輛を有す。所有土地の面積は百三十八口百五十四甲餘歩であつて、決算後新に七十甲餘を得、現在二百二十五甲餘に達して居る。尙ほ此の外蹼耕契約の土地多數を有し、其等は全部甘蔗栽培に使用された。本年度の植付は千二百三甲歩に達して居る。

三、資産と利益

同社の資金は

土地建物	拾八萬圓
機械農具	六拾貳萬五千圓
鐵道	貳拾壹萬五千圓
製品、貯藏品	拾七萬八千圓
賣掛金、手形	拾七萬壹千圓

其他預金、貸付金、次期放資等約四拾萬圓あり、成績は何を云ふも創業日淺き事とて充分の成績を擧げる事が出來ぬ。製糖は前期四百二十九萬八千餘斤で此の賣上代金が參拾五萬七千參百餘圓、鐵道の方は僅かに貳百餘圓しか擧げ得なかつた。其處で前期の收入は製品、農事、鐵道各方面の諸收入四拾七萬五千圓であつて、支出の方は製造費、營業費、鐵道費其他諸經費を合はせて四拾壹萬六千圓、差引五萬八千圓の純益で、積立金を控除して四朱の配當をなした。

四、同社の幹部

同社の重役左の如し。

取締役社長	鈴木梅四郎	常務取締役	河井芳太郎
常務取締役	川上熊吉	取締役	原邦造
取締役	岩崎清七	取締役	陳鴻鳴
取締役	吳汝祥	監査役	安部幸之助
監査役	里見四郎	監査役	張作人
監査役	吳純仁	支配人	麻生誠之助

五、同社の大株主

同社四百株以上の大株主左の如し。

三、六七六	吳純仁	三、四二〇	陳鴻鳴
三、〇〇〇	原邦造	二、八六〇	吳汝祥

二、五〇〇	高津久右衛門	二、二九二	吳道源
一、五〇〇	安部幸之助	一、三〇四	張作人
一、二八〇	顏振聲	一、一五〇	楊鵬搏
一、〇〇〇	岩崎清七	一、〇〇〇	鈴木梅四郎
六三四	梅原重雄	五九〇	山內賢吉
五五〇	麻生誠之助	五四〇	林子科
五〇六	楊利兵	五〇〇	小曾根喜一郎
五〇〇	花木七郎右衛門	四八〇	江曉青
四一〇	江以忠	四〇〇	櫛瀨和太郎
四〇〇	棚瀨軍之佐		

帝國製糖株式會社

一、沿革

同社は明治四十三年十月資本金五百萬圓四分の一拂込を以て松岡糖廓を買收し創立されたもので本社及工場を臺中藍興堡に置き出張所を東京市京橋區山城町に置いたもので其の創立者は山下秀實、松岡富雄、松方正熊、山口誠太郎、安部幸之助、安部光男、山中隣之助、松元泰正、高島義若、林烈堂、林瑞騰、林季商氏等であつた。而して創立當時の經營主腦は社長に山下氏專務に松岡氏、常務取締役に松方正熊氏で山下、松岡兩氏は臺灣本社にあり、松方常務は東京に居て、東京事務所を監した。其の後松岡氏專務を辭して平取締となり、現在に於ては山下社長、常務牧山清砂氏臺灣本社にありて經營に任じて居る。

二、工場及規模

工場は創立當時は一ヶ所であつたが大正二年十二月分工場を設立したので今は二工場あり、其の場所何れも相近接す。本工場は七百五十噸にして分工場は三百噸である。機械は獨逸ザングルハウゼン製造のもので設備は完備して居る。

鐵道は營業線專用線合せて六十餘哩に達す採取區域は最初は臺中附近に於て一萬四千八百甲の許可を受けて居たが、四十四年十一月、更らに區域擴張の許可を受けたので、從來の分と合すれば、臺中附近から南投廳方面に掛け約二萬甲に渉る採取權を得た。同社の此の採取區域は島中最も豐沃で元來が米產地であるから灌漑の便を得て居る土地であつて、甘蔗栽培には最も好く、栽培に於ては目下全島第一の成績を擧げて居る。而して同社は此の地味の好適なると共に

會社農事當局者が農事方面の改良に大に努力して居る爲め一層原料收穫の上に特徴を現はして居る。今後會社は極力自營農場の擴張に努力する方針であると云つて居る。

三、資産及利益

同社の財産狀態は（前期）

土地	五拾五萬六千圓
建物	四拾八萬五千圓
鐵道	五拾萬八千圓
機械	百貳拾五萬六千圓
農場	五拾壹萬參千圓
製品委托品	拾六萬六千圓
貸付金	參拾八萬壹千圓
其他	百四拾參萬圓

而して現在の拂込資本金高は貳百五拾萬圓、各種積立金は八萬八千貳百圓である。

次に前期間の生産は

分蜜双目糖	千二百六十六萬斤
白双糖	四千斤
分蜜車糖	五十二萬五千斤
分蜜二番糖	三十四萬六千斤
合計	千三百五十三萬五千斤
外に糖蜜	二百四十六萬千斤

此の製品代百四十七萬六千餘圓で純益四拾貳萬千貳百餘圓を擧げ八朱の利益配當をなした。

四、同社經營の首腦

同社の重役は左の如し。

取締役	山下秀實	常務取締役	松方正熊
常務取締役	牧山清砂	取締役	山中隣之助
取締役	山口誠太郎	取締役	松岡富雄
取締役	棚瀨軍之佐	取締役	林季商
監査役	松元泰正	監査役	安部幸之助
監査役	田中善助	監査役	林烈堂

五、同社の大株主

同社八百株以上の大株主左の如し。

六、一五〇	安部幸兵衛	五、〇〇〇	平田正之
五、〇〇〇	松元泰正	五、〇〇〇	山口誠太郎
三、七〇〇	山下秀實	三、三〇〇	松岡富雄
二、五五〇	安部幸之助	二、五〇〇	林烈堂
二、五〇〇	林瑞騰	二、〇〇〇	近藤喜衛門
一、四〇〇	松方正熊	一、二七〇	高島義恭
一、二〇〇	山中隣之助	一、一〇〇	小鹽元太郎
一、〇〇〇	柵瀬軍之佐	一、〇〇〇	古郷時待
一、〇〇〇	近藤虎三郎	一、〇〇〇	小島勇之助
一、〇〇〇	三好德三郎	一、〇〇〇	山田陽朔
一、〇〇〇	藪田岩松	九〇〇	田中善助
八〇〇	安土直次郎	八〇〇	吳鷺施
八〇〇	王學潛	八〇〇	蔡蓮舫
八〇〇	蔡敏南	八〇〇	林季商

南日本製糖株式會社

一、沿革

同社は明治四十五年三月苗栗、中港、新竹の各製糖會社を買收し資本金五百萬圓を以て創立されたもので本社を新竹廳竹北一堡、工場を同地並に中後に置き東京出張所を麹町區有樂町に置いた。

工場は新竹中港の二工場の他、横濱に精糖工場を有し一昨年六月作業を開始したが收支償ぬ爲め八月に至つて閉鎖した。又た新竹工場に於ては昨年二月赤糖製造を始めたが二十日許りにして作業を中止してしまつた。だから今完全に仕事をやつて居るのは中港工場一ヶ所である。

二、同社の規模

同社は以上の如く其の作業をなしつゝあるは一工場なるも兎に角工場は三ヶ所を有して居る譯で自作蔗園は蹟耕地を合はせて九十四甲餘である。鐵道は營業線總延長約六十哩で敷設の許可を得て居るもの二哩ある。

三、資産及利益

資本總額は五百萬圓、拂込貳百五拾萬圓で其の資產狀態は左の如し。

三製糖會社買收費	四拾四萬五千圓
土地、建物、機械	貳百六萬貳千圓
鐵道	四拾五萬壹千圓
製品貯藏品	貳萬六千圓
農事諸勘定	五拾貳萬九千圓
預金、假拂其他	拾壹萬四千圓

前期の製品收入は貳拾八萬四千圓、鐵道收入は千五百圓雜收入を合はせて總收入參拾萬四千圓である。之れに對する支出としては製造費販賣費等拾九萬七千圓、農事費七萬四千圓、利息、營業費等拾貳萬貳千圓合計參拾九萬四千圓を支出し差引九萬八千圓の損失となつた。同社は創業以來其の成績順調ならず其の原因は種々あるべきも、一つの面白からざる惡原因を有すると、夫れから夫れへ色々の結果を生んで其の成績を亂すものである。重役の動搖の如きは卽ち夫れである。要するに同社は今や整理の時代に入り、當局が大努力を要するの秋である。

四、經營の首腦

同社現在の重役顏觸左の如し。

取締役社長	前川太兵衛	取締役	澁谷正吉
取締役	大川平三郎	取締役	白石元治郎
監査役	岡崎久次郎	監査役	村松甚藏
相談役	堤德藏	相談役	竹內綱

五、同社の大株主

同社六百株以上の大株主左の如し。

三、三一〇	鹽谷榮藏	三、〇〇〇	安藤德之助
二、九〇〇	田中宗太郎	二、〇〇〇	石田庄七
二、〇〇〇	河村寬裕	二、〇〇〇	山本久願
一、七一〇	峯村千一郎	一、六七〇	久村長三
一、六〇〇	古川源太郎	一、六〇〇	平川久吉
一、六〇〇	杉本一二	一、六〇〇	笠定
一、五三〇	鄭拱張	一、五〇〇	市橋重忠
一、五〇〇	田中久太郎	一、五〇〇	山村喜一郎
一、四五〇	佐々木收藏	一、四〇〇	友田祐太郎
一、三〇〇	中村寅吉	一、二〇〇	辻潔次郎

一、一〇〇	新名功	一、〇〇〇	大川平三郎
一、〇〇〇	堤德藏	一、〇〇〇	小林合名會社
一、〇〇〇	澁谷正吉	一、〇〇〇	勅柄三郎
八三〇	河村富正	八〇〇	竹內綱
七〇〇	村松甚藏	六二〇	中山民生
六〇〇	大西正雄	六〇〇	大西廣太郎

沖臺拓殖製糖株式會社

一、同社の地位

同社は其の本店を沖縄縣那覇に置きて二分蜜工場一赤糖工場を管し支店を臺灣に、事務所を大阪に置きたり。今此等本支店事務所の沖縄臺灣に於ける諸工場の地位を擧ぐれば

本社　沖縄縣那覇區西新町二丁目四十一番地

嘉手納工場　沖縄縣中頭郡北谷村字嘉手納　（分蜜糖製造）

西原工場　同　中頭郡西原村字我謝　（同　上）

臺灣支店　臺灣南投廳林圯埔街三百五十四番地

下茘工場　同　南投廳下茘庄　（赤糖製造）

前大埔工場　同　嘉義廳前大埔庄　（同　上）

新威工場　同　阿緱廳新威庄　（同　上）

林圯埔腦館　同　南投廳林圯埔　（樟腦製造）

集々腦館　同　同　集々街　（同　上）

草嶺腦館　同　嘉義廳草嶺　（同　上）

大阪事務所　大阪市南區長堀橋

本社の所在地那覇港は沖縄縣の首都にして製品搬出其他商務上重要の地位を占め嘉手納工場は沖縄縣の西海岸に又た西原工場は東海岸に瀕し舟楫の便は元より原料耕地の中央にあり工場經營上最も宜しきを得たり。臺灣に於ける製糖、製腦工場及同社經營の輕便鐵道の如き又た經營上好地位を占めて居る。

二、沿革

沖臺製糖會社は元と沖縄製糖株式會社と云ひ明治四十三年十月資本金貳百萬圓を以て創立され工場を沖縄縣中頭郡嘉手納に置き初めは赤糖の製造に從事したが翌四十四年十二月同縣西原なる農商務省沖縄糖業改良事務局分蜜糖製造工場の拂下を受け此處に二工場を經營し其の後大正

元年十一月に至り臺灣の雲林合資會社を買收し赤糖及樟腦の製造並に輕便鐵道事業を引き繼ぎ經營する事となり爰に同社は沖繩臺灣の二島に跨りて事業の手を擴げたるを以て社名を「沖臺拓殖製糖株式會社」と改め沖繩縣那覇を本店臺灣南投廳を支店と定めた。而して沖繩嘉手納工場は其の後時勢の趨向に顧み其の裝置を西原工場同樣分蜜糖製造に改めた此處に於いて沖繩工場は何れも分蜜糖を製造する事となり以て今日に至つたが今や又一工場の增設中である。

産糖地としての沖繩が領臺以前に於て如何に我國糖業の巨鎭たりしかは彼の産糖二百八十年の歷史を有するを以ても知るべきである。去れど沖繩は南溟偏在の孤島なるが故に其の民固陋其の業亦容易に改善せられず依然として彼の時勢後れの黑糖をのみ製造した。其の結果黑糖の産額は徒らに增加したれども需要之れに伴はず市場滯貨を生じ農民窘窮し漸く沖繩産業の深憂たらんとした。此の時に當り沖臺製糖會社は決然立つて沖繩糖業の改良に任じ其の局部的産品を轉じて世界的製品となし沖繩産業の發展に貢獻せんと志した同社は此の大なる目的の爲め多大の犧牲を拂ひ非常の努力を捧げたのである。

三、沖繩の分蜜工場及原料製品

同社製糖工場の第一とすべきは元より沖繩縣嘉手納工場にして西原工場之れに次ぐ。

今簡單に此の二工場の內容と其の施設とを見ん。

(イ) 嘉手納工場

(イ) 工場面積

敷地　一萬五千坪

建坪　千五百十四坪七合一勺

(ロ) 設備大要

種類	大サ	個數
ハロールトミル	28"×54"	1
フイルタープレス	32"×31"三十六枚一組	3
同上 トリツプエフエクト	24"×24"四十七枚四組	4
バキウムパン	470H.S	1組
同上 クリスタライザー	容量10噸	1
同 20噸	同 20噸	1
セントリフユガルマシン	40 dia	6
タンク	容積容量	26

ミルの壓搾能力は四百噸にしてマリスワドソン會社製作に係る、工場附屬としては完備せる修理工場あり。同工場は清水汲上作業に於て最も大仕掛のものあり卽ち電氣作業により工場附近の田畝より一旦清水を工場脇小岡上に設けたるタンクに汲上げ夫れより之れを工場内に配水す而して此の電働機はベリス、エンド、モルコム會社の製作に係る。工場附近原料採集區域内には縱横に輕便鐵道を敷設し、工場附近には回旋橋及船着場の設備あり。此の二者の如きは如何に同社が其の創業に當り苦心を要したるを推せしむ。又た同工場分析室は設備善く整ひ藥學士井上清氏之れを司る。

（ロ）西原工場

（イ）面積

敷地　八千三百十坪

建坪　七百坪餘

（ロ）設備大要

英國ハーベー會社特許分蜜糖製造裝置

附屬機械器具　百二十九點

修理工場　一棟

壓搾能力は百噸にして其の能力は嘉手納工場の夫れに比し四分の一に過ぎずと雖も、同工場は元と農商務省が沖縄糖業改良の爲め多大の經費を投じて設備したるもの所謂「金に飽かせて」精良の機械を買入れたるものなれば一點間然する處なく模範工場として誇るに足るべきは曾て一外國技師が其の設備に嘆美の聲を放ちたるに徵しても知る事が出來る。從つて其の製品も亦善良を期し得られる。

沖縄嘉手納工場にありては原料は品質優良にして豐富なる北谷、讀谷山、越來の三ヶ村並に中城差里二ヶ村によりて採集し、西原工場附近又た多く甘蔗を產し沖縄本島は甘蔗栽培地の中心である故に其の原料は極めて豐富にして全部買收に應じ能はざるの盛況を示しつゝあり。元と同社工場を沖縄に開設せる頃にありては古來自家に於て製糖を事とせる農民等は往々甘蔗を會社に賣却する事を拒みたるものもあつたが之れは既に過去の事に屬し目下に在つては彼等は漸く其の原料を會社に賣却するの利益なるを覺り來たれり。之れを以て會社は今や全く原料難より脫却した。殊に此處に特記を要すべきは大正三年會社は舊琉球王家より蔗園四百餘町歩を買收し原料自家經營をなす事となりたるを以て今後は原料の一部は此の自家蔗園より穫るに至るべく會社の事業は愈〻安固となつた。

製品はＯＳＢ（双目糖）ＯＳＢ（三溫糖）及ＯＳＢ（次三溫糖）分蜜糖にして沖縄工場の分蜜糖産額は嘉手納工場五六萬俵西原工場二萬俵で尙一工場增設されなば十萬俵に達する近きにある。

四、臺灣方面

臺灣に在りては下崁（原料栽培可耕地數千甲歩）、前大埔（同上千甲歩）、新威（同上四百甲歩）の三赤糖製造工場あり、目下其の産額一萬二千俵に達し、近く右三工場採集區域に於て甘蔗の增收方法を講ぜられつゝあれば製産額逐年增加すべきか。又た臺灣に於ける製腦業の現狀を語らんか同社は臺灣の中部卽ち新高山麓を界線として和社地方の蕃社を包容し北の方南投廳下集々管内の諸山に亘り、東の方中央山脈に境し西の方嘉義廳下草嶺石壁湖山に至る南北十方里東西五六里の地（面積五十四方里）に於て採集の特權を有し此の間二十一の山溪を抱有し之れが作業人員千六百四十二人を算し産額百十七萬五千斤に上る。而して其の製品は一定の價格を以つて全部を臺灣專賣局に納付する。

同社が臺灣に於て經營しつゝある輕便鐵道は臺灣の中部林内停車場より支店所在地南投廳林圯埔街を經て東の方東埔蚋溪に至り林圯埔竹林組合經營の溪頭湖に至る輕便線に連接す此の延長七哩二分の一ある。同鐵道は經營上頗る有利の地を占め未墾地に於ける開墾、製材業、糖廓、

木炭製造等諸業の發展を促し貨客の運輸力を增進せしめた。

尙ほ同社が製糖及製樟事業に附帶し開拓しつゝある開墾地は前項原料の部に記述せるが如く沖縄縣嘉手納附近に於ける自營蔗園四百餘町歩を第一とし臺灣に於ては陳有蘭濱岸内芽埔に田地六甲歩、頭社坪に約百甲歩を有す。是等臺灣の開墾地は米穀其他農作を行ひ製腦從業員の食料を供給せんが爲め開拓されたるものである。

五、同社の將來

同社が沖縄縣に於て糖業改良、分蜜糖製造に着目し種々の困難を排し其の目的を達したるは頗る同縣民の多とせざるべからざる處ろで沖縄縣歷代の知事は何れも同社の事業を替し、之れを扶翼せざるなく同社の努力施設と相竢つて今日あるを致せるが、原料の豐富設備の增大は近く現在の産額七八萬俵を超越し十萬俵に至るは必然にして同社は今や社運滿盛の期に入らんとし今年は裕に一割以上の配當をなすべしと傳へらる。惟ふに同社は今後沖縄分蜜糖製産增加につき計劃する處あるべく現在の工場のみにては不足を感じ來たれるを以て同會社は今回更に沖縄縣島尻郡豐見城村字良長の内浮海、仲毛、前原に地を卜し總坪數一萬三千四百六十一坪を買收し新工場の增設を企劃した該土地は一等一坪壹圓貳拾五錢其他は凡て一坪壹圓五錢の割合にて

六月二十日迄に買收を了へ既に地並らし工事の測量も去る二十九日にて了し七月一日より愈〻工事に着手するの運びに至つた右土地の買收に關しては郡長村長及び村會議員區長其他有志者は非常に歡迎して斡旋の勞を執りたりとて同社は大に感謝の意を表し居る。

機械は英國グラスゴーより輸入の新式にて公稱能力二百噸なるも二百五十噸迄は可能である、而して建物は全部鐵骨にて同縣に鐵骨の建物は之が嚆矢同工場は七月一日地鎮祭を行つた。

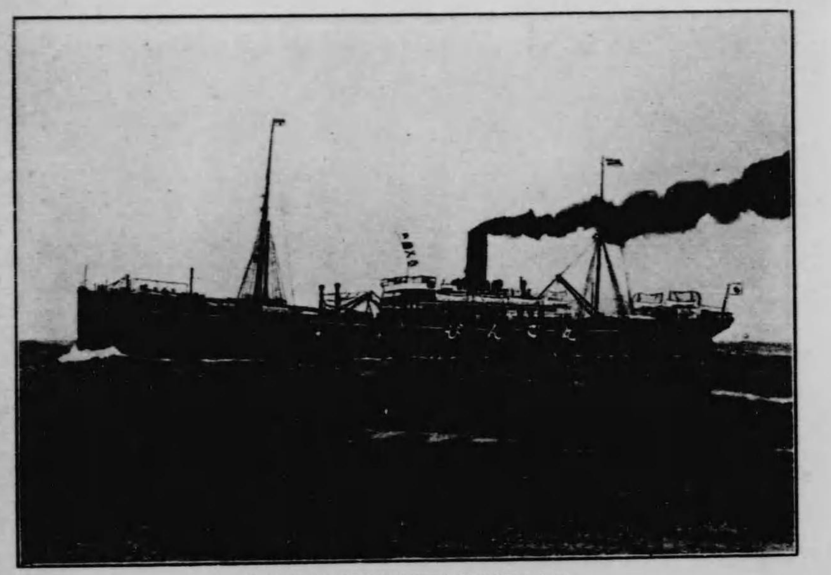
六、同社の首腦

現今同社の重役諸氏左の如し。

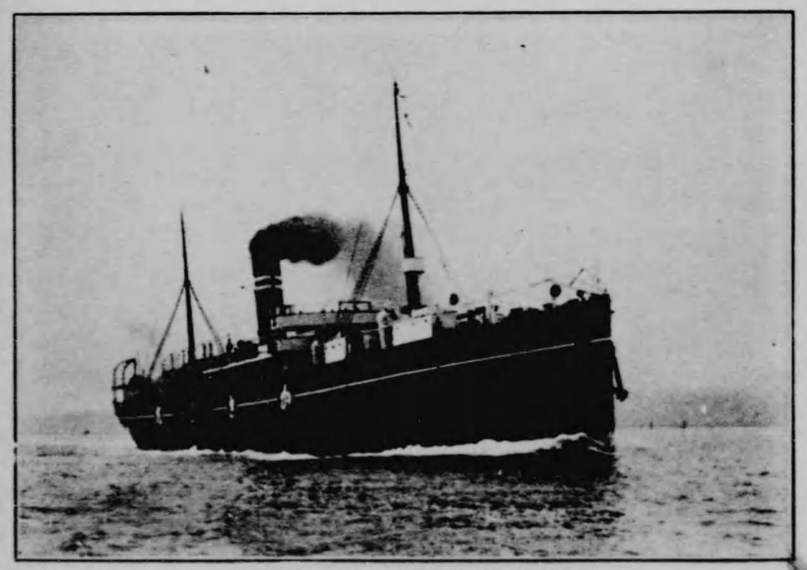
取締役社長	安部幸之助	專務取締役	矢野慶太郎
取締役	横井藤四郎	取締役	西尾小五郎
取締役	赤司初太郎	取締役	古賀三千人
監査役	香野藏治	監査役	伊藤常次郎
相談役	男爵奈良原繁	相談役	櫛瀨軍之佐

尙ほ奈良原男は同社創立當時創立委員長として盡力した人である。

附錄



日本郵船會社臺灣航路使用船備後丸



大阪商船會社臺灣航路使用船笠戸丸

（一）臺灣初見參

一、笠戸丸船上

五六年前、瀬戸内航路の小さき船に客となり、宇品に船繋りしたる頃、山の如き巨船我が船の舷頭を壓して横はり、其の黄色にして短かきファンネルは如何にも群小を睥睨するかの如くに見へた。船の名を問へば海軍用船の笠戸丸とある。期せざりき、今日かゝる大船が、其のファンネルに白く丸の大の字入れて、臺灣航路の一船に數へられ、偶々我を乘せて遙かに南日本の舊領土を訪はんとは。

四月の十四日と云へば、船上は未だ合服も薄寒かつたが、南へ行に從つて暖くなるべしと我慢して、瀬戸内は過ぎたが、門司港頭の春寒は、思はぬ處であつた。朝の九時に入港して午後の四時出帆とあれば、陸上一見の間はあるべし、壇の浦の落花裏に平家一門の跡訪はゝやと、ランチを岸に走らせた。商船會社支店の棧橋から、濱に從つて下關の町を東へ一直線、二十分ば

かりにして、壇の浦の海岸に出づる。松斜めに潮風に咽び、海峽の岬角突出する處、千帆萬帆且つ去り且つ來り、長閑なる朝景色は、忽ちにして我が心頭を爽徹ならしめた。

御裳川の流は今僅かに小川ともつかず溝ともつかぬいさゝかの流に名殘を留め、遠來の旅人、容易に其の跡を覓め難い、内裏跡は此處より尙ほ二里ばかりありとの事に行かず。試みに其の邊りを徘徊すれば、山の蔭に散り殘れる山櫻が、平家の末路を語るげに、鳥の聲さへ何となく昔を弔ふかのやうに聞きなされた。歩を轉じて歸路に就き、赤間の宮に登りて、平家一門の墓を訪ふ。二位尼を始めとして、聞へたる平家一門の人々、此處に弔客の哀を誘ふ。墓前數株の櫻春既に晩く、斑々として青苔の上に散り行く姿、名を惜む武夫の最後は斯くもあつたか。げに哀れなる平家の最後である。

凡そ歴史を讀んで平家と云ふ二字程雅た而して哀れな感を誘ふものはない。花の都を後に、一の谷、屋島、壇の浦と段々西へ〳〵落ち行く一門の運命程奇しきものはない。而して彼等は常に戰爭と風流とを一致せしめた。彼は花の都を捨てゝも其の美しき山水にあこがれた。故に其の陣營を築くや、亦常に山河の要害と共に風景の絶美なるを撰んだやうに思はれる。卽ち一の

谷の如き、屋島の如き而して更らに壇の浦の如き、何れも内海に勝れた景色どころである。彼等は此處に戰ふた。思へ綠滴る須磨浦の松原に、緋絨鎧ひたる、薄化裝の若武士一騎、沖なる兵船に遲れじものと馳せ出る。彼方後の山には源家の武士、兜の星を輝かし、白旗さつさと松の梢に流れる。沖なる赤旗、山なる白旗、海、山、磯なぞの自然美との對照は如何ばかり美しからうか。彼等は此の對照美を描きつゝ西海の波に沈んだのである、彼等も亦た風流に於て恨みなきものではないか。而して今此の墓前の數株の山櫻と、苔蒸した質素なる墓石とは又た彼等の風流を滿足せしむるものではなからうか。一門の墓は實に見るかげもなき質素な墓であるのだ。此處より少し下れば安德天皇の陵あり、一拜して山を下る。

夫れより下關の市中一見、青物市場の賑なぞに旅の心も面白く、再び商船棧橋よりランチに投じて母船に歸へり、繪葉書なぞを認めたるに、尙ほ正午には早かつた。食後甲板に出で、合服の薄寒き儘に連りに甲羅を干す。冬服を持ち合はさゞりし事此の上なき遺憾なり。午後一時間許りを喫煙室に同船の黑板傳作氏と臺灣の糖業の事なぞにつき談話した。

午後四時出帆、門司外海の荒を思ひたるが、一向に靜かにて何の事もなし。翌夜三等室に餘興ありとのボーイの注進に、船中の無聊此の上もなしと出掛く、役者は何れも三等のボーイなり

と云ふが相當上手な事感心なり、落語あり、仁輪加あり、新派劇あり、樂屋は劇壇の二階にあれば登壇の美人、天上より落ち來たるなぞの滑稽あり。三等のお客樣は拍手大喝采にて永當々の大入可。處が此の笠戸座の入場料なるが之れは勿論表面は無代なるが、中に世話人と云ふものあり、翌日寄附を募つて歩く事となつて居る。ボーイとても晝の仕事の外の大活動なれば寄附位は當然である。又たお客樣のお爲めなれば、船の方にても相當保護の方法を講ずる事然るべし。益々同座の大入繁昌を祈るものなり。

それより十八日朝基隆着迄は、此の間十七日基隆迄の船の位地につき、船からの懸賞答案に落第したる位の外、記すべき事なし。「海上靜穩、船客一同元氣旺盛」と無線電信のお定まり文句其の儘、十八日の曉は基隆港岬の朝霧を破つてズット港内に入る。岬角の燈臺明滅星の如く、水上署ランチの汽笛一聲高く殘夢を攪破す。

二、臺北初見參

船は大岸壁にピッタリと着く、下船の便利、神戸なぞの及ぶ處にあらず、六時頃船を下り棧橋

をドン／＼と一直線、基隆停車場へ獨出に行く。出かゝつて居た一番汽車に驛夫から押し込まれるやうに急き立てられ、漸く臺北行の客となる。手荷物一切は萬事船で取扱ひ、體一つ臺北迄持つて行けば、荷物はイッカ臺北の客屋へ着く順序、臺灣は便利至極、違つたものなりと早や何だかうれしくなる。

車窓から沿道をのぞいて見る、同車の總督府のお方が色々と說明して下さる。土人の家が珍らしい、土匪との戰鬪で彈痕の夥しく殘つた民家の殘壁物凄く立ち、今は太平の逸民が、水田の邊を悠々と歩いて居る。長閑な事である。パッと白きものが水田の中から立ち揚る。忠臣藏のお輕が懷紙を投げ付けたやうな光景、アレは何かと聞くと鷺であると云ふ。臺灣は夥しい鷺である。水邊脚と云ふ驛に至る。聞く此の驛より東は雨、西は晴る。是れ蓋し此の地高臺にして山の爲めにかゝる氣象の變化を見るものであらうか。

七時半頃臺北に着く、車夫に日本人の居たのは意外だ。臺灣もモハヤ內地化しつゝある。內地車夫なぞは臺灣に居なくても好いのに殘念な事だ。イヤ／＼車夫處か、下駄直し、羅保屋何でも居ますと車夫が云ふ。此の點から云へば琉球の方が殖民地色彩に濃かだ。琉球には內地の車夫なぞは居ない、皆釣髯のある琉球人だから何だか琉球へ行くと殖民地へ行つたやうな心

持ちがする。臺灣も臺灣人の豚尾の車夫が「クルマ、イクカ」とか何とか宜しくやつて來ないと調子が惡い。然し內地は甚だしく逼迫して居る、人口過剩、經濟壓迫であるから、其の樣な事は言つて居られない。

日の丸館と云ふ宿屋に入る。至つて廣からざる部屋に案內す。こは怪からぬと存ずる程に、女中畏み〳〵て申すには、今日は各廳長さんのお宿にて、お氣の毒の次第なれども、午後四時頃迄此處にて御辛抱をとある。四時迄は我慢ならぬと赤くなつて頭を振り立てる程の氣短かでもなしとて大に忍耐の德を現はす。去る程に市中に散步を試みんと思ひ立ち、先づ宿より近き公園に行く、市中は支那風の洋館軒を並べ、街路は何れもアスファルトにて敷き詰めてある。公園は噴水から銅像から、又た花園なぞ結構に出來上り、附近の西洋造と對照して、身西洋に在るが如し。殊に公園に新築の紀念博物館は堂々たる石造で丁度中の島の圖書館其の儘である。今日は其の開館式にて、エラキ人は大抵此處に集まるので、館內には土俵を作り、折柄巡業に來て居る東京大相撲一行が開館の祝角力をとる段取になつて中々景氣が好い。花園には色々臺灣產の美しい花が咲き亂れて、しばし此處に足を留めしめる。何と云ふ心地の好い事だらう。彼處の四阿には涼み棚が造つて、夫れに蔓がからみ、何と云ふ花か何れ臺灣特產の花だらう。

紫色の花が盛んに咲き、其の葩が澤山に地上に散つて居る。花は流石に臺灣に極めて豐富らしい。吾等の如き花好きは此の花と云ふ點だけでも臺灣移住を企てる値がある。イヤ〳〵花の事なら、未だ左樣に感心するのは早過ぎる。今少し感心に出直しを命ずる。

公園から又た街へ出で、俥に拾ひ乘りをして、苗圃に行く。動物や山娘なぞ云ふ臺灣產の鳥が居る。此の山娘は顏が赤や紫で美しく飾つて居るからの名稱であらう。グルリと場內を一巡して花園に出る。此處には臺灣產の花は悉く網羅されてあるやうだ。胡蝶蘭と云ふのも此處に苗がある。而して何人にも卽賣する。此處は又た一段の眺めで、花は紫紅一面で、何れを見ても欲しいものばかりだ、思ふに臺灣の旅行者は臺灣產の植物を見、又た花を見る丈けに、態々此處に三十分なり、一時間を送るの値打がある。斯樣なる美しき花園を有する臺北住民の幸福を羨まざるを得ぬ。此處に於ては一旦出直しを命じた感心を本式に出さゝるを得ない。

一旦宿へ引き返へして、車を命じて臺灣神社に參拜す、臺灣神社は畏れ多くも臺灣征討の任にあらせられ、南部の毒瘴に觸れさせ給ひて、薨御あらせられた北白川宮殿下を、祠り奉つた處で、吾々日本國民は、臺灣を訪ふ度に是非とも此處へ、參拜せねばならぬのである。いとも尊き御事共である。

神社は市中より約一里足らず、參詣道の兩側には相思樹の並木生ひ立ち、殊の外心地好い。只一直線の道で、南禪寺を一帶青松道不迷とすれば、此處は又た同じく一帶の相思樹道迷はずと云ふべきか。

淡水河の鐵橋を過ぎ、車を下り、夫れから砂利道を、少しく登るのである。境内は殊に清淨神聖で、中々凡夫の測り知るべからざる處。磴道數十級を登りつめ、社前に拜伏久うして、又た磴道を下る。眼下には淡水河、白く其の流域を示し、白帆さへ鮮かに見へる。紫色の朝顔が道の芝草の中にも、又た淡水河の濁れる水の緣にも咲き亂れて居る。

三、臺灣で日本酒を釀る

臺灣神社からの歸路、芳釀社と云ふに立寄る。芳釀社は「胡蝶蘭」と云ふ酒を釀造して居る。臺灣只一の日本酒の釀造所である。臺灣の如き熱帶で何うして仕込時の嚴寒を要する酒を作り得られるかと云ふ疑問が生ずる。處が此の疑問は冷却裝置によつて解決せられる。予は猛々ではないが酒に趣味を有するものである。又何の緣か自分の今居る處が、酩酒正宗の出來る灘の中央である。臺灣三界での酒研究は亦實に妙でないか。茲芳釀社を紹介するのも不思議でない。

此の芳釀社は既に前から釀造に從事して居たものであるから、今度それを大擴張し會社組織にする事になり、安部幸之助氏創立委員長となつて今株を募集して居る。折柄安部氏は南部にあり、刺を通じたれども會ふを得なかつたが、社員より話を聞き技師の案内を得て内部を見た。此の芳釀社の中心裝置なるものは冷却であつて、鹽化カルシウムを以つてし、一番冷たい處は零下四度である。麹室なぞでも暖過ぎて、却つて冷却して居るやうな譯である。而して冷藏庫に桶を列べ、此處で仕込んで居るが、外からの暖氣を感せぬやうに冷藏庫の壁は三重になり、庫は二重になつて居る。かゝる裝置を以つて居るから酒は年中絶へ間なく釀造する事が出來る。熱い處であるから防腐劑を使用するやうに思はれるがそうでない、何等の防腐劑をも投せぬ。造石數は會社組織に擴張の後は五千石を釀造する筈である。

此の芳釀社製の酒が之れ迄批難を受けた點は酒が好く狎れて居ないと云ふ事である。貯藏の期間が短い爲めに新酒にあるやうな味が勝つて、内地の酩酒のように鈍いぼんやりとした味に乏しいのである。であるから貯藏の期間さへ長くすれば此の批難は脱れる事が出來るであらうと思ふ。それを技師に質すと、之れ迄は貯藏倉庫が一棟しかなかつた爲め、後から〳〵製品を入れ換へ、遂に前製を早く倉出せざるの已むなきを見た次第であるが、今後は倉庫を四棟にする

事であるから、充分貯藏の上、味を狎らす事が出來るとの事であつた。試みに尙ほ以上の說明中に漏れた要點を左に記しとゝむ。

▲米の洗濯は米洗機を以てし一時間に十二石を洗濯す
▲動力公稱馬力三十八馬力
▲米は內地米を使用す
▲樽瓶も內地より移入す
▲內地杜氏は雇はず
▲直段は一升七拾五錢
▲販路は主として臺灣島內

八十度位の臺北の熱度に、汗をしたゝか流して芳釀社を訪ふと、此處で零下四度の嚴冷裏に冷却され、五體一時に收縮する。其收縮したる肉體を亦た八十度の戶外へ持ち出して熱する。寒熱の差何ぞ一時に甚だしき、何だか燒豆腐になつたやうな心地して、いさゝか狼狽する。

四、臺灣の第一印象

臺灣へ來て何を第一に感じたかと聞かれたら、先づ今の處では斯う答へやうか。

一、某隆棧橋の宏大、完備せること
一、臺北にて洋行したる感ある事
一、萬事生活狀態が悠暢なるが如きものある事
一、自然美。但し熱帶式綠蔭に乏しき事
一、水牛の糞の大なる事
一、健康的なる事
一、官吏の威張る事
一、宿屋の發達內地以上なること

以上は甚だ平凡である。然し臺灣を琉球の毛の生へたもの位に思つて居た予の無學寡聞は哀れむべきものであつた。美しい花の澤山咲く健康地らしい、晴々として暖い空氣、何處にマラリヤなぞがあるだらうと思はれる。自働車が盛んに飛んで行く、鐵輪の人力車なぞは見たくもない。理髮屋に入る。設備完全だ。能い宿屋がある、立派な部屋や裝飾がある。能い料理屋がある部屋の廣々として庭の氣の利いた點なぞ內地も餘程上等の旅館でないと見られないものだ。而して臺北の空氣が暢々として內地のような、氣短い、忙しい、引きつまつた處がないやうに

見られるのは、何よりも神經衰弱者に適して居る。

五、臺灣の水田

自分は基隆から臺北迄の汽車中、連りに目を見張つて甘蔗園を發見せんと努めたが、茲に夫れらしいものが見付からなかつた。其處で臺北から臺中行の汽車中で又た甘蔗園を見んとしたが只目に入るものは手入の行屆いた水田あるばかりであつた。水田は實に立派なものである。高きより低きに段々下りになつた處は、石崖が綺麗に積まれて、水が滿々と湛へられ、埠圳の用意も行き渡つて居る。斯樣な風なれば旱天の時も多く心配はない。安心して米作に從事する事が出來る。是れ臺灣に於ける米作が中々盛んで、浮かりすると甘蔗園迄も犯しはせぬかと云ふものがある位である。殊に二作と云ふ事も米作の有利なる點、米價の高い時なぞは、何うしても農民が米作の方に傾くのは當然である。總督府としては米作も農民の利益なれば奬勵保護せぬ譯にも行くまいが、そうすれば製糖會社の方の嫉妬を招く。此處が中々厄介な處である。予の水田を見た頃は、二番草位かと思はれる位の丈けに伸びて居たが、農民が其の田の草を取る格構が一寸內地の夫れとは違つて居るやうだ、臺灣人は水田の中に座り込んで、膝頭でズッ

ト苗と苗との間を滑つて行く。而して休む時は座つた儘の委である。我等には此の樣餘程妙に思はれた。

六、臺中の夜

臺中に晩の六時頃着く。春田館と云ふに宿る。可なりの宿屋なり、部屋も相當廣いのがあり、殊にうれしきは庭を廣くとり、庭の中央へ突き出しのや、庭の中を橫斷した部屋なぞがある、而して庭には花壇が作つて、此處にも色々な臺灣の花が咲き誇る。斯樣な事は旅人を慰めると共に又た旅人をして學問をさせる。アレは何と云ふ花、此は何と云ふ草なぞ、吾等も二三其の名を此の宿の庭に聞き覺へた事である。

夜街を歩く、暗い事甚だしいが廣々として居る。指物細工屋へ入つて色々出させて見る。此の指物細工は全部監獄署で出來るのだ。囚徒が閑にまかせて出來すのだから中々手の掛つて美事なものがある。其の代り直段が高い、思ふに臺灣には何も旅人が土產とすべきものがない。砂糖だの樟腦だのと取りとめもない、大きな物產はあるが、一寸携げて歸へる手工品に乏しい。で此の監獄署の細工物を名產にして、內地へも移出する事にしたらば何うかと思つたのであるが、

中々左樣は監獄で卸さぬ。と云ふのは、此の細工物は手間をかけるから數が出來ぬ。又た實際に於て手間を掛けた處に値打があるので、粗製濫造のものは到底賣れない。それから尙一つ困難なのは、此の細工に從事する囚徒は、年期を終つて出獄すると、外の業に轉じて了ふから、折角持つた技術は監獄にある間を限りとして中斷される事である。惜むべき事だ。

細工屋を出て。足のまに〳〵歩いて見る。臺灣土人の夜店に、木の實を料理するもの、人形を作る男、臺灣菓子を賣る家なぞ、いさゝか賑かな處に出る。ぞめきに出る若者達、鼻歌にて押し出す、之れより向ふ通りに、遊廓ありと云ふ事ならん。十時頃かへりて眠らんとす。隣の部屋一方ならず騷々し、何事ならん、「お隣の部屋へ遠慮せよ、する必要なし」なぞ云ふ聲さへ聞ゆ、何でもエラキ人達なるべし。

七、臺南警見

四時頃、臺南驛に着く。旅館に至る迄の車上より、見廻はすに、其の街の有樣、著しく臺中の夫れとは趣を異にしたるやうに覺へた。卽ち最も臺灣式なることである。聞けば臺南は內地人土人雜居で、臺灣式の家屋に內地人が住んで居るのである、南部に來るに從つて、斯樣に臺灣的

の色彩が濃くなるのに一層旅行の興味を感ずる次第である。

四春園と云ふ旅館も、醜からざる旅館で、庭の立樹、草花等主人の意を注ぎたるを見るべく、部屋取り方も暑苦しからず。一浴の後、市街見物に出る。第一に參拜すべきは臺南神社である。社殿の後に棟低き白壁の土人小屋あり、白壁と云ふも、風雨に黝く、見るべからざるものである、此の小舍こそ、畏こくも、北白川宮殿下の御骸を容れ奉つた處で、殿下は此の小舍の裏の粗末なる竹の御寢臺に横はらせられたのである。悲み何ぞ堪へん。吾等今百里の鐵車に横はりて、山河を縱横し、高閣の下、座臥悠々、何等の不自由を感ずる事なし、顧みていとも畏れ多き次第である。謹みて再拜し去る。當時行軍の際は卽ち此處に師團司令部を置いたもので、今も尙ほ此處に少數の軍隊を駐めて居る。

神社の前の法廳、市場廳なぞは臺南の重なる建築物で、殊に市場の建物なぞは堂々たるものだ、中央停車場を小さくしたような煉瓦建で、野菜、魚類、乾物、雜貨一切のものは此の裏に賣捌かれるのであるが、予の見たる時は、時晩かりし爲め、或る部分は盛況を見る事が出來なかつた。

其の夜鹽水港の數田氏予の爲めに鶯遷閣に招宴を張られ、臺南新聞の諸氏來たり會せらる。

八、旗尾農場に立ちて

予が臺灣旅行の内、予に深き印象を求めたるは蕃薯寮の一夜である。此の一夜ある前、予は先水港製糖の經營する旗尾農場を見たのである。農場については既に「南下北上記」のづ鹽項中に詳說したから、亦た此處に多くを費すの必要を見ないが、予の如き百姓の成り上りはかゝる農場の經營に多くの趣味を感ずるのである。

斯樣な廣々とした大組織の農場は、北海道はいざ知らず内地に於ては之れを見る事は出來ぬ、只農科大學駒場の練習農場は略斯樣な觀を呈して居る。春麥の穗波の揃ふ頃は、見る果もなき青海原で、雲雀が高く其の上に囀るのである。自分は此の農場に立ちて、十五年前の駒場の學窓生活を追憶せざるを得ぬものがある。自分は其の廣き農場の木蔭に書物を讀みつゝ眠た事もあつた。砂糖蕪を栽培し、夏の日の渴に堪へで、之れを割つて喰つた事もある、芋泥棒をした事もあつた。草むしりをやつた事もあつたが、其の時分には、餘り農場の廣いのに時々ウンザリしてしまつた事がある。今自分は此の農場に立つて、當時の活氣滿々たる若き青年を思ひ、一夢茫々實に人生の老ひ易きを嘆せざるを得ない。人は何うしても故郷を慕ふ念が深い、自分

は學問の故郷たる駒場の學窓を去つて十年、新聞記者となつたが、又た再び百姓生活の方が暢氣であるやうに思はれてならぬのである。我れは遂に故郷に歸へるべきか。

眼を放てば、スチームプラウが連りに農場を活歩して居る。土の鋤き起される處、プラウの後方に當り、無數の小鳥が群集して居る、其の美しき奇觀は、又た此處ならではと思はれる。何の爲めに斯くも多數の小鳥が集つて來るかと云ふと、プラウが土壤を鋤き起すと同時に、其の中から蟲が飛び出して來る。其の蟲を啄み喰はんとするのだそうである。此の小鳥の内には、其の蟲を啄んで、附近に居る。水牛の背の上に飛びのり、悠々と蟲を喰つて居るのを見る事がある。小禽の巨獸を愚弄する事何ぞ甚だしきや。

九、蕃薯寮の一夜

蕃薯寮の名既に生蕃的である。去れど事實は餘程相異して居る。此處に到らんとするには、鹽水港製糖經營の機關車附客車に乘るのである。停車場の裏に一本の大きな菩提樹があつて、下の方に澤山實が生つて居る。實は人の頭程もあり瘤々の出來た毒々しそうな實であるが、中の果肉は中々うまいそうである。而して其の實の不思議は決して高い枝には生らぬ事である。下

の方のやがて地上に達しもしやうとする處に、幾つも固つて生つて居る、之れ程の大菩提樹は臺灣には珍らしいので態々見物に來るものさへあるそうだ、樹の四方は青草が一面に生へて、ベースボールのグランドになつて居る。社員の運動家が頻りにボールをはづんで居る。青葉に包まれた此のグランウンドの心地好さ、汽車は其のグラウンドの一端を横つて、河を横る。流は激しく、其の上方に突兀たる峯鋸の如くに並び立ち、奇觀此の上なし。旗尾の名の因つて起つたのは、山の形が旗の尾のやうに凸凹形になつて居るからの事であらうかと云ふ事だ。物の五分か十分で直き蕃薯寮の驛に着く。驛前から又た直き臺車に乘つて、芭蕉の生ひ茂つた間を行く事又た五分計り、石段のある山の麓に停る。此の石段を登ると山上に別莊がある。山上は公園になつて居る。

別莊と云ふは茅葺の風雅な建物で、二三の部屋もあり、奥座敷は廣くはないが。相當な座敷で、廻り縁がついて居る。縁に立つて眺望すると、四方豁然として開け附近一面の野山は、眼下に横はる。麓には兵營があつて、號令の聲も聞へる。

風呂の設備もあつて、遠來の客は此處に汗を流し、遺憾なく休養する事が出來る。何等の不都合もない。著述家や畫家が立籠るには此處は屈强の處と思はれる。

火點し頃から此處に數田、松下、吉田、益田の諸氏來られ、招宴を催さる。四隣寂閑として、夜の深くなると共に、蟲の聲が高くなる。談笑の聲は獨り此の可憐なる夜蟲の奏樂を亂すのである。

自分は此の夜を此の如き高臺の幽庵に送り且つ宿泊する事を此の上もなく難有く思ふもので、積日の疲勞も爲めに一掃される事であらうと思つた。麥酒に醉つた儘、四肢踏みのばして奥の間一杯になつて寢ると、朝迄は只一睡。

朝は早立であるから約束通り、庵の婆さんに起される。四方を開け放すと朝霧が一杯、清らかな曉風と共にサツト室内に入り、一時に睡氣が覺める。朝日が其の左手の尖つた山角を紅に染める頃、山を下りて再び臺車の人となる。

一〇、阿緱から打狗へ

蕃薯寮驛で益田君と落ち合ひ、阿緱に向ふ。用向きは臺灣製糖の阿緱工場を見るの外は何もない。阿緱へ行くのは九曲堂で鹽水港の線路を官線に乘り換へるのである。此の九曲堂と云ふ處は鳳梨の集散場で此の附近から盛に收穫した鳳梨が集つて來る。而して驛では其の皮を剝いで

四つ切にして鳳梨を賣つて居るが、其の香は得も云はれず徐ろに旅客の喉を鳴らさせるのである。阿緱へ着いたのは十一時頃、一旦阿緱ホテルと云ふ處に入り、少憩して、三千噸の製糖工場を訪ひ、此處に約四五十分を費して、引き揭げ、車で阿緱の市中をグル〳〵と廻り、ホテルに歸へる。此のホテルの庭が垣根なく、只の野原と打ち通しになつて居るのが變つて居る。四五年前から居る女中の話によると此の邊は土匪の激しかつた處で、土匪の捕へられて斬首に逢ふもの、日に幾つとなくあり、此の庭の附近にも、生首の落ちて居た事は屢〻あつた。或時惡戯好きの土人が、其の生首をホテルの勝手元へ投り込んで、女中等を驚ろかした事があつた。又た或る宿屋の女將が女匪に、掠められて辱めに逢つた話なぞを面白ろ可笑くして聞かせる。何しろ物騷千萬な世の中であつたに違ひない。今は此の邊も土匪は根絶してしまつた。兵隊なぞ駐屯して居るが之れは寧ろ生蕃の來襲に備へてあるのだと。此の地は生蕃に近く、兵隊がなくば出て來るだらうと云ふ事だ。

阿緱から打狗へ行くには下淡水溪と云ふ大河を横るのである。此の鐵橋が東洋第一、鴨綠江のよりも長いそうである。二時頃打狗に着き、春田館と云ふに投じ、風呂に入り髯を剃り、一段と男振を上ぐ。訪問に出掛けんとしたるも行先皆不在にして中止し、夜に入りて市中を一見す。

但し打狗の市中の暗きに驚きたり、ヒッソリ閑として行人さへなき通りがある。海岸通りなぞも至つて靜かで、店舗なぞも一向お客も無さそうだ。聞けば此の頃は砂糖の振はぬ爲め、人氣銷沈甚だしく、高き屋賃を拂ひ居たものは店を支へ兼ね、三人四人合同住ひをなす有樣である と然し砂糖の景氣が好くなれば又た打狗も好くなるだらう。

其處で町の賑かなのは、打狗市中に求むべからずして、對岸の旗後にある。旗後に渡るには石油發動船に乘じて快走すれば十分位で旗後の棧橋に達する。棧橋を上ると直ぐ賑かな通りで、夜店が盛んなものである。大路小巷皆明々と燈を照し、景氣好ろしげに見へる。先づ言つて見れば旗後と云ふ處は遊樂の地で、大阪で云へば道頓堀のやうな處である。劇場遊廓なぞも此處にある。故に市中より隔つて居るのである。但し好い料理屋は打狗の方に集つて居るもの丶如く、就中山上の打狗花壇なぞは、眺望なら、又た設備なら、中々内地の料理店なぞの及ばぬ處もあるやうだ。

打狗灣は袋のやうで、入口は極狹くなつて居る。岸壁は目下の處では三千噸位の船しか着かぬが、追つ付け一萬噸の船舶十艘を着ける樣な設備に改める事になつて、着々築港をやつて居る。埋立會社なぞもあつて、隨分廣い面積の間を經營して居るが、此等が完成して、人家が建て並

ぶと、打狗の面目は一變するだらう。

臺灣定期航路が基隆に三日も停泊するのは惜しいものだから其の間を利用する事にして、航路を打狗迄延ばしたらば、何うかと云ふ說をなすものがある。そんな事にてもなれば、打狗は繁昌する事だらう。而して又た此の說は出來ない相談でもないやうに思はれる。

予は打狗は好い處、將來ある處とは思つたが、只風が强く輕塵烟の如くに飛んで、漠々空を鎖し、碌々太陽も見る事が出來ぬ日があるの一事は閉口すべき事だ。

一一、林　圯　埔

沖臺製糖の支店のある南投廳林圯埔街と云ふ處は予の臺灣見聞記に特別なる材料を與へた。予が之れ迄に經過し來つた內では此處が一番臺灣趣味の深い處である。否其の總てが臺灣であると云つてもよい。日本式の家屋なぞは僅少なもので、先づ以つて本通りでは、一軒の料理屋と旅館丈け、其他では一二會社員の社宅位のもので、沖臺製糖の事務所なぞも臺灣の家屋を其の儘使つて居る。自分は臺車に乘つて、輕鐵發着所の前迄來た時、餘程不思議な處へ來たやうな心地がした。奧深く臺灣の內地へ入り込んで來たやうな心地をしたのも道理である。輕鐵發着

所から沖臺製糖の事務所へ行く迄、途中の街を歩きながら見物する。臺灣式の汚い家が軒を連ねて甚だいぶせき事であるが、夫れが又た變つて面白ろく感ぜられる。街の少し回り角になつた處に、廟堂其の儘を改造した郵便局がある。五六年前此の廟堂で土匪が三十人許り斬られたそうな。

沖臺製糖の支店は土民の家を其の儘取りつくろつた、一寸廣い家で、社の奧に樟腦庫がある。此の庫では山から持つて來た粗製樟腦を樽へ入れ、二つの樽を背中合はせに、逆樣に倒して、中の樟腦油を流し出す。而して樟腦と水分と油の含有量が專賣局の規定と合致する程度を見計つて、樽から出し、之れを專賣局に納めるのである。倉の中は、嚴しい樟腦の香で目が明けない位バシ〳〵とする。樟腦の倉から出て、宿屋にかへり、疲を休める。宿屋も上等と云ふ程ではないが、藤椅子の一脚も置いた、可なり廣い部屋がある。先づ下宿屋の上等位なものだらう。夫れでも不自由は感ぜぬ。

林圯は元と土匪の蔓つた處であるから、曾ては兵隊も駐屯したが今では居無い。會社は沖臺と三菱の竹林事務所。官衙と云ふのは支廳と大學の實修所がある許り、それでも內地人は五六百人も居るだらうか。

此の夜沖臺の諸氏予が爲めに招宴を設けらる。席上色々話を聞くに、元と此の地方は極めて物騷な處であつたらしい。卽ち土匪は隨分此の邊を荒しまくつた。而して日本の討伐兵を惱ましたものである。先にも言つた郵便局の三十人斬の如きは其の一例である。斬に會ふた彼等は陽に歸順を裝ひ、陰に敵對行爲を行ふたもので、之れが土匪の慣用手段であつたらしい。此處に於て討伐當局は斷々乎として此の横着な奴等を取締らなければならぬと感じ、片つ端から斬つて其の根を絶やさうとしたのである。彼等三十名のものは一日歸着式を擧げるのだからと云つて彼の郵便局になつて居る廟堂に招集し、酒肴を備へて假りに式を行ひ、其の周圍は巡査、憲兵、兵隊と三重に包んで一人も逃さじと待ち構へる。司令者の合圖で、白刃直ちに彼等の首に臨んだのである。廟前の小溝爲めに紅の流るゝを見たと云ふ。斯樣な仕打は到る處に行はれ、遂に彼等をして手も足も出せないやうになつたのだから此の强壓法は大變利目のあつたものゝやうに思はれる、殘酷だ何の云つて居た日には到底彼等を根本的に壓する事が出來なかつたものである。否日本征討隊の遣り口は殘酷と云ふべきものではない。寧ろ或る程度迄寛大であつたのが、彼等は之れに附け込んだのだ。而して亦た事實に於て彼等土匪なるものは其の殘酷さが虎狼よりも甚だしい。彼等の我が駐在所或は官公衙、住民を襲ふて之れを殺すや、或は孕婦

の腹を刳りて胎兒を引き出し、腹に砂を滿たし、或は生き乍らに鼻を切り、耳朶を落し、或は又た小兒の鼻柱に針金を通して引きづり歩いた。此の點は却つて生蕃共より殘酷である。斯う云ふ奴は到底手寛い事では平げ得られるものでない。予は當局が適當なる處置を講じたる事に滿足するものである。

日本が臺灣を領するに當り多大の犧牲を拂つて土匪を平げたと云ふ事は臺灣の土人に對する大なる恩惠である。夫れ迄は良民安き心もなく、土匪の跋扈跳梁に托せ、財貨を捲き上げられ生命を失つたのである。支那官憲之れを奈何ともする事が出來ず、却つて彼等の鼻息氣を伺つて居たのであるからお話にならない。

土匪の憂は三四年前迄は絶對にないとは云はれぬ有樣であつたが今の處では全然其の跡を絶つた。之れ偏へに征伐隊の御蔭である。厚く其の功に酬ゆべきものである。

一二、製腦視察大鞍山登山

林圯埔に來たりて樟腦山を見ないでは、龍を畫いて睛を點せざるものだ。處が樟腦山と云ふものが。左樣に安々と行かれる處ではない。遠くは六七里、近くも四五里あるから、先づ往復の

山路三日を要する。晴は左樣に安々と點ぜられぬ譯である。其處で林圯埔腦館を見るべきか、集々腦館を見るべきかと云ふ問題になつたのであるが、集々の方は道も惡い、幾分危險の處もあると云ふので海拔四千尺の大鞍山の林圯埔腦館を見る事になつた。

脚袢、草鞋に白服山高帽子。之れが其の日の扮裝で中々すさまじい。苦力に夜具毛布、米、罐詰、酒なぞを擔はせ、沖臺の製腦部長阪本君が先に立つ。林圯埔を出立したのは日既に高く暑さも中々增つて來た。洋傘を差しかけないと、山高帽子は堪つたものでない。林圯埔の街端れを山手に向ひ、水田の間の道路を進む。檳榔樹が淋しげに繁り、其の蔭に土人の茅舍が點綴して居る。亦た一種の趣がないではない。山路稍〻入つた處に三菱竹林事務所がある。樟腦山に通ふ苦力ならでは通る人もない山の中の寂しい處で家の內から家族らしい婦人達が、連りに奇態な風をした吾等を見送る。此の邊では內地人の通るは珍らしいだらう。

竹で製つた谷川の架け橋を二つ許り渡り一里許り行くと脚下に溪川を挿み、見渡した前面に高臺があつて、其處に駐在所がある。數年前土匪が此處を襲つて巡査三人を虐殺した。夫れは或る日の曉方で、土匪は鯨波を作つて此の高臺に現はれる。巡査は防戰努めたが、衆寡敵せず、二人は遂に其の場に敵手に委し、一人は高臺の鬱林を脫して、下の溪間迄落ちたが、之れも其

處で土匪に押へられ、首を授けた。卽ち其の場處が夫れで此の溪水は爲めに紅くなつて居たと阪本君が其の溪川を渡りつゝ話をする。處が彼等巡査の妻女は襖の間に隱れて不思議に一命を救ひ得たそうである。

道は一里半ばかりにして漸く險に入るやうである。茶屋が一軒あつて、老婆が饅飩粉で作つた餅のやうなものを切つて賣つて居るが、茶屋とは名丈けで別にお茶を酌んで出す譯でもなく、又た腰掛ける處も、ホンノ僅かな竹が三四本渡してある丈けである。山から樟腦の入つた袋を擔いだ苦力が此處で汗を拭ふのだ。此の邊り目に入る植物は山櫻欄の大なるもの、芭蕉處々。胸を衝くやうな山路漸く臺灣式險山の本性を現はし、喘ぎ〳〵談話も途絕へてしまふ。大きな藤蔓が樹の枝にダラリと懸り、其の蔓の下には深い谷が底知れず見へる。竹鷄と云ふ鳥、甲高き聲にて連りに鳴く。此の鳥は姿は見へざるも活潑な調子で鋭く鳴き立てるから行人、しばしば其の聲に驚いて振り返へる。案內者云ふ此の鳥は「リンキホ」と鳴くなりと。溪間には鶯の聲も時々聞く事がある。

此の山は樟腦の外には竹の子の產地で此兩物產運搬の爲めにのみ切り拓いた險山であるから、他の者の容易に通ひ得られる道でない。自分は案內者から此の山に登る前に平生の健脚如何を

問はれたが、何のそれ程の險山があるものかと見縊つて居たが、扨て來て見ると意外の險道である「山は人面より起り」とかの形容詞があつたが、全く其の通り、道なき急斜面の岩を回ませ、或は人の登る爲め自然に凹みが出來たかと思はれる程の處がある。予は平生の健脚を誇るものであるが、かゝる難險に出つ喰はせると全く歩調も亂れる。然るに案内の阪本君は平氣なものである。予は製腦部長としての一資格に健脚と云ふ事の必要を覺つた。阪本君は此のやうな山を月に一度は必らず上下する。大鞍山處ではないモット高い險しい山もあるそうである。製腦の製糖事業と異る處は實に此處に在るのだ腦丁の如きは往々險路に足場を失つて谷間に墜落し生命を失ふ事があるそうだ。予は此の困難なる臺灣の樟腦事業の狀態を製糖業視察記の附錄として一班者に紹介し得られる事をうれしく思ふ。當局者の困難なる事を思へば、之れを紹介せん爲めに假令如何なる困難に逢ふとも辭する處ではない、ヨシ一命が之れが爲めに損じたら、夫れは職務の爲めに斃れたものだ。大鞍山の山中に竹の子の肥料となるも戰場に砲丸の的となるも其の根本意義は略同一だ。

竹の子と云へば此の山中の竹林は驚くべきものだ、行けども行けども竹藪計り、道の左右には美味げの竹の子がホッ〳〵と頭を出して居る。竹の節も美事なもので内地の一本參四拾錢する

竹なぞの及ぶ處でない。此の竹を何とか工藝に利用する事は出來ないかと尋ねて見たが駄目だそうだ、と云ふのは斯樣な高山の事であるから下迄の運搬費が高くついて到底引き合はない、現に曾て林圯埔には竹製品の製作所があつたが經營難に倒れてしまつたそうだ。然し惜しい事である。

其處で親は一向役に立たぬが、子の方は此の地唯一の物産として臺灣の各地方に運搬される。林内、林圯埔なぞ其の名からして既に竹の多き事を語るものである事が今更らに覺られた次第だ。

流汗衣を透してジク〳〵になる。上衣を脱して抱へる。喉が乾いて水を欲する事連りである。路には溪水もあるが内地の夫れの如くには清冽ではない。而し彼此云ふ場合ではないから夫れも飲む、又處々に竹の樋が横へてあつて、夫れに穴が明けて、竹の管が挿し込んである。之れは苦力が渇を訴へた時、此の管に口を着けて樋の水を吸ひ上げるのである。頂上の方から樟腦入の袋を擔つて下りて來る。腦油が袋の地を透してポト〳〵と滴る。何となく全山に樟腦の香が滿ちて居る樣に思はれる。

大鞍庄を眼下に見る峠の茶屋で漸くバナヽと湯水を貰ひ行厨を解き、喉を潤す。之れより元氣

亦た回復して更らに登山の歩を進める。

二時頃竹藪の間に一家の粗末な家を見出す。之れが卽ち腦館で此處に腦長が居るのである。腦長の女房、使丁等笑を湛へて、吾等を歡迎する。大豚が家の入口に横つて尻を向けお出でなさいとも言はぬ顏。鷄も居る。棟は二棟あつて、一軒は腦長の家族が居り、一軒は來客用のものでもあらうか、二軒とも大黑柱の外は全部竹で造つてある。壁も屋根も皆竹である。腰掛も竹である。薄暗い漸く吾等二人の膝を容れ得る丈けの部屋が、今宵一夜のホテルであるのだ。之れも旅中苦樂亦風流で、更らに厭ふ處ではない。使丁連りに愛嬌を振りまき手眞似にて歡迎の意を表し、掛樋の水を扱んで呉れるので、顏を拭ふ。更らにバケツに湯を取つて半入浴をやる。山上の設備としては之れが最上で、此の外には望まれない。

かゝる程に山上の日は暮れ安い。ハヤ夕餉の仕度とある竹の床の上に赤毛布を敷き、其の上に食臺を置いて、持たせの瓶酒を呷る。卓上の好下物として極めて豐富なるは竹の子の煮付けである。大きな鉢に山のやうに盛つて差し出す。豚の肉も又た大に賞するに足り、罐詰なぞは顏色なし。腦長餘りの御馳走に稍〻征服された形である。

食後の運動と云つても疲勞して居る事だから、屋前の廣場に竹椅子を持ち出して談話をする。

霧が山の間から起つて、見る／＼眼界を遮る。夜の幕が切つて落され、螢が火の子の如くに飛ぶ。拍子木を打つ樣な臺灣蛙の聲が一種の風韻を帶んで旅情甚だ悲しむ。

八時半頃迄藪蚊に喰はれながら話をする。何しろ此處は蕃界に近く且つ深山の事とて、之れ迄は屢〻生蕃が來て腦丁の首を取つた。一度首取りがあると、腦丁が恐れをなして皆下山する。製腦が止まると云ふ譯で難義をする。然し近頃は隘勇線の前進と共に左樣な事もなくなつたそうである。處が茲に一つ紹介をして置き度いのは此の山の監督の話である、監督は內地人で、山の要所々々に番小屋を建て其處に妻子と共に居つて山の監督に從事するのであるが、其の番小屋なるものは深山幽谷、人跡絕へたる處で、人里遠きは一里位もある。夜なぞは中々心細い次第であるが、晝の中は主人は監督の爲め山を巡り朝から晩迄不在である。其の間妻は子を抱へて留守番をするのであるが、隨分寂しい事であらうと思はれる。是等は旅費を合はせて月に多きは四拾五圓位少きも參拾五圓位にはなる。金も要らぬ處であるから、相當の貯蓄も出來ない事は無からうが、其の住居は中々の大忍耐を要する製腦業には斯る大忍耐ある人物をかゝる深山に立籠らして始めて完全に行はるゝものである事を讀者諸君は承知して頂き度いのである。

山上の夜は寒いからとて、丹前を浴衣の上に重ね、毛布にくるまつて眠る。此の一夜は體中が

何となく痒くて好くも眠られなかつた。轉々反倒して曉に及ぶ。朝何故かくも痒きかを聞いて見ると南京蟲や蟻が喰ふのだと云ふ事が明つた。之れも話の種である。

朝再び豐富なる竹の子の御馳走に逢つて八時頃製腦場廻りに立つ。扮裝は前日の通りと知るべし。製腦所は之れよりも奥の方面の或は山腹或は溪間に點在して居る。說く事を忘れて居たが、製腦は會社の直營と腦長制度の二つに別れて居るが、此の腦長制度と云ふのは卽ち請負仕事で腦長が其の下に腦丁と云ふものを使つて一腦館を組織し、腦長が請負つて腦丁の製品を纏めて會社に納めるものである。直營でやる場合には腦丁に金を貸した場合、逃亡される憂があるが、腦長制度になると、腦長の方で好く腦丁の事情に通曉して居るから、うまく腦丁を繰つて行く、で自然機關が圓滑に動かされる。之れを以て會社の方ではく多く此の腦長制度を採つて居るやうである。吾等が今見んとするのは卽ち腦長の許に製腦に從事する腦丁の製腦所である。

腦長の支配人が道案内をする。大きな樟の大木が、切り倒され其の外側が綺麗に斧で削り取つたのが處々に横つて居る。流石に樟腦を含んで居るから、此の切り倒された大丸太は何年立つても朽ち果てずに居る。

一番始めに着いた製腦所には、壯漢が二人居た樟腦を煑て居る。樟腦を造る順序は、先づ樟の

小さき削片を釜に入れて蒸餾すると、削片に含まれた樟腦は蒸發して、水蒸氣と共に蛇管を通じて冷却場に送られる、此の冷却場は甕を四つ程伏せ其の周圍には樋から水を取つて冷却する樣にしてある。蒸氣は下から第一の甕中に入りて順次に冷却され最後の甕に至つて結晶する。其處には結晶が油と水との裏に含まれて居る筈だ。夫れで木製の大きな盆のやうな器へ其の混合の製品を容れ水と油とを分離せしめ、結晶丈けを袋に入れて搬出するのである。而して燃料は樟腦の煑出し糟を以つてする。要するに製腦も製糖も同じやうなものだ。製腦の煑沸は卽ち砂糖の効用罐内の煑沸と同じ理由で、甕の中の結晶はクリスタライザー、盆の内の油水の分離はセントリユーガル操作である。

而して予は此處に樟腦山を見たる感想を語らねばならぬ。樟腦が砂糖に似て居ると云ふのは其の製造方法のみで、其の原料及び其の原料の生ずる場所は大に異つて居る。前者は高山險路の地で屢〻人命を奪ひ去る事もあるが後者は平原安易の地である。又た前者は其の原料が大木であつて風雨に強く、後者は細莖であつて暴風に弱い。而して更らに前者は其の幹木を伐り倒してから何時迄置いても其の含有する處の樟腦を失ふ氣遣ひはないが、後者は採取後長に亘れば直ちに其の含糖量に變化を來たすのである。最後に尙ほ一つ異るものを揭ぐれば、前者は栽培

に何等の手間も要らず自然の儘に放つて置けばよいのに反して、一方は栽培に多大の手間を要する事である。此處に於て予は此の樟腦事業と云ふもの丶性質が極めて安固であるものなる事を斷せざるを得ぬ。一方の砂糖が暴風雨の爲め又大病害蟲の爲め非常の害を受くべき不安の性質を持つて居るに反し、本業は極めて安全である。只だ勞力にして惜まざれば原料は何等の氣遣だもなく採取される。全山を見渡すに若葉を吐く大小の樟腦樹は無限に生ひ茂つて居る。小なる幹は漸く肥へ、大なるものは其の周圍數人にして始めて抱擁し得らる丶が如き巨幹もある。伐つても伐つても採り盡せない。

初め此等の樟腦山が雲林拓殖の手から沖臺製糖に移る時は樟腦事業に於て二割の利益を保證したるものであつたそうだが、今では其の利益は益〻多くなつて四割以上に達するそうである。之れは偏へに當局者努力の結果であると謂はねばなるまい。第一の製腦所から道を變へて溪を下り、峯を越へて第二の製腦所に着く、此處は一家族が住つて居て十才位と三才位の小兒が二人ある。釜は二臺あつて、從つて冷却裝置も亦た二組になつて居る。女房が竈の裏から熱した藥罐を取り出して素湯を汲んで出す。上の段の小舍には原料の樟腦木を削る處があつて、其裏で鶴の嘴の樣に心持ち彎曲した細形の手斧で、原料を削つて見せる。此の原料削りは大抵婦人

が從事するもので、澤山削る場合は一日七十斤位を得るそうである。

自分は此の製腦所の一家族の生活に深く興味を感じた。主人の服裝容貌が何となく原始的で其の一家の生活も亦た原始的で文明の空氣は此の山奥には少しも吹き込んで居らぬ。イザ去らんとすれば、主人袖を引いて曰はく、「日本の珍賓を待つには甚だ備はらざるも、只粗餐を參らすべき準備あり、今暫らく足を駐め玉へ」と。吾等之れを辭して、前途を急ぐ。主人去らばとて一子十才許りなるを道案内させんとて先に立たす。少年は小徑を走る鳥の如く、岩壁を攀づる猿の如く、忽ちにして數丁を過ぐ。徑別れて二條となる。幼年其の左方の一條を指して「客人よ、此の一路急坂甚だし、幸に恙なかれ」と云ひて一禮し、路傍に直立して、吾等の過ぎ行くを見送る。かゝる深山に育たる少年としては能く禮節を知るもの、予は彼少年の頭を撫で丶感謝の意を表す。少年眉目秀麗にして、甚だ才智に富むもの丶如し。都に出で修養させなば、天晴れ秀才となるべきを、

路は極めて險惡で、鳥さへも通はぬ處がある。樹枝交錯して眼前を塞堰し、苔滑かにして足を取り損へば忽ちにして千仞の谷吾等を呑む。彼の水滸傳の豪傑達は何れ此の樣な處に山寨を築いたものだらうが、自分は何となく其の會ふ處の天然及人物を見て、水滸傳山寨の人となつて

居るやうな心持がした。山寨と云へば大江山なぞも此の樣な險山であつたらうか、此の境に在りて自分は常に愛讀せる近松の「鬼城」の記に深き興味を持たざるを得ぬ。

『鹿猿鳥の聲絶て、上れば天に遡るかと目眩めき、下れば泥利に陷るかとも目覺しつゝ、十萬里の波立てゝ伯禹の跡を殘し、二千年の石橋となりんだり。人勞れ肝撓み、高根の雲に枕を欹て、岩もる水に咽を潤ほし、枯木聳へて横はり、苔滑らかに蘚繁き、蔓をたぐり足を爪立て、木の根に取付き〳〵、心を碎き肝を消す、見上れば萬仞の青けつ鎬を削りゝ見下ろせば千丈の碧潭藍にそみたり。耳に觸るゝものとては、峯に答ふる山彦や、雲の下行くちり〳〵水の音ならで、事問ひ交す者もなく、知る人得たる松と杉、木蔭にいざと人々は、息を休めて立給ふ』

通りで、只に一歩を踏み外せば千丈の谷で、到底命を助かる事は出來ぬ、心は碎け肝は消へる。加ふるに前日よりの登山に健脚も頗る奇しいものゝ足許はフラ〳〵とする。せんまいの太きこと手首程なるを伐りて、杖とし、之れを賴りに進み且つ進む。案内の腦長支配人が腰なる山刀を拔いて先に立つ、眼前を塞く樹の枝を切り落し道を拓きつゝ通る。竹鷄鳴く事切りで、リンキホ〳〵と呼び立てる。之れが何より山中の愛嬌者である。此の邊り高山植物の珍らしきもの

紫色の花咲く蘭あり、人の掌より大きく、背丈け程も高き「せんまい」あり、葉の大なること盥程の里芋あり、此の芋は食用にはならぬ、喰へば中毒するそうである。更らに何と云ふ樹なるか豌豆の花の如き紫色の大きな花の咲く樹がある。其の花がポト〳〵と飛んで散る。直徑七寸位の大竹が斜に茂つて居る。蘭科植物の多い事は此の山の特色であらう。植物學者、畫家の登山をなすものあれば得る處少からずと思ふ。

猿が樹の上に遊んで居る。吾等を見て狼狽て姿を隱す。栗鼠も出沒する。其他動物に蜥蜴の一種で珍な形をした奴が居るが別に毒蛇なぞは何にも居ないで。動物に心置く要はない。只恐ろしいのは絶崖の上の山徑である。

少し溪の樣な平地へ下つた處に竹の子干物の製造場がある。竹の子の干物と云ふのは竹の子の稍々生長し過ぎたのを皮なりに釜に入れて蒸し、皮を取り去り、小さく切りて、芭蕉の葉を敷いた籠の裏に納れ、少しく酸くなる迄置いて後之れを日に干し上げるのである、一種の臭氣があるが支那人は好んで之れを食す、此の製造場には十四五と十三四の小娘が二人、父の仕事を助けて、セッセと働いて居る。斯樣な場所は尙ほ他に一二ヶ所もあつた。

之れより更らに山腹を登り、山頂を亘つて、歸路の本道へ出で急坂になつた、籔の中で辨當を

喰ふ。處が此處で落ち合ふべき筈の苦力がまだ來ないので、待つ間竹の切株を横つて前を通る樟腦搬びの苦力を見て居る。下るもの登るもの、聲を掛けては行き過ぎる。下るものは竹の天秤棒の前後に樟腦凡そ二袋宛都合四袋を載せて居る、登るものは豚の肉だの、鹽鮭だの色々日用品なぞを提げて居る。是れは樟腦の代價に對して會社の方で買つて與へるのだそうだ。之れより歸路に着く。一潟千里の勢で三時頃迄に綿の如くなつた體を旅館の玄關に轉げ込ます。

一三、臺灣の鐵道

臺灣の鐵道は鐵橋と隧道で固つて居る。殊に鐵橋に至つては素晴らしいのがある。大安溪だの下淡水溪だのと云ふ大鐵橋は一寸内地には見られぬ。從つて沿道の景色も中々捨て難い。然し汽車には少々閉口だ。イヤ汽車は未だ好いとして、鐵道の掛員には少々不快の感を催した。お役人衆の威嚴の高い事はマア好いとして、驛夫先生なぞは何うしたものだらうか。大した見識で、吾々平民共はトテモ寄り附けない。去れど一言畏れ乍ら申し上げたい。内地ではお役人衆の官吏風を吹かすと云ふ事は二十世紀では最早や跡を絶つて居る。殊に鐵道の役員なぞは驛長始め助役諸氏極めて丁寧親切なもので、中々そんじよそこらの商人は跣足で逃げる位、イカに

臺灣なればとて左樣に鐵道の御役人が權を振はなくとも、好かりそうなものである。殊に況んや其の下にある驛夫先生おや。鐵道が旅客の愉快と安樂を計ると云ふ事は、必らずしも其の敷物を宜しくし、其の内部を綺麗にすると云ふ事のみではない。其の掛り員が旅客に快感を與へ、旅中の苦を思はしめないと云ふにあると畏れながら存ずる次第である。由つて此處に臺灣鐵道使用人改善の件に關し竹の端に「上」の一札を挿み、鐵道部長閣下に籠訴をする次第である。此の訴へ聞き屆けらるゝや否や。萬事心持の好かつた臺灣旅行が、折角之れ丈けで予に不快を感せしめたのは、反へす〳〵も殘念な事だ。

一四、歸航

五月一日の終列車で葫蘆墩から臺北に歸つて見ると臺北地方の薄寒いのが感ぜられる。南部の視察で餘り欲張つた結果、疲勞が一時に出て、前後も知らず眠てしまつて、翌朝眼の醒めたのが九時。起き上つて見た處が脚や腰が痛い。脚の痛いのは大鞍及大南庄登山の爲め腰の痛いのは臺車に乘り廻はした爲めである。臺灣視察者に注意す。宜しく視察者は一日視察したら一日宿屋なり何なりで休息し決して慾張つた事をなす勿れと。予の如き實に甚だしき慾張りで北の

方基隆に視察の歩を起し、南の方旗尾蕃薯寮を極め、阿緱、打狗、林圯埔、大鞍山、大南庄等を視察し再び基隆埠頭備後丸の甲板に立つ迄僅かに十六日。亦た慾張りたりと云ふべきではないか。予は船中迄も『臺灣糖業視察』をやつた事を奇とする。船中の糖業視察とは一體何う云ふ譯かと云ふと、同船の客に臺東製糖會社の吉野君あり。臺東方面の地圖を携へ來つて予の爲め說明す。臺東の方も卑南附近は非常に好く拓け、甘蔗收穫量なぞも中々他に比して劣るものではない、耕作地も段々と擴張され、將來も有望であるから、此處に更らに三百噸の一工場を增設する事になつて居る。耕作地は歸順生蕃を使用して居るそうであるが、生蕃共は中々働かないので弱る。指配者たる社員が一寸腰掛けると、彼等も同じやうに腰を掛けて休む、ナゼ休むのだと責めると、『大人が休むから休むのだ、平生吾々は何でも大人達のするやうにと云ひ聞かされて居るから』と濟したものである。萬事が斯う云ふ調子である。其處へ持つて來て言語が各蕃によつて各々異つて居るから一層困難であると更らに生蕃の危險は尙ほ絕へない、臺東の糖業は臺西に比して更らに斯樣な困難と闘はねばならぬのである。

予は船の中迄斯く糖業視察をやつたのである。然し予をして希望を述べしむるならば次回の視察には基隆より花蓮港に入り、鹽水港製糖の事業を見、陸路卑南に入り、臺東製糖を見、之れ

より船にて打狗に出で、臺西一帶を過ぎて臺北基隆に出で度い、予は其の機會ある事を信ずるものである。其の時予の『臺灣初見參』は大に其の新材料と頁とを擴張し別に臺灣視察記として一書の刊行を見るかも知れぬであらうと思ふのである。予は臺灣旅行中お世話になつた多くの人々又た船中にては太田事務長其他諸君に對し、謝意を述べたいのである。

（二）新渡戸博士臺灣糖業改良意見

新渡戸博士が當時當局に提出せる臺灣糖業改良意見は實に臺灣糖業が今日あるを得たる骨髓である。基礎である。讀者は左の意見書を讀んで博士の眼光炬の如きものあるを知るべきである。

本島の糖業に適する理由

（前略）余は種々の方面より觀察するに本島は產糖地たる資格を具備せると共に從來糖業の發達を妨害せる事情は之を排除し得るものたるを認め之れに改良を施し以て增加し得べき產額は啻に我帝國の消費を充たすべきのみならず進んで東洋市場に歐洲糖と拮抗するの餘力あるを信ずるものなり其の理由の概要は之を下條に論せんと欲す。

一、氣候　本島の氣象は頗る產糖地に適せり（氣象の詳細は氣象報文に載せるを以て贅せず）諸國の實例に基ける學說によれば甘蔗耕作に適せる溫度は攝氏零度以下を不可とす願くば五度以上ならざるべからずと云へり之を本島の氣象に照すに臺北臺中地方にては時に三度を下る事あるも臺南地方にては稀なり又甘蔗耕作に最も必要なる雨量に關しての學說は何國を問

はず年間千五百粍を下るべからずと云ふ此の點に於ても臺南地方は極めて適度の雨量を有せり北部臺北地方或は南部恒春地方の如き殆んど三千粍に達し尙ほ甘蔗を栽培し得るも過度の雨量は品質をして劣等ならしむそは佛國殖民地たる「レウニオン」島若くはギニア海岸に於て同一例を觀る所なり又た氣象と甘蔗との緊切なる關係は高溫度の季節卽ち甘蔗成長力の最も旺盛なる時期再言すれば夏季に於て雨量多きを要せず今世界の產糖地を通觀するに何れか能く此の必要を滿たせるものぞ布哇の半面の如きも雨量充分なる時季には溫度低く以て產額を減じ又た溫度充分なる時季には雨量少なし是に於てか巨萬の費を投じ人工的灌漑に依り之を補ひ其の產糖費の大部分を擧げて之を灌漑に注入し以て纔に其の地位を保てり其一例を擧ぐれば「オアフ」島に在る夫の有名なる「エワ」蔗園に於ては一町步の甘蔗耕作料又た製造費千四百六拾圓なるに此の內灌漑費は參百拾五圓卽ち二割强に達すと云ふ元來人工灌漑は水の分量を支配すること自由なるの點に於て天水に賴るに比し便宜あれども到底費用に斃るゝを免れず「クインスランド」は水利の不便布哇の如く甚しからざるも結局亦た同一轍たり而して其の能く然らざるものは各國中獨り瓜哇あるのみ然らば我臺灣は如何と顧みるに北部稍〻劣れるも南部に至りては七、八兩月を雨量最多の季節とし此の期間は熱度亦た最高なり而して早春

收穫の時期に際すれば雨濕漸く減じて乾燥の季節到來し野外の業務を便ならしむるは是れ臺灣特有の天賜なり若し飽くまで余の希望を云はしめば今少しく植付後の溫氣を增すことを得ば是れ無上の好適なれ共縱し現在の儘を以て云ふも此の地の氣象は實に稀有なるものにして雨量と溫度と能く適應に相合致し以て糖業發達を促すものなり然れば布哇に於て甘蔗の成熟十八ヶ月を要するも本島にては十二、三ヶ月にして善く成熟するの差あり（北米合衆國の南部に於て八ヶ月に收穫する所あるも却つて其の生產費を高め糖分又た割合に少なし）是れ豈無上の天惠ならずや然かはあれ共本島亦た敢て灌漑の必要なしと云ふに非ずそは後段に於て細述すべし。

二、地形及土性　地形の廣濶平坦なるは甘蔗栽培上の必要件なり蓋し甘蔗は容積重量の大なると苅取後貯藏の久しきに耐へざるが爲め之れを運搬するも輕便なる方法を選むの必要あればなり卽ち地形の廣濶平坦なるを利用し或は車道を開通し或は軌條を施設するに至便なるは他の天惠と相俟て缺くべからざる要素たり諸邦國に於ける甘蔗產地の海濱近傍に橫はれる所以のものは普通に所謂甘蔗は潮風を好むの故に非ずして沿岸に平地多きが故なるべし又た灌漑を施すにも全面均一の水量を比較的少額の費用を以て供給する事を得るの便あり島內北部

大桉山々中に於ける樟腦原料採取の光景

大桉山々中の製腦場にして記者此處に太古の民を見出し少年嚮導役として道案內をなす（記事參照）

を除き中部以南一帶の地形概ね廣濶平坦なるは單に此の二點より推考するも蔗作に適應するものと謂ふべし又た糖業上より本島土性を大觀するに北部は粘土過多にして適地と稱する能はざれ共南部は之れに異り淡水溪其他川流の賜物と稱すべき冲積土にして砂質壤土の地多し是れ尙ほ最上產糖地の資格を缺くも決して不適地に非ず殊に此の地方に於ては產糖に必要なる石灰質に不足なきが如し輓近の學說に據れば適應なる產糖地の土壤は之れに含める「石灰マグネシア」との比例一と三以下なるべからず若し之れより下なるものは產糖の見込なしと云へり之れを詳言すれば普通土壤中に存在する兩者の分量は概ね相均しきか然らざれば石灰多きに居るを常とし此に甘蔗を栽培する事久しければ「マグネシア」は其の分量の上る變動少きも石灰のみは漸く消耗し終に石灰の分量「マグネシア」に對する三分の一の割合に減消すれば其の地は甘蔗耕作に不適なるを致すものなるに本島南部地方の土壤分析を見れば概ね石灰は「マグネシア」よりも多し其の少きものも亦た二分の一を下らず偶々三分の一以下に減ずる處あれば米田として甘蔗を植へざる如き本島人も亦た實驗上此の望を識認せるものならんか之れを要するに此の學說上より見るも本島の土性は甘蔗耕作に障礙なきものと謂ふべし。

三、植物的比較　熱帶地の風土に適する甘蔗と溫帶に位せる歐洲の物產たる甜菜と相比し二

者の世界の市場に於ける長所を比較せんか甘蔗は必らず最終の勝利者ならん何んとなれば如何に學理の應用に長じ以て甜菜の收穫を三倍に增し且つ糖分を五倍に進むるも植物性理上甘蔗の收穫甜菜に優れるは其の本來たり今歐洲甜菜產地の上園收穫高を觀るに普通一町歩に付き三十噸以內にして之れより得る糖量は七千斤內外なるに瓜哇に於ける甘蔗の收穫は九十噸內外にして糖量一萬六七千斤に當る取りも直さず此は彼に二倍せるものなり尤も這は二つながら優等地の產額を採りたるものなれば以て一般を律すべからずと雖も之れを世界に通じ其の平均を求むるも尙ほ甜菜一町歩の收穫二十五噸糖量二噸半强なるに比し甘蔗の收穫五十噸糖量四噸三分强なるを觀るなり加之彼は根菜なるが故に之れを收穫するに勞力を要することは亦た此よりも多し甜菜は五、六ヶ月にして收穫し得るが故に土地に休養を與ふるの間暇あるのみならず又た資本運轉に便なるに反し甘蔗は十餘ヶ月を要するが故に地力を消耗する事多く且つ資本運轉にも不利なり加ふるに蔗糖は其の搾滓を以て家畜を飼ひ其の糞を以つて肥料に供し農家に利する所多きに似ず甘蔗の搾滓は盡く燃料に供せられ肥料として土地に回さるゝものは唯灰あるのみ但し甘蔗は地上に長日月を費すに拘はらず除草其他栽培に要する勞力割合に僅少なり然れば此の點に於ける比較は二者優劣殆んど相半するものと謂ふべきが尤も

溫帶地にして十二月間不休に土地を使用せば地力疲弊甚しからんなれども熱帶地は日光及風雨潤澤能く之れを補ふて餘りあり彼と此とは一概にして云ふべからざるものありと知るべし甜菜は種子より成長するものなるが故に植物生理上新種類を養成するに至便にして風土の異る各地に適宜の種類を造成するを得れども甘蔗にありては莖より生育するものなるが故に新種類を創作する事頗る困難なり是れ甘蔗は二千年以前已に耕作されたるにも拘はらず百五十年前に始めて世に現れたる甜菜に比し改良遲々たる所以なり甜菜成熟期の短少なるは意外なる經濟的利益を占むる理由となり歐洲市場より甘蔗糖を放逐せんとす何んとなれば甘蔗糖家は如何に機敏に砂糖相場の昇降を窺ひ知るも植付と收穫との間に一ヶ年餘を費さゞるべからざる故甘蔗の反別を伸縮する事難し、之れに反し五、六ヶ月間に收穫し得る蔗糖は相場の高下を見越し適宜に植付反別を伸縮する事甚だ利益なるに由れり。

四、勞力の缺乏　世界の重なる蔗園地を見るに勞力供給に苦しまざるもの殆んど稀なり布哇及「クインスランド」は其の最も著しきものにして此等の國に於ては白人の勞働少きが爲め土人或は東洋人を使役するの止むを得ざるに陷り之より生ずる苦情は茲に述べざるも屢〻新刊雜誌に散見する所なり爪哇は昔時勞働不足の爲め强制的に土人を騙り之れを鞭ちて使役せし

が近年大に面目を革め勞働の缺乏を感せざるに至れりと云ふ又た近年迄世界最大の產糖地と稱せられたる玖瑪は西班牙政府の壓抑を蒙り次で內亂を釀し其の住民は國を去り或は戰に死せるもの多く勞働缺乏の爲め終に糖業の大沮喪を釀し其の產額は千八百九十六年の一ヶ年間に百萬噸より二十二萬噸に減少し此後急に回復すること難し又た一時砂糖の獨占地と稱せられたる「ジャメイカ」の如きも黑人の勞力によりて其の位置を保ちしが近頃著しく產額を減せり其の原因種々ありと雖も奴隸解放以來の勞力不足は最も主要なるものなり其他偶々勞力不足なき產糖地卽ち佛蘭西殖民地印度等あるを觀るも此等は毫も改良の途を知らず徒に舊套を墨守せるが故に如何に勞力豐富なるも到底歐洲糖に匹敵する能はざるの狀あり之れを統ふるに勞力缺乏は各國殆んど皆同軌たり但し蔗糖國に於ける勞力缺乏は蔗糖國に於て想像するが如き難事にあらざるべし何となれば甘蔗は甜菜に比し三分一の勞力を以て栽培し得ればなり然るに說を爲すものあり曰く甘蔗は一方に刈取をなすと同時に他方に植付をなすが故に勞働の需用一時に集中し爲めに往々勞力不足を告げ且つ勞銀を嵩むるの不利ありと蓋し多少は之れあらん然れ共甘蔗は植付苅取共に甜菜の二三週間の短期間內に是非とも終了せざるべからざるが如くならず蔗園各區の成熟に伴ひ順次二三ヶ月間に渡るも差支なく「ラハイナ」種に至

りては殊に此の便多し是れを以て現在に本島甘蔗の苅取は早きもの十二月下旬に初め晩きもの四月上旬に終り毫も差支なきを觀れば糖業の年中行事に勞力分配の不便を感ずる事あらず說者の徒は歐洲甜菜の狀態を推して甘蔗の實況を誤認せるものなり然らば勞働供給に就き我が臺灣は如何と云ふに前にも述べしが如く四五年以前より勞銀騰貴の困難を唱ふと雖も是れ決して救濟の策なきにあらず現在とても甘蔗栽培に慣熟せる勞働者は各地決して其の人に乏しからざるなり唯之れを指揮するに二十世紀の改良法を以てせば甜菜糖との競爭も敢て恐るゝに足らざるべし。

五、資本　此の點に於ては蔗糖國の蔗糖國に及ばざる事遠し熱帶地の住民は云ふ迄もなく多くは半開の野蕃なれば貯蓄心なく資本に乏し又た强國の殖民地たるもの多きが故に母國の資本を借入れ流用すと雖も利息甚だ低からざるに苦しめるの狀あり瓜哇に於てすら千八百八十四年の恐慌に方り一時糖業の衰頽を極め殆んど絕滅の悲境に陷ゐらんとせる事あり而して其の一大主因は資本の缺乏にありしなり又た近來蔗糖の歐洲市場に於て其の昔日の位置を失ふに至りたるは原因數多なりと雖も中に就き蔗糖園の資本豐富なるは其の一大原因なり何んとなれば砂糖相場は蔗糖製造の季節卽ち秋季より冬季の間に低落するを常とせしかば西印度糖

の歐洲に到達する頃は會々相場の騰らんとする時季なり然るに蔗糖家は製造販賣を急がず長く藏して相場の上騰を待ち以て蔗糖と爭へり斯の如きは資本金餘裕の民にして始めて行ひ得べきものにして之れを蔗糖家に望み難し然れば普通に稱する資本なるものは熱帶地には缺乏なり但之れを補ふに天然の恩惠ありと雖も如何せん機械の粗笨なる肥料の不充分なる運搬の設備不完全なる等の事情の爲め如何に豐裕なる天惠も之れに依り全然資本の缺乏を補ふ事能はざるなり試に本島各地の糖廍に注文せられある固定資本を算せば恐らく僅に百萬圓を超へざらん之れを獨逸の製糖工場に投入せる壹億五千萬圓佛蘭西の貳億圓和蘭の千五百萬圓に比すれば其の離隔亦た甚だしきを知るべく隨つて斯業の利益甚だ擧らざるは後段述ぶる處の如し然れども退て考一考し經濟學者の所謂生產三要素中自然と勞力とに於て熱帶地方の有する所遙かに溫帶地方に勝れるを知らば資本の缺乏亦た深く意に介するに足らず之れを切言すれば蔗糖は其の本來に於て蔗糖に比し資本多きを要せざるなり抑も資本の用は生產を助くるに在り自然と勞働との生產力愈〻豐富なれば資本の力を借る事愈〻切ならざることは最も觀易きの理なり故に若し同額の資本を投せんか北海道に甜菜を作らんよりは寧ろ本島に甘蔗を作るの優れるに若かず其の得る處の多きや必せり蓋し熱帶地に於て利息高きは唯に資本少額なるの故に非ずして投入せる資本に對する報酬多きにも基因するに非らざるか抑も我國如何に資本に乏しと雖も斯る利益の存在する事明瞭ならんには何れの處にか之れを補ふの道なからん況んや政府奬勵の法を設け以て產業を補助するも之れを內地に於てせんよりも之れを本島に於てするは其の効果の大一層著しきものならん彼の歐洲甜菜糖產地の如き一般の經濟進步し資本豐富人智又た進めるが故に人々合同の力を以て組合又は會社を組織し信用の程度を利用する事盛なれども熱帶地に至りては未だ然らず專ら政府の保護奬勵に俟つの外あらず政府若し奬勵に努め或は土地銀行の設立を促し或は信用組合の普及を勸誘せんか則ち天然力に富める本島糖業の進步は年を期して輸入歐洲糖と競爭し得るに至らん事後段に於て論ずる「クキンスランド」の實驗に徵して明かなり。

六、機械　蔗糖製造には機械の應用盛なるに反し蔗糖製造には機械の利用開けず自然生產費を高からしむるを以て到底蔗糖に匹敵する能はずと論ずる者あり其の言一理あるに似たりと雖も是れ原因結果を顚倒せるの疑なきか何となれば蔗糖國卽ち歐洲に於て機械利用の進步せるは勞銀不廉なるに由れり之れに反し蔗糖國卽ち熱帶地にして勞銀廉なる地方に於ては機械を要する事蔗糖に於けるが如く緊切ならざるなり縱し偶々勞銀不廉なる地方ありて機械据付

の必要を感ずる場合に於ても甘蔗製糖機械は甜菜製糖機械に比し其の費用遙かに低額にして約二割の差あり又た之れを北米合衆國南部の實驗に徴するに一日五十噸の砂糖を產出する工場を設くるに其の原料甘蔗なれば參拾萬圓にて足るも甜菜なれば五拾萬圓を要すると云ふ尤も余は茲に勞銀高低換言すれば國民生計程度てふ社會問題に入りて云々するに非らず單に勞力對機械の關係上勞力供給の途を有する本島の如き機械使用の必要甚だ切ならざるを論じ以て說者の言を駁するに過ぎず況んや甘蔗栽培諸國殊に埃及布哇瓜哇の近況を觀るに機械（此等機械は蔗糖製造國の發明に係るもの多し）の使用漸く開け最早熱帶地方に全然機械の不備を云ふ能はざるに於てをや斯くの如く論ずればとて予は敢て本島現在の製糖機械を以て足れりとなし改善の不必要を唱道するものにあらず世界各國何れの地を論せず又た其の經濟策の相異あるをも問はず自國民の腦髓を痛めず他國に發明せられたる處の機械を輸入し以て自國を改良するは最も容易の事にして要は唯金力のみ畢竟機械の不備は資本の力を借りて之れを濟ふを得べく資本にして增加せば機械の善良立所にして成るべき也。

七、燃料の供給　又た說をなすものあり蔗糖國は何れも燃料に乏し、之れに要する生產費の嵩むを如何にせんと。實に其の言の如く熱帶國殊に甘蔗栽培に適する平地には森林の繁茂せ

るもの少く炭礦又た稀有なるを常とす現に布哇及び「クキンスランド」の如きは此の點に於て甚だ困難を感せり。又た聞く所に依れば「ポルトリコ」島に於ては四十年以來森林過伐の結果として薪炭の價格以前に倍せりと、元來蔗糖製造には各國何れも搾粕を焚きて薪炭に代ふるを常とす我が臺灣亦た然り然れども此の法に二の缺點あり一は甘蔗莖に含蓄せる有機的肥料分を徒らに煙散せしむるにあり但し這は一面に於て蔗莖に潛寢せる種々の害蟲を燒殺するの効あるを思へば之れを肥料に失ふも之れを驅除費に得るものと謂ふべし、二は搾粕のみにては燃料として不充分なること實に是れ蔗糖製造に然るべからざるの缺點なり然れども本島糖の如き今尙ほ粗製の域に在る間は現在廊の裝置に多少の改良を加へ燃料節減の途を講せば以て甚しく不足を訴ふる事之れなからしむるを得ん、彼の「ポルトリコ」の如き燃料代價の二倍せると同時に製造法改良の爲め從來に比し燃料の需用を半減するに至れりと云ふを以て觀るも其の行はれ得べきを知るに足らん若し夫れ他年糖業大に發達し燃料益〻多量を要するに至れるの日は之れ道路交通大に開け坦々たる平地運炭の便に鬱々たる蕃山河溪によりて無盡の薪材を下し來るの日なるべけん然らば卽ち燃料供給の事豈吾人をして蔗糖の前に俯服せしむるものならんや。

八、市場の遠近　現今世界砂糖相場は一々倫敦市場の左右する所たり是れ歐米諸國は砂糖の最大消費地たるのみならず歐洲產蔗糖は政府の種々なる人爲的の恩澤の下に其の販路を遠く印度よりして當然蔗糖の領域たるべき東洋に迄及ぼし以て世界砂糖市場の牛耳を執れるに由れり。然るに熱帶產なる蔗糖も亦た海陸數千里を越へ歐洲市場に輸入するもの尠からずと雖も其の趨勢の逐年衰退に傾きつゝあるを以て察すれば販路の點に於て蔗糖は到底蔗糖に勝つ能はずと論ずるものあり然れども予を以て之れを觀れば販路の遠きを憂ひたるはスエズ運河の未だ開通せざる時代に瓜哇糖の希望峯を回りて歐洲に運送せられたる爲めに唱道せる議論にして今日に於ては昔日の如く有力ならず縱し然らずとするも我が臺灣糖に取り素と何等の關する處なきものなり何んとなれば臺糖の販路を見よ我が內地は云ふに及ばず近々印度及東洋諸國に於て充分なる好望あればなり抑も砂糖の需用は生活程度の進步に伴ひ漸時增進するものなり試に日本の明治十九年に於ける一人五斤の需用より同三十年に及び一人十斤强に進みたるが如き割合を以て將來を推さば明治五十三年に至り一人の消費高は二十斤に進み全國の需用は實に十二億斤に上らん然るに右二十斤の消費高を英の六十四斤米の四十八斤に比すれば我が內國消費にすら砂糖の將來有望なるは明かなり況んや一步を亞細亞大陸に進んには

彼の數億の人口に對する販路の廣大なる殊に支那內部の住民にして今日未だ砂糖の味を解せざるもの憶ふに必らず多々なるべく而して彼等も亦た時勢の進運に伴ひ砂糖の嗜好者たるべき必然なれば此等に向つて甘蔗糖の顧客を求むるの日も近き將來にあるべく蔗糖國たる瓜哇馬尼剌は云ふに及ばず本島砂糖の販路として實に綽々餘裕あるものと謂ふべし又た何を苦んで遠く歐洲市場に顧客を求むるの迂を學ばんや。

九、輸出稅　獨逸の某學者は蔗糖の蔗糖に及ばざる理由として曰はく蔗糖國の何れも輸出稅を課せざるなし爭てか保護政策の下に在る歐洲蔗糖に匹敵する事を得んと實に然り蔗糖國たる熱帶地方は概ね强國の殖民地なれば自治經營の爲め或は母國の財政を補ふの必要より課稅を斷行せるは事實にして殊に著明なるは玖瑪其他西班牙國の舊殖民地たり本島に於けるも淸國時代既に砂糖に課稅せる內國稅及輸出稅あり割領後亦た之れあり而るに其の稅額たる近時（消費稅法施行前を云ふ）は之れを舊時に比するに稍〻加重せるを見る卽ち左に數字の示すが如し。

類種	舊時		近時		比較增減 △印は減
內國稅	白	一四六厘	白	三五〇厘	一五九厘
	赤	〇八八厘	赤	三〇〇厘	二〇七厘
糖業稅					

同　補水銀	〇〇九	〇〇五	—	—
小計	一五五	〇九三	—	—
輸出稅	三〇八	一八五	二一〇	一五〇
合計	四六三	二七八	五六〇	四五〇

之れに據れば輸出稅は舊時よりも輕く內國稅は舊時よりも重し結果砂糖の負擔額は白糖に二割强赤糖に六割强を加重せるものなり而して消費稅法施行の今日も尙ほ左したる輕減なきが如し糖業者の苛稅を嘆する宜なり說者の言ふ處亦た理あり然れども這は財政整理の曉又は財政方針に一刷新を加ふるか或は政府の意志糖業奬勵に嚮ふの日は當局者一擧手の下に稅法の改正又は輸出稅若くは出港稅の廢止を行ふを得べし要するに人爲的救濟の途之れを求むる甚だ容易なるものなり故に輸出稅あるを以て絕對的蔗糖の蔗糖に及ばざる理由と見做すは誤見なり說者は徒に現在を觀るの眼ありて將來を察するの明に乏しと謂ふべし。

一〇、政府の補助　歐洲蔗糖國は競ふて輸出奬勵に勉めて止まず其奬勵金の定率は年々異同ありと雖も之れを要するに獨逸は最も低くして百斤に付き四拾錢內外、佛國は最も高くして幾んど獨逸の四倍なりとす然るに獨逸糖の產額品性及輸出額の佛國に優る所以は風土耕作法

製造法の好良なるに存するや疑なしと雖も、亦た其の輸出の盛なるは畢竟斯る厚き恩典を享くるに由れり之れを以て獨逸糖の一八八九年に至る十ヶ年に輸出せる數額は八百四十萬噸の多きに上り實に諸國總產額の六割に當れり而して奬勵の爲めに支出せる金額と輸出量は凡そ左の如し。

年次	輸出量	奬勵金
自一八九五年至一八九六年	一一二、六〇〇、〇〇〇	八、七六〇、〇〇〇
自一八九六年至一八九七年	一〇九、四〇〇、〇〇〇	一二、二〇〇、〇〇〇
自一八九七年至一八九八年	一〇一、二〇〇、〇〇〇	一七、四七〇、〇〇〇

況んや其の補助たる單に輸出奬勵金を給するに止まらずして汽船特別運賃の恩惠を與ふるものあり故に此等の國の糖商は自國に於てよりは外國に於て廉價に賣捌くの奇觀を呈せり例せば獨逸糖の本國に於て一斤拾五錢なるものを數千浬外の米國に出して拾錢に賣り佛國糖の自國にても拾錢なるものは英國に輸出して拾錢以內に賣れるが如し。斯くの如く特別保護に給せる蔗糖に對し輸出稅を拂ふて自國を出る蔗糖との競爭を說くは是れ亦た赤手創痍を裹みて楯を負へる健者と鬪んとする者にして其の勝敗の數素より已に分明なり然れども這は是れ現在の狀態のみ蔗糖にして將來若し斯る特別保護の恩典を失ふ事あらん乎彼は容易に外國に出る

事能はざるべし又た一歩を進め各國砂糖の關税を廢止するの日あらば蔗糖は逆樣に蕉糖國に向つて進入するの變態を來たさん彼の蕉糖國たるもの夙に善く之れを識れり是れを以て兢々として警戒を怠らざる事彼の如く現今歐洲諸國の糖業政策は純然蔗糖の爲に同盟を形くるに似たり斯くも極力糖業の保護に努め其の奬勵に努め其の保護は今日殆んど頂點に達せんとし爲めに又た少からざる弊害を生ずるに至れり是れを以て今日蕉糖諸國の輿論は更に進んで一層保護を厚うし保護金額を現在の四五倍に增す(此の如きは社會經濟の容れざる所ならん)に非ざれば寧ろ各國間の妥協を以て同時に保護全廢若くは保護金額の減少を決行せん乎の三點にあるものゝ如し蓋し窮せるも亦た甚だし是れ明かに保護に賴りて纔かに蔗糖に贏ち得たる蕉糖の獨立しては到底蔗糖の敵に非らざる事を自白せるものにあらずや。

上來説述せる數項の理由を以て本島糖は永久輸入歐洲糖に壓倒せらるゝものにあらざるものなりとの斷定を下すに憚らず。(下略)

本島の糖業改良方法

第一種類の改良　本島各地に於て從來栽培せらるゝ所の甘蔗三種之れを(一)竹蔗(二)紅蔗(三)蚋蔗となす此の三種其の間優劣各々差あり蚋蔗は品質最も良、紅蔗は之れに次ぎ竹蔗は最も賤

劣なれども最も普通耕作せらるゝものは此の竹蔗なり是等を近來本島に移植せる外國種に比すれば何れも劣等なるは爭ふべからず卽ち種類改良とは之れを再言すれば外國種を取りて在來種に代はるの謂ひなり然れども是れ亦た一言にして掩ふべからざるものあり夫の在來種の劣等なるものも地味氣候の關係あり處に依りては却つて適應にして直ちに嫌棄すべからざると一般優等なる外國種たりとも風土の相異る直ちに取つて之れを各地に移植せんこと亦難し唯外國種の適否に關する試驗は夙に明治二十九年以降之れに從事せるも種々の故障に逢ひ其の成績未だ充分ならず其の化學的分析すら判然せずして或は在來種に劣るを示せるものあれども此の如きは決して有り得べからざるの理にして或は未熟の莖を供試せるに由らざるか這は姑く例外として之れを措き別に分析せるものに據れば其の糖分に於て在來種に優り其の成長の度も亦た遙かに在來種の上に出で殊に「ラハイナ」種は其の成績最も佳良なるを證せり該種の糖分は布哇に在りては化學的分析の示す處十九乃至二十パーセントに及び當業者の實地製造も亦た十二乃至十四パーセントを示せるものなるが本島に於て試驗せる處も成績最も劣等なるものにして尙ほ且つ九パーセントに及び當業者の實地製造も亦た十二乃至十四パーセントを示せるものあるが本島に於て試驗せる處も成績最も劣等なるものにして尙ほ且つ九パーセントを下りしことあらず十

パーセント内外を得るの望み充分なり今假に九パーセントの最低標準を取り之れを在來種竹蔗の優等六歩留に比すれば五割の増量にして紅蔗の優等九歩留と相匹敵するものなり但し這は單に同一蔗量の歩留に就て云ふのみ若し更らに其の收穫量を比較するも「ラハイナ」は遙かに本島種に優れり茲に明治三十年臺北附近に於て試作せる成績を取りて之れを證せんに竹蔗一反歩平均收穫蔗量は六千斤内外なるに「ラハイナ」は一萬八千斤以上卽ち本島種に優ること三倍にして其の優劣殆んど比較の外にあり今本島蔗園の狀態を觀るに紅蔗は竹蔗より六割以上の收穫を擧ぐるに拘はらず之れを植うるものは僅に蔗園全面積の一二分を超へざるに劣等なる竹蔗は到る處に大部を占め本島甘蔗と云へば直ちに竹蔗を指すものと謂ふも過言に非らず卽ち更らに斯種と「ラハイナ」との比較を試んに竹蔗の收穫量は地方に據り非常の差異ありて一反歩二千斤と云ふものあり或は四千斤と云ひ五千斤と稱し一定ならずと雖も此處には好良なる標準を取りて一反歩六千斤と定め之れを六歩留とすれば三百六十斤の製糖を得べきなり然るに若し之れを「ラハイナ」に代ふるとせんか假に收穫同量なりとし最低標準九パーセントを以て算するも五百四十斤の製糖を得若し十一パーセントを以て算せんか六百六十斤を得べし試みに之れを島内蔗園の現在地積三萬四千甲に乘算すれば實に二億二千四百四十萬斤の產糖を得べき割合なり因に曰

はく右蔗園の面積も統計の確實を保し難し唯他に依るべきものなきを以て姑く之れに從ふのみ凡そ同種の作物にても新移植の容易ならざるは云ふ迄もなき事にして砂糖に於けるも亦た然り然れば今外國種を以て在來種に代へんとするに就ても此の困難を免れざるは深く慮らざるべからざる所なれども唯此の事の決して成し得べからざるに非らざるは余の固く信ずる所にして之れを上述せる試驗成績に徵し本島氣候風土の疑もなく「ラハイナ」種移植に妨げなきを證するは頗る人意を强ふするに足るものあり若し果して「ラハイナ」種移植を遂行するを得んか穫る處の利益は單に糖分の多きに止まらず尙ほ他に種々の利益あり下條に之れを縷擧すべし元來甘蔗を品評するに標準と爲すべき要點十二則あり先づ之れを示し次に諸點の優劣を比較せんと欲す。

第一、收穫の多寡

第二、直生すると臥生するとの別

種類に依り莖幹直立せず横さまに傾倒するものあるは不良なり

第三、糖分の多少

第四、生產力の强弱

第五、病害に觸れ易きと否

第六、搾粕の形狀

種類により之れを壓搾すれば寸離支離して取扱に難するあり唯解綻するものにして原形を持し取扱に便するものあり

第七、汁液の多少

第八、生熟の早晩

第九、壓搾の難易

外皮の硬軟に因り挫碎に難易あり

第十、汁液清澄の難易

汁液に混せる挾雜物多ければ之れを清澄するに手數を要す

第十一、表皮の硬軟

表皮硬に過ぐれば壓搾に便ならざる嫌あれども軟に過ぐれば蟲害に侵され易し

第十二、根株の分蘗

分蘗力の强弱は二年芽の發生に關し隨つて收穫の多少に關す・

右の標準に據り竹蔗と外國種とを比較し點數を以て優劣を示せば左表の如し

竹蔗「ラハイナ」「ローズバンブー」三種の優劣比較

標目種類	標準點數	竹蔗	ラハイナ	ローズバンブー
收穫	一二	八	一二	一二
直生	八	八	六	七
糖分	一〇	七	一〇	一〇
生育强盛	八	五	八	八
病害	五	四	三	三
搾粕の品質	八	七	八	六
汁液の歩合	一〇	七	一〇	一〇
成熟の早晩	五	五	三	三
搾汁の難易	八	六	八	八
表皮の硬軟	八	八	六	四
根株の蘗分	八	四	八	八
汁液清澄の難易	一	七	一〇	九
全點	一〇〇	七六	九二	八八

又た民政部殖產課農事試驗場の明治三十年に於ける甘蔗栽培試驗は其の方法に於て大に疑を容

るべき點ありと雖も本島に於ける實地試驗の成績は他に據るべき材料なきを以て茲に掲げて前述を補ふ。

「ラハイナ」種の在來種に比し優等なる諸點を列擧して曰はく

一、收穫莖量の多大なること
一、搾汁の多量なること
一、蔗汁濃厚にして糖分に富めること
一、製糖の品位佳良なること
一、搾粕の燃料に適すること
一、害蟲及び風害の被害輕きこと
一、「ラハイナ」種は成熟の儘畑地に放置するも品質を損するの憂なきを以て數ヶ月間に亘る製糖作業に便宜なること
一、莖幹長大にして取扱上便利なるのみならず搾汁量多く且つ糖分に富めるを以て製造に勞力及燃料を節減し得ること

上來述ぶる處を以て新植の在來種に優るや復た疑ふべからざる所ならんも之れを移植し普及せ

しめんとするに當り先づ念頭に浮ぶは本島農民の經濟力能く之れに應じ得べきや否の問題なり之れを現狀に照らすも在來種中紅蔗の竹蔗に優るは多衆の熟知せる處なるにも拘はらず徒らに栽培の勞と肥料の多きとを厭ひ寧ろ劣等なる竹蔗を植へ粗放的農業を營めるを觀れば紅蔗よりも一層集約的ならざるべからざる外國種を以て之れに代ふるに於ては必らず多少の困難なき能はざるべし然らば如何にして能く此の困難を排除し新種移植を遂行すべき乎惟ふに第一緊要なるは資本供給の途を開くにあり現在にても糖業者耕作者を苦むるの弊あり故に政府の之れに處するは最も完全整備の方法を求めざるべからず次に種苗の如きも始めは政府自ら之れを養成し極めて廉價に賣下るか機宜に依りては無代交付するかの方法を選ばざるべからず更らに一歩を進めて言はゞ此の種苗養成の事業は啻に一兩年に止らず尚ほ數年の後農業資本の充實を見るに至るまでは官設苗圃を設くるの必要亦た之れあらんと思惟す唯夫れ後日の事は姑く之れを措き目下の急務は左の事項を遂行するにあり。

一、外國種の優良なることを農民に會得せしむる事其の手段としては或は廣告或は集會を利用し若くは直接個人に敎示する等尚ほ之れあらん
一、外國蔗苗を傳播すること新植を在來種に代へしむるには之れを導くに耕作の利を以てし

之れを誘ふに恩典を以てすと雖も、若し頑民固執到底勸誘に應せざるものは已むを得ず强制的耕作の處置に出んと欲す

一、苗代人民の新植に慣れざる間種苗の養成は之れを官業と爲し外國種の傳播に伴ひ之れに應ずる種苗の賣下げ又は無代交付を爲さゞるべからず

第二、培養法の改良　現今本島に行はるゝ培養法の粗雜なるは蓋し何人も齊しく認識する處なるべし夫の劣等なる在來種も其の栽培法に改良を加へなば以て收穫を增すは無論品性を進むる事も亦た能ふべしと雖も但だ之れを成すには甚だ長年月を要し寧ろ適良なる新種を取りて改良を計るの成効速かに且つ利益多きに若かず何となれば今在來種に向つて其の栽培法を改良するにも肥料と勞力とは必らず增加せざるを得ず均しく肥料と勞力とを增加するものならば之れを在來種に於てせんよりは寧ろ新種に於てするの却つて行はれ易きを信ず其の理譬へば從來百貫の肥料を施し以て足れりとせる者に向ひ新に二百貫を用ひよと云ふも人情として自家多年の經驗に惑はされ容易に首肯するものに非ず然るに若し新種を植へしめんか之れを栽培するの始めに於いて先づ自から覺悟すべし之れを栽るは在來種に於けると其の方法を異にせざるべからず故に肥料の多き勞力多きも敢て之れを辭せず順に力行し以て其の美果を收むるに至るべし之

れ培養改良は種類改良と相隨伴するを得策なりと云ふ所以なり加之新種輸入は種子交換と同一の効力あるものなり故に之れを諸國の實例に徵するも粗放的農業より集約的農業に進ましむるの途は優等新種を入れ改良を圖るを以て最乘の策と爲すが如し但だ集約的方法の善良なるも資本と勞力とを增さば以て如何なる作物にも適用し得べしと爲すは誤りなり元來利益ある作物ならざれば集約的農業は施されず作物の品質と集約法とは相互に因となり果となるものにして作物好良なれば耕作集約となり耕作集約なれば善良なる作物を播種するは是れ自然の理勢なり是れを以て本島甘蔗を改良せんと欲せば宜しく耕作法を集約的ならしむべく耕作法を集約的ならしめんと欲せば宜しく甘蔗の佳種を播植せざる可らざるなり前段「ラハイナ」種の收穫高を擧げたれども之れは培養宜しきを得るにあらずんば之れを實在に得るの望み少し布哇に於て實驗せし所にては培養法改良の効果として四ヶ年間に五割の產額を增加したりと云ふ其は該島に於て甘蔗耕作に投ずる肥料年々三萬噸以上其の費貳百五拾萬圓に上るを見るも如何に培養に力むるかを知るに足らん案ずるに各國甘蔗一町歩平均收穫量は布哇七十五噸瓜哇八十五噸に比し本島三十五噸に過ぎざるは誰か其の幼稚に驚かざるものあらん今本島に於て培養法改良により增收し得べき見込を新種在來種共に等しく二割と假定し「ラハイナ」種と竹蔗との比較を試んに六歩留

なる竹蔗は從來一反歩の收穫量六千斤を七千二百斤に增し糖量三百六十斤なりしを四百三十二斤に增し七十二斤を增收するに對し九歩留なる「ラハイナ」は收穫相均しとして糖量五百四十斤なりしを六百四十八斤に進め百八斤の增收なり卽ち兩者增收の差は三十六斤なり同一の勞力と肥料とを以てして其の差益の懸隔せる此の如し尙ほ「ラハイナ」種と在來種とを比するに「ラハイナ」は分蘖數多きのみならず生長强盛莖幹長大なるを以て種苗を要する事も少く從て播植の減ずるを得其の利益更らに大なり然れども余は決して全然布哇の耕作法を採用し之れを本島に施さんとするが如き迂論を主張するものにあらず之れを爲さんと欲せば三尺乃至五尺の深さに達する馬犁を首め之れに準する諸般の農具をも備へざるべからず而して斯くの如き農業を今日の臺灣に採用せんとするは之れを机上に論ずべくして之れを野外に行ふべからざればなり。

一、新種苗を分配すると共に農家に敎ふるに改良耕作法を以てすること

二、政府の手に化學的肥料を購入し當初四五年間は或る條件の下に無代價にて新種耕作者に付與すること

三、各地適當の箇所に模範小蔗園を設け各種肥料の有効程度を人民に示すこと

第三、灌漑　を利用し產額を增す事項已に培養中に論せり培養なる語は之れを廣義に用れば灌漑をも含めり而も前項は重もに肥料に關して論じ玆には少しく灌漑の要を說かんと欲するのみ今弘く各國の實況に鑑み彼の長所をとりて之れを本島に實施せんとするに當り頗る有効にして產額を增加すべきもの之れを灌漑とす輓近著しく糖業進歩の功績を擧げしは云ふまでもなく布哇なるが之れを統計的に觀察するに其の進歩の長足なる唯一驚の外あらず而して其の產額を增進せる原因は數多なれども就中最優の効績ありしは灌漑なること疑を容れず余は布哇の灌漑に依り產額を四五倍學術的試驗の成績に據れば十五倍せるを觀直ちに同一筆法を以て之を臺灣に行ひ同一成績を擧げんと云ふに非ず彼と我とは土地氣候殊に兩期の相異るあり隨て灌漑の利益彼に於けるの遙に我に於けるに優るものあるを知る然らば我にありては更に灌漑を要せざるかと云ふに這は未決の問題なるが元來甘蔗其の者の性質水を好めるは明瞭にして獨り布哇のみならず澳州に於ては水利の有無に依り收穫の上に三倍の差を生じ我が四國地方に於ては田に植ゆると畑に作ると少くも一割乃至二割の差異あり八重山に於て灌漑の爲めに四倍以上を增せるを見るも皆然からざるなし本島にては甚だ遺憾ながら今日まで未だ甘蔗園に灌漑を試みたるものあらず唯旱天に方り少量の桶水を根際に灌ぐことあるのみなりと雖も偶然の事實は稍之れを證

するに足るものあり見よ水田に傍へる甘蔗にして水分の供給宜しきを得るものは著しく甘蔗の生成せることを近く新庄街附近の甘蔗園に於て乾地にあるもの五尺に過ぎざるに水田に傍へるもの七尺の高きに生長せるを見るが如き是れの好一例ならずや然るに間々論ずるものあり本島各地粘土質土壤に富み潴水に好く排水に惡し何ぞ灌漑を要せんやと蓋し謬れるも亦た甚だし抑も茲に謂ふ所の灌漑とは全く潴水と異り換言すれば排水に反するの謂ひに非ず既に灌漑と云ふ排水必ず之れに伴ふは論を須たざる所にして水を溜むるの意味にあらず況んや過度の濕氣は甘蔗莖の生長を害し糖分を減ずることは普く人の知る所にして排水の必要は論を須たず唯惑者の爲めに一言を費す已に第一項に述べしが如く果して新種を入れ之れを普及せしめんとするには灌漑の一事殊に其の要あるや明なり何んとなれば此の種類は其の本國に於て水の供給を享け生長せるものなればなり今假に布哇其他諸國の實例を參酌し本島に於ける灌漑の利益を極めて低度に見積るも必ず一割を下らざるならん斯業に精通せる某は灌漑により收穫を倍するの希望ありと云ひ余も又た三割を下らずと信ず縱し假に一割として算するも全島に及ぼす所の利益は決して尠少ならざるなり要するに糖業の振興を期せば漸次水利の普及を圖らざるべからず各地の水圳にして年を期し成功せんか一般農業の發達と共に糖業の蒙るべき利益は三割四割に止らず

殆んど測り得べからざるものあらん尙ほ甘蔗灌漑適否に關する試驗は日を期して速に著手せられ其の成績を明にして之れを世人に周知せしめんことを望むものなり唯茲に懸念せらるゝものは縱令世人皆灌漑の利を會得するに至るも本來是れ容易の事業に非ず之れを實行するの困難は決して種子又たは肥料改良に於けるの比に非ざるなり熟々諸國農業の歷史を案ずるに農藝工事の大作業たる灌漑なるものは斷へず當時に行はるゝものにあらず大凡そ三樣の時代に於いて成功せるを見るなり第一、專制政治の盛に行はれたる昔時小亞細亞埃及西班牙或は印度及支那に於ける大運河の如き工事を好む主權者あり一令の下に數萬の人夫を驅り譬へば螻蟻の坎穴を鑿つが如くに働作し渠等の生命を擲つて以て後代子孫富業の基礎を築けるものに非ずや第二、一國經濟の發達に伴ひ資本充溢し之れを事業に投ずるも利益遽に收め難き時代には其の政府の專制的にあれ自由的にあれ政體の力を藉る事少く純然たる經濟事業として大工事の起さるゝものなり和蘭國の中古に於て著大なる工事の成功せるものは當時國內資本の餘りありたるに識由す猶ほ現今亞米利加に於て運河開鑿の擧あると一致なり第三民業大いに發達し全く金力に賴らんよりは寧ろ個人共同の力を賴む事盛なる時代に至れば各國概ね水利組合の如きものあり以て國の各地に各々灌漑排水を作せり卽ち是れ國民自助の精神を發揮せるものなり但だ自助の精神あ

るも孤行安ぞ能く共通の事業を成さんや共同の自助力あり始めて能く共通の事業を遂ぐるを得べし此の精神の彌〻益〻發揮せられて一鄉より數鄉、數鄉より一州、以て終に一國に渉りて洽ねきに至れば已に是れ個人の事業に非らずして國家の事業たり復た官と民との區別なしと謂ふべし前世紀の中頃に方り常に自助を以て誇れる英政府の官業(資本は之れを民間に募れり)として愛爾蘭に大規模の農藝工事を起せるが如き是れ專制政府の所爲にも非らず又た私利を目的とせる資本家の起業にもあらず全く共同力の然らしめたるものなり今退て我が臺灣の情態を顧み以上述べたる三個の時代の何れに遭遇せるかを考ふるに恐らく何れにも切似せざるならん而かも此の三者の幾分を併有せるやに思はる、何ぞや曩に已に水利組合法の發布あり之れに依り民間組合の設置を勸誘する事を得べく又た資本融通は政府の力を以て其の途を開き之れを補助する事を得べし將た地方共同の力を以ては到底行はれ難き大工事の如きは政府專制的に大水圳の開鑿を行ふことも亦た能ふべし然れども此の大工事に至りては精密なる土地測量を遂げたる後ならでは設計をも施し難きが故に姑く土地調査結了の後に讓り茲には當面の急務二三を擧ぐるに止めん。

一、灌漑試驗を行ふ事

本島に於て蔗園灌漑の利如何に有効なるかは未だ實驗の之れを確證するものにあらざるが故に其の有効程度を確めんが爲め試驗を施行せんと欲す

一、小規模なる溝渠を鑿つ者には其の設計に從ひ補助金を下附する事

一、水利組合の組織を奬勵し成るべく民業に委し大規模灌漑工事を起さしむる事

第四、既成田園を蔗園に替ゆる事　前述の如く蔗園の灌漑果して必要ならんか現在水田なるもの灌漑不便なるを以て辛じて米作を營めるものゝ如き之れを蔗園に變じて利益あらしむるを得ん、勿論强ちに米作を變じて蔗作に代へしめんと云ふが如き極端を主張するに非ず唯糖業奬勵の方針に從りては蔗園の面積を擴張すべき餘地尙ほ之れありと云ふに止まる現在水田の面積素より狹少ならず且つ米は本島農產の大宗にして之れを棄つるは固より不可なり然れども水利又は勞働充分ならざる地方にして强て米作を營むもの少からざるが故に米の產出は其の地積廣大なる割合に少額なり如何に氣候に適するも水利其の宜しきを得ざるが爲め南部米產地の如き單に氣候の點より觀察すれば一年二回作なるは原則の如く思はるれども其の實際に於ては人工的灌漑なき所に於ては一回以上の收穫を得る事少し殊に目下は收穫上米作の蔗作に優れると云ふも將來改良を施し蔗園の收益を增すの曉に達せば夫の不足勝なる水利の米田は寧ろ之れを蔗園

に變ずるの安全なるを覺ふ殊に政府糖業に重きを措き大に斯業を振興せんと欲せば直接間接に之れを保護し以て適々獨逸に於て馬鈴薯作の純益一反歩拾八圓穀類作七圓五拾錢なるに獨り甜菜作のみ貳拾餘圓の利を收むる狀態になせしかば農家爭ふて穀園を變じ甜菜園となせるが如きも同一の結果を呈するに至らんも亦知るべからざる也。

今上述せるが如き水利不便の爲め田圃に兩用せる地積を算せば全島を通じ約一萬甲内外に達すべしと云ふ若し之れを蔗園に變せば少くとも一甲三千斤の烏糖を產出するものとして總計三千萬斤の增收を得べし唯一言を費さんと欲するは前項に於て蔗園灌漑水利普及の必要を論じ乍ら茲に水田を變じて蔗園と爲さんと云ふもの前後矛盾せるに似たるも決して然らず水利不完全なる米田を蔗園となすも其の地は現在の儘にして別に水圳を鑿つの要少し何となれば甘蔗の水を要するは水稻の如くに大ならざるが故に縱令旱天に會ふも其の害は稻の被むるが如くに甚だしからざれば也。

蔗園の地積を擴張すべき餘地は唯既成水田の最も劣等なるもの乾田に變ずるの見込あるのみならず耕作法を集約ならしめば輪作法を巧みにし從來三年に一回の蔗作を爲さゝるものを二年一回ならしむを得べく又た施肥完全なるに至れば地力の消耗を防ぎ以て同一地に蔗作の回數を多

からしむる事をも得べし蓋し其の耕作回數を增すは是れ取りも直さず蔗園の地積を擴大するの理なるべし然るに天水田卽ち田園兩用地に收利少なきをも顧みず米を耕作するは是れ因襲の久しきの然らしむる處にして經濟上の收支より打算せられたるものにあらず今之れを蔗園に變せんとするは是れ多年の習慣を打破するものにして素と至難に屬すと云ふ者あり然り習慣に固執する本島人なれば之れを改めしむる事外國又は我が内地に於けるが如くに容易ならざるべしと雖も元來此の習慣にして宗教的の基礎を爲さゝるからには收利の多きを說きて之れを誘ふは容易に爲し得べき事柄なり臆測するに此の習慣たる米穀の食物として尊むべき事を生れながらより腦裡に印し一髓に米作を以て農家の天職とせるに本づくものか或は鎖國的の餘習として食料品を自國に產すべしと云ふが如き偏見に胚胎せるものなるべし蓋し此の習慣の迷信より彼等を提撕するは利益を以て之れを誘ふに若くものあらず然れども一概に天水田を蔗園に變ずるの極端を唱ふるにあらざる事は前章に辨せし處の如く若し之れをして良田たらしむるの途あるものは完全なる水田となし又た到底其の見込なきものは集約的甘蔗栽培の却つて利益多かるべきを覺ゆ而して之れに於ける改良策と爲すべきもの左の如し。

一、集約的蔗作を爲さしめ其の利益あるを曉らしむる事

二、習慣を打破する爲めには種子又は肥料の附與等特種の恩典を以て誘導する事

三、改良種は其の性水を好めるものなれば多少小利を有する天水田に植付けしめ甘蔗に灌漑の利あるを知らしむる事

第五、蔗園に適する土地の新墾を奬勵する事　前項には既成天水田にして蔗園に變せしむるの餘地ある事を論せしが茲には更らに一歩を進め不毛の地を拓きて新たに蔗園を造出するの利を說んと欲す何れの邦國に在りても開墾の難事たるは同一觀にして容易に斯の事業に指を染むるものあらず殊に保守的臺灣人にして而かも割領の過渡に方り百事紛々たるの裏此の至難なる開墾に從事する者なきは固より其の所たり然れども近年諸般の社會制度頗る整理するに伴ひ開墾に意を注ぐ者漸次各地に現はるゝに至れり元來不毛の地を拓くは目前の利を占むべからざるの事業なるが故に資本豐富にして商工業に投下するも利益少き場合卽ち經濟進歩の時代なる乎然らざれば土地の豪族たるもの黃白の利を意とせずして自家の威力を張らんが爲めにするか將た細民多きに過ぎ勞銀廉にして衣食に窮し土地に縋らざれば生計を保ち能はざるもの夥多なる場合に於て多くは開墾業の發達を見るものなり然るに本島現在にては更らに斯くの如き狀況を發見せず而かも不毛未墾の地は多くは各地に散在せり政府若し之れに向て奬勵の法を講じ或は資

本融通の途を計り或は開墾の制限を寬にし或は匪害蕃害の保護を與へ或は道路運搬の便を開き將た糖業開發の爲めには新墾地蔗作者に特典を與へ種苗の交付、肥料の賃貸又た或る期限に若干甲の蔗園を開墾するものは特別の利益を付與する等各種の方面より之れが奬勵に務めなば上豪族より下挑夫に至るまで力を奮つて開墾に從ひ以て土着の生活を營むに至らん殊に此の點に就き見聞せる處に據れば現在不毛の地は水害の虞あるが爲め手を下す能はざるもの多し水害にして之れなからん乎其の地を拓きて有利の望あるもの少からず蓋し此の水害を防ぐは一朝一夕の事業に非ずと雖も處に據り之れに溝渠を通せば甚だ多くを勞せずして浸水を防止し得べきの地亦た之れなきにあらずと云ふ然れば此等に對する政府の施設周到なるに至らば新墾地の蔗園に入るべき面積は少くとも六萬町の多きに及び之れより一町歩五千斤の砂糖を產出せば總計三億斤の產額增加を觀るに至るべし「クインスランド」の如き約十年前より製糖會社起業者に向ひ會社財產を抵當として全部の費用を五分の低利にて十五年々賦還約の方法を以て貸付せり則ち糖業者は之れに依りて一時資本の缺乏を濟はれ以て百年の基礎を建つる事を得、現に「クインスランド」政府の千八百九十三年より九十七年に至る間に糖業者へ貸付せる金額は七百貳拾萬圓に上れり而して此の恩澤を蒙り設立せる中央製糖場なるものは三十一箇なり夫れ斯くの如く

保護奬勵に務めたる結果は工場の勃興となり製造の進歩となり以て糖業をして倍々利益あるの事業たらしめ其の餘澤の及ぶ處農家競ふて甘蔗を耕し到る處蔗園の新墾を促すに至れり本島に於て不毛地開墾を奬勵せんには蓋し「クインスランド」に行はれたると同一手段を執るに若かざるならん縱令全く其の法を踏襲し能はざるも左の諸項は是れ施設の眼目なるべし。

一、開墾に適する土地を選定し之れを人民に周知せしむる事。

二、律令を以て奬勵法を發布し開墾成功者には無代價にて其の地の業主權を附與する事。

三、奬勵法により蔗苗及肥料の下付を爲すこと。

四、其他若干甲以上を開墾するものへは其の地の狀形に從ひ灌漑排水の工事費を補助し又た墾成後其の地に建設する製糖工場に對し特別保護を與ふる事。

第六、製糖法の改善　上來述べし所は專ら農業に關する事項にして一も製糖法に及ばす是れ一には余の製造法に疎きに由るも亦た一には如何に製造法を改良するも結局原料供給以外に發達し能はざる事無論なるが故に重きを農業的觀察に措けるに因れり察するに從來の製造法にては莖に含蓄せる糖分の全量を搾取する能はず其の幾分を搾粕に遺留し空しく委棄する事多く而かも其の割合には勞力を要する事多き事卽ち一言にして掩へば生產費徒らに嵩みて利益を減殺す

るの結果となる此の製造法改良を要するの點を經濟的用語にて云へば一には積極的に卽ち搾粕に遺留する分量を少からしめ從來六步留のものを九步留に進め以て產額を增加する事或は從來五割の汁を搾取せるものを八割に增すこと一は消極的に從來十五頭の水牛と二十人の力を以て一日千斤の砂糖を製出せる勞力或は燃料の幾部分を節約するか或は白糖を製するに現今四十箇日を要するものを短日數に減縮するか此の積極消極兩面の改良を行ふの餘地充分なり其の一二を擧ぐれば竈及機械の構造及人の排置の如き是れなり此の製造法改良の論旨は之れを窮むれば竟に大工場設置の必要に歸す何となれば小仕掛製造にては如何なる新式法を用ふるも如何に生產費を節減するも砂糖の品位を進め且つ其の製品を一定ならしむるに至りては到底困難を免れざればなり如何に產糖額を增進するも其の品質を改良せざる限りは糖業進步の目的に於いて幾に其の一半を達するに過ぎず現に內地に於て糖製の原料を近く本島に取らずして遠く瓜哇呂宋に求めつゝあるを觀るも本島糖の製造に粗にして殊に品質不一定の點に於て精製原料たるの資格なきを示せるものにあらずや共同製糖事業の尙ほ農間の副業と見做されたる時代に在りては品位の不一定なる敢て憂ふるに足らざりしが已に純然たる工業となり砂糖を商品となせる今日に至りては品質統一の事頗る緊要なる一條件なり故に各國に於て愈〻益〻機械を大にし數年前

迄は一日二百噸を製造するものを大仕掛と稱せしも現今に至りては千噸以上のものを用ふるに至りたるは主として此の緊要條件の存するに由れり尙ほ本題に關聯し茲に一言を述べんと欲するは製糖業の組織なり元來糖業なるものは之を大組織となすの果して利益なるや否やは時と處とに依り一概に論ずべからざる事言を俟たずと雖も若し今の本島に處する如何と云ふ具體的質問を試むる者ありとせば予は之れに對するに地方に依り組織を異にし得べしと云ふが如き漠然たる意味を以てするの外あらず然れば此の問題は姑く他日に讓り眼前の希望は現在の規模と其の組織に一歩を進むるに在り現在の組織亦種々あれども普通に行はるゝもの(一)甘蔗耕作者卽ち原料主と糖廍主卽ち砂糖製造者との製糖歩分け法(二)耕作者の原動力(水牛勞力)を用ひて糖廍に設備せる機械を借り製造し其の使用料若干を廍主へ拂ふの方法なるが二者の何れに於るも利益は常に廍主の壟斷する所たり余は之れを改良し此の糖廍を以て或團體卽ち糖業組合の如きものゝ共有組織たらしめんと欲す夫の獨逸の狀態を見るに資本家にして製糖會社を組織せんとするものは農家をして會社株劵の幾分を所有せしめん事に力め各時社競ふて勸誘に怠らず之れを聞く糖業會社資本總額の四分の一は農家の出資せるものなりと卽ち此の狀態は會社と農民との關係を密接せしめ以て糖業の利益と農業の利益と相反抗するの弊なからしむるのみならず農

民は一面耕作に利し一面製造に利するが故に生計亦自から富强なるを致すものなり又適々之れを同一理に依り布哇の製糖會社は其の所要原料三分一を充たすべき收穫を有する日本人支那人の蔗作者を勸誘し其の甘蔗を會社に供給せしめ更らに此の農夫を其の工場に雇ひ製造に使役する方法は卽ち曾て屢〻諸國に於て頻出せる原料代價の掛引を防ぐに足るものなり憶ふに此の好摸範は之れを本島に採用するの價値あるものなり事の大小相同じからずと雖も理に於て則ち一なり豈實行に難しとせんや若し夫れ此の方法にして行はれんか此の團體を利用し機械其他の改良容易に行はるゝの便あり統計に據れば現在糖廍の規模たる大廍七分廍五分廍等の區別あれども其の平均區域は十四甲の地積に對し一個の設置ある割合に當り其の區域甚だ狹く其の規模甚だ狹く其の規摸甚だ小なりと云ふべし而して此等糖廍に製造せらるゝ砂糖の品質は各個各異るが故に之れを賣却するも甚だ不利なり無論此の點より云はゞ大組織の工場を設くるに若くなしと雖も前述の如く何れの地にも行はるべきに非らざるなり本島糖廍の小規模なる既に前項に述べたるが如く其の理由主として甘蔗運搬の不便なるに存す甘蔗は重量容積大なる作物なれば其の運搬に要する力も大ならざる可からず加ふに之を收穫するや直ちに其の莖中に化學的作物を惹起し爲めに結晶糖を葡萄糖に變ずるの虞あるを以て成るべく速かに製造を終るを要す然るに

本島に於ては速力快駿なる運搬法全然缺乏し唯牛車の一を頼むあるのみ諺に曰く牛歩十里に暮るゝと何ぞ能く遠路の運搬に勝へん是は小糖廍を各所に設くるの止むを得ざる所以なり故に先づ現在糖廍の組織を擴張し少くとも一廍百甲の割に進ましめ之れに試驗の結果適良と認むる機械を各廍一定に据附けしめば庶幾くは稍〻同一品質の製糖を得以て本島糖業の一進境を開くに至らん。

要するに製造改善の爲めに着手すべき手段左の如し。

一、政府自から外國製小形機械を購入し之れを糖廍主に無料にて貸付け又は低利の年賦還納法により賣渡すること。

二、大仕掛機械を据附け製糖工場を新設する者へは其の程度に應じ適宜の方法に依り相當奬勵金を下附する事。

三、耕作者を勸誘し團體を作り且つ團體共有の糖廍を設立せしめ以て耕作者製造者の利益一致を計ること。

此の他小仕掛なる糖廍を漸々大仕掛に進ましめんが爲めには製糖額の大なるものに賞與を授くるの方法を設くるも亦妙なるべし這は已に前例あり卽ち「ヴイクトリア 殖民地の糖業奬勵法は

會社と一個人とを問はず砂糖二十噸を製造するものには千圓其の以上は一噸毎に五拾圓の賞金を下賜せる事是れなり。

第七、壓搾法の改良　從來學者の唱ふる處を聞くに砂糖甘蔗としての分析定量は纖維分十二朱糖汁八十八朱にして此に含蓄する糖分十六朱卽ち蔗莖に對する分量十四朱を以て標準とす而るに壓搾機械發見の理想とする處は原料に含まるゝ糖汁の全量を遺憾なく搾取するに在れども今日迄に按出せられたるものは如何に完全なるものも到底此の理想を實在に現はし得るものなく若し十一朱二厘に上ぼすを得ば之れを以て滿足すべしとなせり若し夫れ糖分に至りては必らず標準量の二分乃至三分を殘し甚だしきは五分以上を搾粕に留め搾粕は之れを薪とし他の五分卽ち有用糖汁の燃料に供せらるゝを觀る諸國の實驗に徵するに機械構造の如何に依り製造中に空失する糖分は「クインスランド」に於ては十朱布哇に於ては五朱瓜哇に於ては二朱なりと云ふ、以つて製造法改善の必要を窺ふに足らん之れを聞くジャメイカに於て劣等機械を用ふるれば中品砂糖一噸を製出するに十七噸乃至二十七噸の甘蔗を要すれども改良機械を用ふる時は僅かに八噸にて足ると又た聞く同島の某工場に於て六千圓に價する最良壓搾機を使用せる爲め毎年價格壹萬圓の增產を得るのみならず生產費を半減とするの好都合を奏せりと今之れを證せんが爲

め左に機械の動力を比較せるものを掲ぐ。

	搾取する糖汁の量五十朱乃至六十朱
小壓搾機(戸毎に裝置せるもの)	
單式壓搾機　同	七十二朱
二重壓搾機　同	八十朱

右は八十朱(パーセント)を以て最上となせども若し今日最進式の大機械を用んには莖中に存する全汁液の八割乃至八割四分を搾取し汁液中に存する全糖分の九割乃至九割五分を收得すと聞けり而かも此の如きは大工場の組織に依るに非ざれば遽に其の効果を望むべからざることなりとす。

現に本島に行はるゝ壓搾法にては其の搾取する糖汁の量四十二、三朱强以上六十朱以下にして普通五十朱卽ち蔗莖の半量に過ぎず成績佳良なるものにして尙且つ六割を超ゆるもの稀なり然るに小規模なる洋式器械を以てせる試驗成績を見るに「ラハイナ」種を供試せるものは原動力に異同なくして六十八朱を得べく少くとも六十朱を得ること確實なり又竹蔗を供試せるものも在來法に比し一割多くを搾取し得たり今竹蔗一反歩の收穫六千斤と假定し之を在來法により壓搾すれば糖汁三千斤なるに洋式小器械を用ゆるときは三千六百斤を得べし卽ち其の差六百斤にして二割の增加に該當す是れ云ふ迄もなく器械の効力より生するものなり若し此の器械を全島に

通じて採用せらるゝものとせん乎本島產糖を七千萬斤と見做し立どころに千四百萬斤の增加を見るべし。

此の器械は小規模なるものにして稍〻餘裕ある農家は之を購ふこと容易なるべく或は現在糖廊の如く共同組織と爲すも可なり而して其の効用は尙能く三噸乃至二十噸の莖を壓搾し得べし加之此の器械は大小數種あり其の最も輕便なるものは各所に轉置すること自在にして甘蔗を運搬するよりは却つて勞力を減ずるなるべし臺北縣農事試驗場に於て此の種の壓搾器一臺を備へ試驗せし所は好成績なり此の他意匠の異なれるもの數種あり其の何れか果して本島糖廊の裝置に適するやは實驗の上ならでは確言し難きも多くの中必ず本島の今日の經濟程度に適せるものあらんと信ず卽ち上述の糖汁六十朱を得と云へるは此小器械を指せるものにして若し大仕掛の工場を建設し大壓搾器を用ゐんには更に進んで八割以上を得ること容易ならんかなれ共茲に小器械に於てすら其の効益尙ほ斯くの如しと云ふに止む而して壓搾法改良の手段に至りては前項製造法改善策と同軌に出るを以つて茲に略す。

上來列擧せる種々の方法を選擇し之に依りて將來に擧げ得べき利益を(甲)極めて低度(乙)十分に打算するに左の如し。

砂糖生産高增加見込額

項目／數量	現在觀百に對する增加の割合	增加見込額 最低	增加見込額 最高	改良後全島の産額 最低	改良後全島の産額 最高
種類	三〇—四〇朱	三、〇〇〇、〇〇〇斤	四五、〇〇〇、〇〇〇斤	九二、〇〇〇、〇〇〇斤	一三五、〇〇〇、〇〇〇斤
培養	一〇—一〇〇	七、〇〇〇、〇〇〇	七〇、〇〇〇、〇〇〇	七、〇〇〇、〇〇〇	一四〇、〇〇〇、〇〇〇
灌漑	一〇—一五	七、〇〇〇、〇〇〇	三五、〇〇〇、〇〇〇	七七、〇〇〇、〇〇〇	一〇五、〇〇〇、〇〇〇
搾汁	二〇—四〇	一四、〇〇〇、〇〇〇	二八、〇〇〇、〇〇〇	八四、〇〇〇、〇〇〇	九八、〇〇〇、〇〇〇
製法	一〇—三〇	七、〇〇〇、〇〇〇	二一、〇〇〇、〇〇〇	七七、〇〇〇、〇〇〇	九一、〇〇〇、〇〇〇
米作田	一〇、〇〇〇	九、〇〇〇、〇〇〇	一八、〇〇〇、〇〇〇	七九、〇〇〇、〇〇〇	八八、〇〇〇、〇〇〇
新開地	三〇、〇〇〇	二七、〇〇〇、〇〇〇	五四、〇〇〇、〇〇〇	九七、〇〇〇、〇〇〇	二一四、〇〇〇、〇〇〇
計		九二、〇〇〇、〇〇〇	二六九、〇〇〇、〇〇〇	一六二、〇〇〇、〇〇〇	三五九、〇〇〇、〇〇〇

但し現産額は七〇、〇〇〇、〇〇〇斤とす。

依之觀之改良後全島に於ける産額は最低一億六千二百萬斤最高三億五千九百萬斤にして現産額の約三乃至五倍に相當す。

上述本島糖現産額を七千萬斤と見做せしが本表の計算にも亦之を以て標準産額となせり余は此の標準産額の選擇につき甚だ苦心し今尚ほ其の研究を怠らず斯業に精通せし人の說を叩くに皆

之を超過すと云ひ甚だしきは其の二倍を以て實際の産額と見積れるもあり將た統計の示す所は年に依り遙に之に及ばざるあり到底確たる證憑を得る能はざるも從來調査に成れるものを彼此對照し極めて內輪に見積りたる結果茲に七千萬斤と假定せる所なり余自らも七千萬斤以上ならんとは堅く信ずる所にして少くも八千萬斤多くは一億斤或は恐らく一億二千萬斤に上らんかと思惟す唯後日失望を招かんことを恐れ標準を極めて低度に取れるのみ故に低く起算點を取れる本表の增加見込額は之を看るもの丶甚だ滿足せざる所ならんと雖も改良實行の曉其の成果は必ず一驚を喫する價値あらん其の少きに在らんよりは寧ろ多きに驚かんことを慾し茲に其の起算點を極めて低度に置ける所以なり。

今後産糖增加の見込額は右表に於て算出せる所の如し然れども之れに關して起るべき問題は其の成功果して幾年を費すべきかにあり然るに事業の進行は政府の處理如何と之に應ずる民力の如何に依り長短遲速を生ずべきは論を俟たず思ふに本島民の惰力は之を撻つも決して長足の進歩を爲さしむること難し此の間の處措專ら政府の手腕に俟つあるのみ而して歸する所は費用支出額の如何に存す政府の支出は收入の見込によりて其の根據に立てざるべからざること勿論なれば從て參拾萬圓乃至五拾萬圓(大機械製糖會社補助灌漑排水工事費を除く)を斯の事業に支出

するものとせば如何なる速度を以て進み幾年間に成功すべきや又た之れに伴ふ收入は若干を得べきか請ふ次表に於て之を算せん。

砂糖消費稅徵收見込額

年度	見込産額 最小	見込産額 最大	見込産額 平均	課稅斤量	稅額
三十六年度	七五、五五〇、〇〇〇	八一、一八〇、〇〇〇	七六、三五五、〇〇〇	五六、一八九、三八〇	七四三、八四一、七四八
三十七年度	九二、〇五〇、〇〇〇	一四三、五〇〇、〇〇〇	一一七、七五〇、〇〇〇	八一、八〇五、七八〇	一、〇八〇、四八六、三四八
三十八年度	一一三、六五〇、〇〇〇	三二一、〇〇〇、〇〇〇	一六七、三五〇、〇〇〇	一二四、〇一三、二八〇	一、四五九、八九九、三四八
三十九年度	二七七、七五〇、〇〇〇	二七五、八〇〇、〇〇〇	二〇一、七五〇、〇〇〇	二五六、四〇五、七八〇	一、七三七、五六六、三四八
四十年度	二三二、六五〇、〇〇〇	二九〇、四〇〇、〇〇〇	二二二、〇〇〇、〇〇〇	二四三、〇六八、二八〇	一、八二〇、一四一、三四八
四十一年度	二四〇、四五〇、〇〇〇	三〇六、八〇〇、〇〇〇	二三三、六〇〇、〇〇〇	二五〇、六〇八、二八〇	一、九二三、六三七、三四八
四十二年度	二四七、二五〇、〇〇〇	三二二、二〇〇、〇〇〇	二五八、一四八、二八〇	二五八、一四八、二八〇	二、〇〇七、二三二、三四八
四十三年度	二五四、〇五〇、〇〇〇	三三九、六〇〇、〇〇〇	二九五、八二五、〇〇〇	二六五、六八八、二八〇	二、一〇〇、六二九、三四八
四十四年度	二六二、〇〇〇、〇〇〇	三五九、五〇〇、〇〇〇	三〇〇、五〇〇、〇〇〇	二七四、五七七、〇五〇	二、二一〇、八四九、八四八

備考　此の調査は本島產の砂糖を四種に分ち第一種は產額の六割、第二種は四割と假定し各種に就き三十一年度以降の經驗に依り輸出輸入平均額を見込みて算出せるものなり。

以上糖業改良の方法に付き略々要領を悉せり而も此の他執るべきの方法尙ほ鮮なしとせず試みに其の數項を枚擧し簡單に說明を加へん。

一、關稅　輸入外國糖の關稅率を高むるは是れ間接に內國糖を保護する所以なるは說明を要せざる所なるべし。

二、戾稅　聞く所に據れば消費稅施行後鹿兒島沖繩の二縣の糖業に對する政策は管外輸出糖に對し百斤五拾錢の保護金を下附し以て糖業者負擔の輕きを謀ると是れ戾稅の効用と其の歸を一にするものにして此の如き方法或は直接戾稅を行ひ以て糖業を保護することを得べし。

三、運搬の開通　糖業の原料、燃料、肥料、器械の如き皆運搬に費す所多く爲に生產及貿易の利益を減殺するを免れず道路未開の本島に在りては殊に然りとなす故に道路鐵道を開きて運搬を通じ又汽車汽船會社をして砂糖及糖業用貨物の賃錢を割引せしむる如きは糖業を利する大なるべし。

四、販路の擴張　藩政の當時薩藩の糖業を保護せることを聞くに藩自ら倉庫を大阪に置き當業者をして砂糖を之に運搬せしめ其の預券を交附し宛も一手販賣の方法を以て販路の幹旋

に力めたりと云ふ又高松藩に於ては船中荷爲替小爲替等の制度を設け糖業者の金融に便せりと云ふ蓋し需用地の狀況を審にして之を當業者に紹介し有利なる販路を指導するは政府の宜しく務むべき所なり。

五、蔗價の公定　甘蔗の時價を公定し賣買者をして之れに據らしむるは製糖業を庇護して原料買入を容易ならしむるにあり耕作者は之が爲めに幾分不利を蒙むるの感あらんかなれども又之に依りて年々一定の需用者を得今の如く賣口不定にして往々製造家に苦しめらるゝことなく且つ時價公定の方法は精密なる標準を以てせるは公平を得るに難からざるを以て數年を平均せば遂に耕作者の不利を見ざるならん況んや製造業を利するは延て耕作者を益するものたるを知らず敢て異論を挾む所なけん。

六、糖業の教育　產糖國の何れも糖業教育の行はるゝあり普通教育の未だ發達せざる今日之を本島に施す能はざるも時機到來せば簡單なる甘蔗栽培法製造法等を教習し以て糖業の智識を普及せしむるを得ん。

七、產業組合の準備　本文糖業團體組織の必要を論せるが希くば之を進めて產業の組合組織たらしめ純然たる營利的團體として糖業經營、資本融通の機關たらしめば其の効用更に大

なるものあらん。

八、出版物の配布　耕作及製造改良の利益を周知せしめんが爲に通俗的に概要を編述し又は趣向斬新なる配札を印刷し廣く民間に配布するも亦一方法たり。

九、甘蔗保護の設備　甘蔗は風水及害蟲の恐れあるものなれば之を濟はんには蔗園收穫保險の方法を講ずるを可とす又內地阿波國に於ては藍作に限り靑田を以て抵當に供し金錢を貸借するものゝ爲めに登記を特許せるあり本島夙に甘蔗賣買の習慣あるを見れば是亦一要件なるべし。

十、牛畜の保護　在來製糖器械の原動力は皆牛力を藉らさるなし然るに牛疫の流行連年曾て絕ゆることなく斃死歲々千を以て計ふ、牛畜保護は舊時已に政令の關せらるゝありと雖も今に尙ほ完全ならず這は一般農業に關することながら糖業上の一要件としても當局者の宜しく務むべき所にして原動力缺亡の虞なからしめざるべからず。

十一、副產物の奬勵　糖業の副產物として「アルコーホル」「ラム」等の如き糖業の盛興と共に之を發達せしむるの利あるを思ふ本業附帶の好產業たり。

此等各種の方面に於て執るべきの方途は尙ほ此に止まらざるべし、余之れを聞く獨逸の糖商人

は數萬の金を募集して砂糖の消費量を增進するの途を講せりと又米人某は數千の奬學金を大學に寄附して甘蔗莖の研究を勸めりと然れ共事の技術以外に屬し余の職責範圍に入らざるものは敢て細說を試みず唯之を終るに糖業の前途頗る多望なるは上來所述を以て明說するに足るものならん。

本島糖政上施設の急務

此の有望なる糖業は之に資本を投して損失を招くの憂ひなきを信じ試みに個人營業としての設計を立て其の利益を計算したるに貳拾萬乃至百萬圓の資本を投せば年々九步以上の利益を收むる割合なり蓋し糖業利益の確固たる斯くの如し故に假令之を放任するも民業自然に之に嚮て發達するは疑ひもなきことながら唯農業の進步は商工業と異りて特に國家の力に依るべき必要あるは既に陳述せる所の如し各國農業の歷史を繙くに地方の豪族眼前の利益に戀々せず當初損失を蒙るをも厭はざるの姿勢を執り專心之に盡す者ある乎將た政府の力を以て勸誘的に改良法を强ゆるに非ざれば其の發達極めて遲々にして其の成功も亦た期し難しとなす本島各地を觀るに豪族の散居せる者皆無と稱すべからずと雖も金利高步の今日に方り比格的利益少き農業に向て資本を投じ不幸損失を招くを厭はざる者に至りては恐らく之を望み難し金融機關として長年月

間低利に資本を貸付する勸業銀行或は農工銀行の如き設備あるなり農業社會に團體的機關の改良勸誘に利用すべきもの亦之あらず之を窮むるに迅速成効を期せんと欲せば政府自ら手を下すの外あらず然れ共事業殊に殖產業の如き之を人民の起業に任すべきは之れ經濟上の原則にして若し有利多望の事業なるも當時民力の幼弱若くは疲弊し到底之に當るに勝へざるものゝ如きは公益の爲め政府自ら起て之に膺らざるべからずと雖も是れ變則なり是れを以て政府民業に向て手を下さんとせば(一)其事業の果して有利にして且つ公益的なりや(二)民力の到底任へ得ざるものなりやの二點を審にし依て以て判斷を下すの外あらず但し輓近經濟界の狀況各國何れも中央集一の傾嚮あるは夫の「トラスト」の勃興を見るを以て之をトすべく此の傾嚮は勢ひ終に政府の專賣事業を促すに至るなるべし但だ所は之を後年に看るべきことにして之を今日の糖業に論ずべきに非らず茲に官業と云ふは獨り民業に放任せず政府之に干涉して補助奬勵に務むるを謂ふなり我總督府果して糖政刷新の必要を認むるに於ては露國政府の自國糖業發達の爲めに施行せる專賣的意志にも劣らざる底の鞏固なる決心を以て之に臨み之が實行に膺らしめんが爲めに適當なる機關を設け之が運用に任するの人又其の選を得たらんには甘蔗改良の事五箇年を期して見るべきの成功を奏し十ヶ年を期して完成すべきなり昔時普魯西國フリードリヒ大王某父王

の遺志を紹き大に力を農業改良に盡くさるゝや父王專ら節儉を勤めて富源の枯渇を禦ぎ以て普國財政の基礎を建てられたるの後を承け一意富源涵養に志し晝夜親しく村落を巡り直接地方の小吏に命令し以て亞麻、穀類牧場の牛馬より野菜類の改良に至る迄躬親ら鋤犂を握らんとするの姿勢を以て指導奬勵の勞を執り馬鈴薯に向ては殊に力を注ぎ當時之を栽ゆる者極めて稀れなりしを七ヶ年間に於て四倍の產額に增進せしめたり當時王の斯業に熱心なる非常の決心を以て之に臨み施設殆んど極端に走れるものあり細言すれば吏員の馬鈴薯耕作奬勵に勉めざるものを淘汰し又は農夫の馬鈴薯耕作を肯せざる者は之に罰金を科し强制の爲めには憲兵を使用せることさへあり斯く極端に走れる結果は天然風土の適せざるをも顧ず人民を强て不利を蒙らしめたるの過失を免れ難しと雖も今にして當年を顧みれば普國農業の恢興は實に此の時に在り此の合理的强制政策の美果に外ならざること明白にして王の偉績は千歲の下沒すべからざるものなり放任制度の下に於ては遲々たる農業進步に一刺激を加へ其の速度を急ならしめんと慾せば勢ひ國家の力に賴らざるべからず況や本島の糖業に於ける普國の馬鈴薯に於けると同日の論に非ず糖業の興廢は實に本島の財政否帝國殖民政策の成敗に關する重事なれば政府の之に對する態度は極めて鄭重に之に施す方針は必ず確乎不拔ならざるべからざるなり政府果して此の決心を有

せば之を實行するの方法として糖業奬勵法の如きを發布し之に基き適應なる機關卽ち臨時臺灣糖務局とも稱すべきものを設置し支局又は出張所を產糖地に配置し上述せる改良方法の實施に關する事務は總て之に一任し以て實績を擧ぐるに努めしむべし而して此の機關は明治三十五年に開設するの計畫を以て本年より之が準備に着手し事業の順序は種類改良を起首とし苗圃を設けて種苗を養生し勸誘的否止むを得ずんば强制的に之を農民に栽へしめ之と同時に栽培法を敎へ一定地方よりして漸次各地に普及せしめんことを期す其の機關の組織配置及事業の施設方法順序等は別紙計畫書の說明に讓り當に施設すべき急務の大綱を擧げて左に載錄す。

一、糖業奬勵法の發布

機關の發動は法令の據るべきものなくんばあらず依て律令を以て糖業奬勵法を發布せられ奬勵の方法、特典の附與、監督制裁等に關する諸件を規定せらるゝ必要あり卽ち別紙に草按を附せり。

二、臨時臺灣糖務局官制の發布

重大なる本事業の施設は普通の政廳卽ち民政部の一部に置かんよりは獨立機關の之に膺るに若かず依て臨時臺灣糖務局を設置し勅令を以て官制を發布せらるゝの必要あり別紙草按

を附す。

三、糖務局支局を南部地方に設置すること

本事業の施設は先づ南部に始め漸を以て擴張し中部北部よりして漸次全島に及ぼさんと欲す而して本局を南北に置き地方の情形に應じて適當の地に支局を設置せんと慾す臺南地方に設置すべき支局の位置は之を別紙に錄せり中部北部其他に至りては事業實施の日に至り更に定むる所あるべし。

四、技術生の養成

新種配布に伴ひ栽培法を教習するに付ては之に當るべき技術者なかるべからず但し今日其の人に乏しきを以て本年より之が養成に著手し各支局及出張所に派遣するの必要あり。

五、技手を布哇に派遣し種苗を購入する事

種苗購入は本事業最先の要務なるに從來の如く依托購買にては選擇の不完全と輸送中の損害を恐る故に特に技手一名を布哇に派し完全に種苗を得んとするの意見。

六、八重山島及本島に栽培せらるゝ外國種を買收し種苗に供すること

八重山島に於ては爾來已に布哇種を移植し本島亦數年前より之あり種苗は悉く之を布哇に

仰がんよりは之を八重山及本島にも採らんとするの意見。

七、臺南地方に苗地を設くること

事業の進行に伴ひ種苗供給を計らざるべからず依て南部適當の地に種苗養成場を設置し之に養成せられたる蔗苗は當初一兩年間無代にて人民に交附するか或は機宜に從ひ相當代價若くは極めて廉價に賣下ぐるの方法を採るの意見。

八、甘蔗試作場の設置

糖業改良の爲には勉めて學理の應用を計らざるべからざるが故に適當の地に試作場を設け農藝及製造に關する技術を研究し尚ほ後日副產物問題の起るに先ち之が試驗に從事せしむるの意見。

九、小壓搾器各種の購入及其の試驗

大器械据付は地方に依り行はれざる所あり現時の狀態は尚ほ小器械改良の便要多し然れども洋式小壓搾器の何れを採りて之を本島に用ふるの果して最良なりやは鄭重なる試驗を經ざるべからず是れ本項の主旨にして試驗を經ざるべからず試驗を經適當と認定せるものを民間に貸付又は賣下ぐるの意見。

十。產糖組合の組織を促すこと

產糖組合の組織改良の爲め且つは本事業諸般の施設に利用せんが爲め糖業者をして團體を作らしむるの必要あり完全なる產業組合組織は到底今日に望むべからざるも今の時程度相應のものを作らしめ以て後年大成の端緒を開かんと欲する所なり。

十一、甘蔗栽培に適する新墾地の開拓を奬勵すること

未開地の甘蔗栽培に適するもの尙ほ之なきに非ずと聞く將來の振興を期するには特典を與へて此等の地の開墾を奬勵し其の所在地を踏査し實況を世人に知らしむるの要あり。

十二、栽培法の改良に伴ひ水利開發を圖る事

本島に於ては未經驗なれども甘蔗栽培に灌漑の有利なるは深く信ずる所なり而るに本島水利未だ甚だ發達せず糖業改良の爲には漸次其の開發を圖らざるべからず。

十三、事業計畫書を調製し資本家の參考に供すること

大仕掛工場組織の事業設計書を調製し一方には本島人に大規模工場の何たるを示し一方には內地或は外國人にして糖業に資本を投せんとする起業者の參考に供せんと欲す。

十四、產糖地の狀況に應じ大仕掛の起業を勸むること

地方の經濟事情によりては大仕掛の起業の最も利益あるを覺ゆ如此場所に善く注目精査し以て資本の投入を謀らんとするの意見。

右は臨時臺灣糖務局の設置と共に當に著手すべき所にして且つ當面施設に難せざる事項の要領を提せるのみ但だ其の中二三は是れ準備に屬するものなり憶ふに若し克く之を推行して誤まらず施設巧あり事業益々其の歩を進め其の範を擴むるに至らば斯業の大蓋し豫想の外にあらん而して本文論ずる所の如き必ず規模の小所見の隘侮ゆるものあらん然りと雖も余要職を叨りにし況んや就任未だ半歲を出でず自ら省みて私に恐るゝものは見る所事情に暗く計る所實況に副はず以て或は大業を誤らんことを是を以て苟も模糊を談り漫りに議論を壯にし以て快を一時に取ることを屑しとせず事々忖度屢〻內に顧みて苟も外に逸せざらんことを勉め歸する所唯實行如何にあるのみ本文數千言略々所信を悉せり若夫れ時移り物更り世運の推行と共に本島糖業の面目全然一斷するの曉後人之を讀み意見の陳腐所論の拙劣を嗤ふ者あらんには是れ余の窃に期待する所にして斯くの如き機運の速に到來し一編の蠹紙故書筐底に微笑を洩すの快を與ふるあらば余の喜び何ぞ之に過ぐるものあらん終に臨み一言を附して後年に質すこと爾り。

正誤

正	頁數	誤
八萬三千五百五十一甲	(六十三頁終より五行目)	八萬四千六十九甲餘
五萬四千二十三斤	(六十三頁終より三行目)	五萬四百十九斤
十五種	(六十六頁始より九行目)	十八種
百五號	(六十六頁實生番號中)	百號
マウリシアムギンカム	(六十八頁)	マルリシアムギンカム
エローカレドニア種	(七十一頁)	ニユーカレドニア種
三百七十九甲		三百七十甲
百六十五甲		百七十甲
五百四十四甲	(同 頁)	五百四十甲
四十二甲	(同 頁)	四十甲
六千四百萬本	(七十二頁終より二行目)	四千萬本
百三十九號	(七十三頁)	百三十三號
十五種	(百〇五頁)	十八種
鷲	(附錄五頁)	鳶
南靖庄	(三十一頁)	南請社
南靖庄	(同 頁)	南請比
シラツプヒーター	(三十三頁)	シラツプヒーター
後藤男	(四十五頁)	近藤男
配付品種十五種	(六十九頁)	配付品種十八種
△△△十五種中の第三位		△△△十八種中の第三位
配付十五種	(七十頁)	配付十八種
新種十五種	(同 頁)	新種十八種
大正二年度四、九九三、〇〇〇		四五、九九三
大正三年度七、八八四、〇〇〇	(八十頁)	七九、八八四
	(同 頁)	

(註) 右の數字訂正により從つて次行「近年同補助數」より「認むるを得べし」迄は削除すべきものとす

大正二年度三八、四六八、〇〇〇		三七八、四六八
大正三年度三九、二九、〇〇〇	(八十二頁)	三九、二九

(註) 從つて第八十三頁第一行目「排水漑漑」より第二行目「知るべし」迄削除

日本郵船株式會社

東京市麹町區有樂町一丁目一番地

電話本局 四〇二一番 四〇二三番 四〇二五番 四〇二二番 四〇二三番 四〇二六番

臺灣行

(內地鐵道各主要驛ヨリ臺灣鐵道各主要驛行船車連絡切符ヲ發賣ス)

船名	神戸發	門司發	基隆着
因幡丸	毎月一日、十六日	二日、十七日	五日、二十日
信濃丸	毎月六日、廿一日	七日、廿二日	十日、廿五日
備後丸	毎月十一日、廿六日	十二日、廿七日	十五日、三十日

右三船共何レモ六千噸ノ巨船ナルヲ以テ臺灣ノ荒海ト雖動搖ノ憂ナク航海安全也一、二等各室設備ノ優良ナルハ勿論乙種二等娯樂場ヲ備ヘ又三等室ヲ日本座敷風ニ改メタル等舊式客船ニ比シ面目ヲ一新セリ

■創立　明治四十三年十月
■資本金　金貳百萬圓（拂込濟）
■營業の目的　製糖業。樟腦業。輕便鐵道土地開墾及植林の經營
■砂糖製產高　一ヶ年十萬俵
■樟腦腦油製產高　一ヶ年一百萬斤

沖臺拓殖製糖株式會社

本社　沖縄縣那覇區（嘉手納製糖工場、西原製糖工場（國場製糖工場、具志川製糖工場、牧原農事部（目下建設中））

支店　臺灣南投廳林圮埔街（下崁製糖工場、前大埔製糖工場、新威製糖工場、林圮埔腦館、集々腦館、草嶺腦館、林圮埔輕鐵發着所、林內輕鐵發着所、東埔蚋輕鐵發着所、）

大阪事務所　大阪市南區長堀橋北詰西角

●砂糖　●小麥粉　●外國米　●肥料

輸出入　貿易商

增田屋

上海英租界江西路第八號　安部洋行

臺灣臺南大井頭街　安部幸兵衛臺南支店　電話二七六番

東京日本橋區小網町末廣河岸二號地　安部幸兵衛東京出張所　電話（特長四三四一番・長四三四二番　浜花（長四三四三番

横濱南仲通三丁目　安部幸兵衛商店　長電話（六一〇六六番・八〇六番・四〇六六番

大阪南區末吉橋通二丁目　安部幸兵衛大阪支店　長電話（南一〇六〇番・南一五七五番　南三二五五番

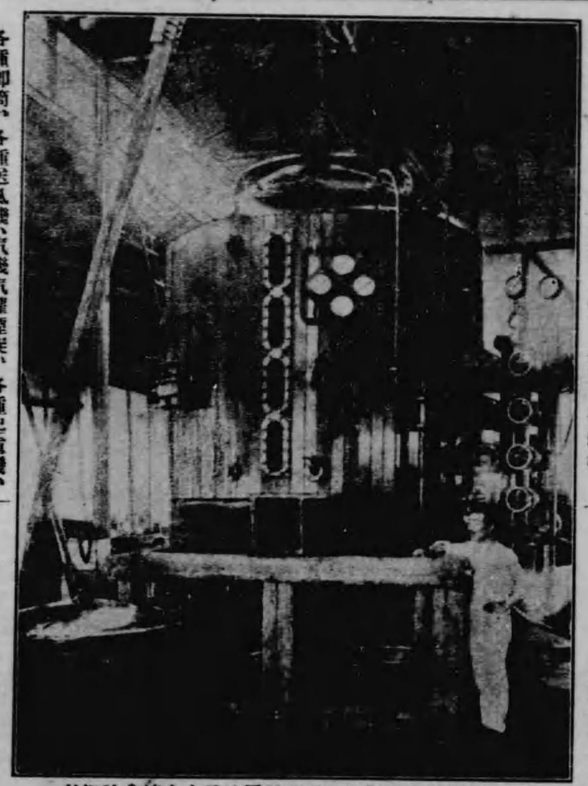
沖縄縣那覇區東千六百八十五番地　安部幸兵衛大阪支店沖縄出張店　電話六番

名古屋市傳馬橋通（小鳥町）　安部幸兵衛名古屋出張所　電話三五六番

下關市觀音崎町七十五番地　安部幸兵衛下關出張店　電話長一一六〇番・特長九九一番

■弊所營業科目■

弊所ノ營業ハ主トシテ製糖用諸機械、化學工業用諸機械、製紙用諸機械、各種喞筒、各種送風機、汽機汽罐煙突、各種起重機、其他一般諸機械、諸機械設計工事監督等ニシテ總テ施工ノ態切正確ト期日ノ迅速ヲ期シ責任ヲ負フテ御高需ニ應ス就中製糖用諸機械ハ弊所ノ最モ得意トスル所ニシテ内地ハ勿論臺灣及沖繩ノ諸製糖會社ニ多大ノ供給ヲナシ好評ヲ博シツヽアリ



田中機械製作所製作ノ兵庫縣尼崎日本水産會社據付
八噸パキユアムパンプ

■工場設備■

工場ニハ旋盤、面削盤、平削機、形成機、鑽孔機等各種ノ仕上用機械ヲ設備シ總テ最新式高級鐵工機械ニシテ宇治川水力電氣ニ依リテ運轉シ樂上ニハ十噸架起重機ヲ設ケテ工場内ニ於ケル諸機械ノ組立材料ノ運搬ニ便ナラシム尚ホ製作用計器及原器ハ最モ正確ナルモノヲ使用シ製品ニ對シテハ確實ナル試驗ヲナス

■設計部■

設計部ニハ熟練ニシテ多年ノ經驗ニ富メル專門ノ技師數名ヲ聘シテ所主自カラ之レヲ督シ常ニ最新ノ智識ヲ吸收シテ技術ノ練磨ヲ怠ラズ設計ノ確實迅速ナルヲ期ス

田中機械製作所

（所主　田中岩吉）

大阪市西區市岡町八五五番地

電話西四五三一番

大正四年七月二十五日印刷
大正四年七月二十八日發行

定價金壹圓五拾錢

著者　兵庫縣武庫郡灘大石十四番地　河野信次

發行者　神戸市元町三丁目百三十五番邸　品川仁三郎

印刷者　神戸市三宮町一丁目三百二十番邸　辻岩雄

印刷所　神戸市三宮町一丁目三百二十番邸　明輝社

不許複製

358
60

終